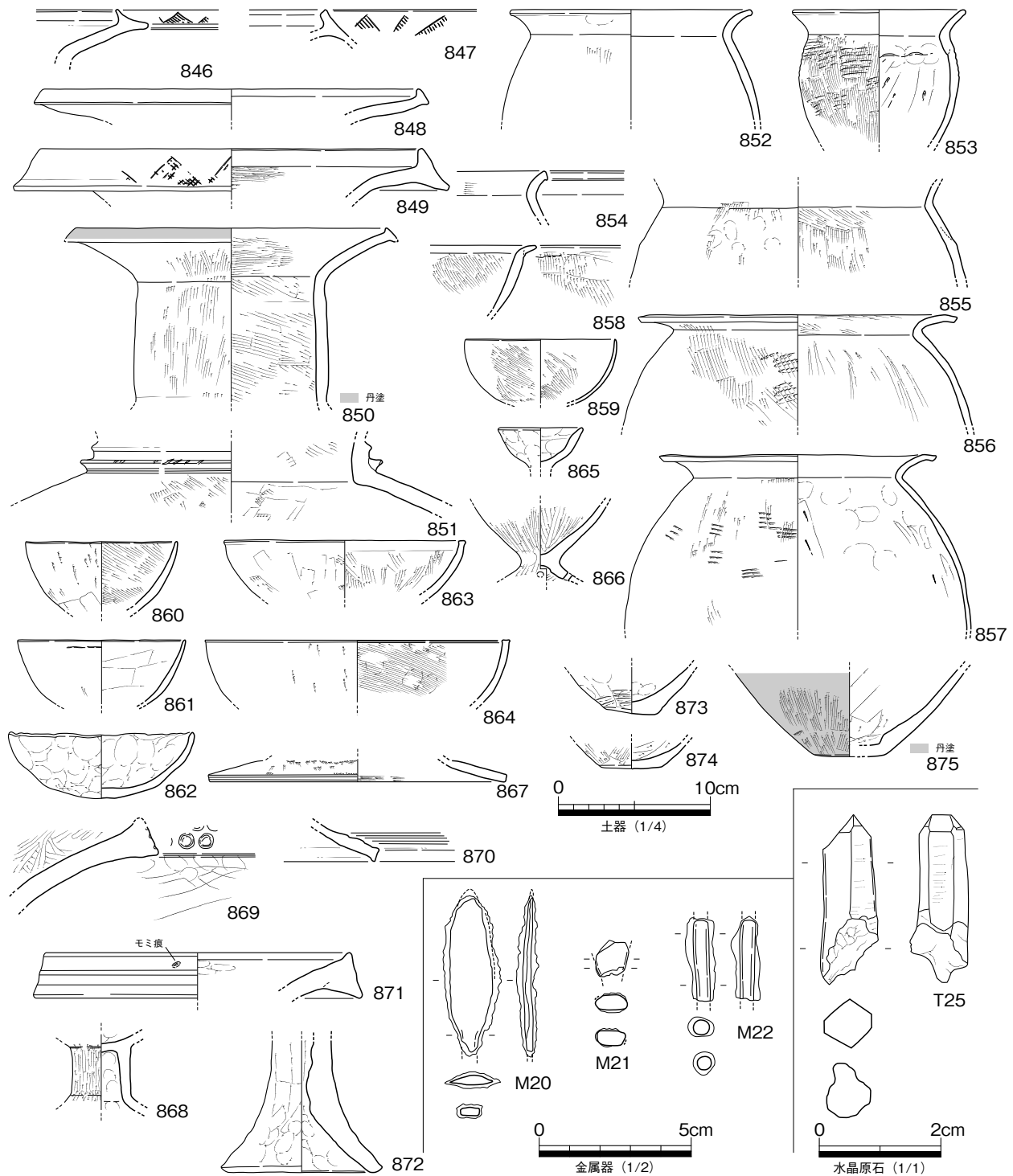


M22 は断面円形の棒状鉄片で、上端は破断面が錆化し摩耗する。

T25 は水晶原石の自形結晶である。先端が尖り、柱は六角を呈す。下端は斜行した劈開面を残す。加工痕は認められないことから、集落に持ち込まれた後、活用されないまま遺棄されたものと推察する。

ベッド状遺構と炉跡の位置関係からみて、本竪穴建物の入り口は図の左側、つまり西側であった可能性が高い。

出土遺物からみて本建物の埋没時期は終末期古段階と判断した。水晶原石 T25 は 未加工の原石結



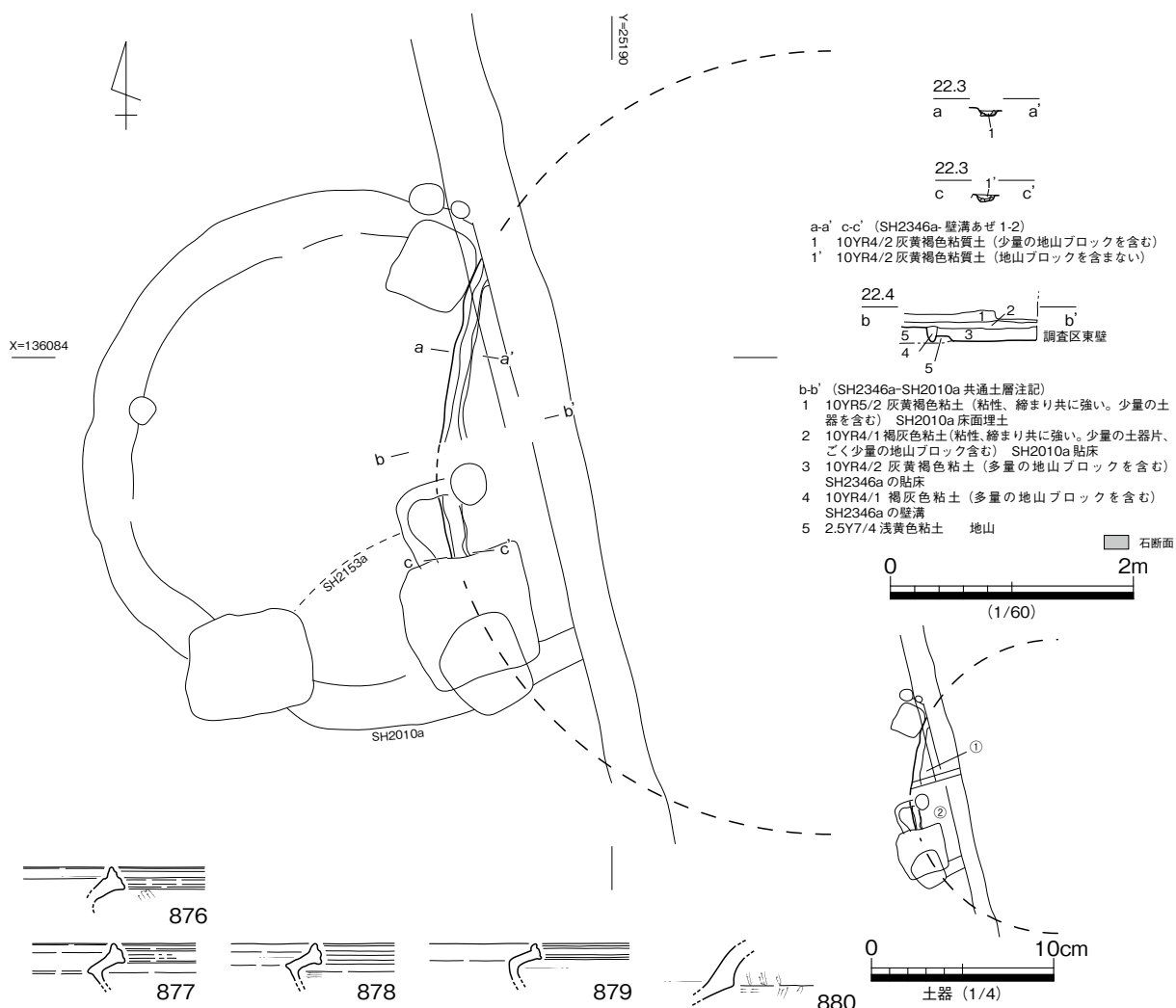
第 109 図 竪穴建物 SH2303a 出土遺物実測図

晶体である。水晶原石は花崗岩地帯である本県でも入手することは可能だが、遺跡内で水晶製の玉が多数出土しているわけではない（例外的に1点のみ算盤玉が出土している）ことから、水晶玉製作工程初期の母岩と位置づけるのは困難である。ただ、この結晶体のサイズ感は平所遺跡（鳥根県教委 1976）の水晶玉製作工程等、山陰地方における水晶玉製作遺跡で出土する原石とよく似ており、遠方から持ち込まれた可能性がむしろ高い。また上記報告の鉄製工具に類似する鉄器は小形針状鉄器（鉄錐）として今回の調査でも出土しており、今回玉生産に関わる遺物が断片的に出土したものと見ることもできる。ただし実際に生産されたことを示す未製品や剥片等の出土がほぼ無であることから、玉製作や鉄器製作等日本海側の遺物が流入した可能性はあっても、継続的な玉生産は定着していない。

(40) SH2346a

東側建物集中域の東端に位置し、円形掘方の数分の1のみを検出したに過ぎない。平面が円形で、西に隣接する竪穴建物 SH2010a を切り、東の調査区外で過去に調査が行われた保育所調査区付帯施設下水管1区の SH-03 に合致するものと推定し、直径約 6.1 m の規模と推察する。推定床面積は 27.8㎡。

残存する屋内遺構は壁溝のみである。出土遺物は床面及び下層から 876・880 の土器、貼床層から 877～879 の土器が出土した。876 及び 879 は後期前半中段階を下限とし、下層出土の 880 の高杯は後

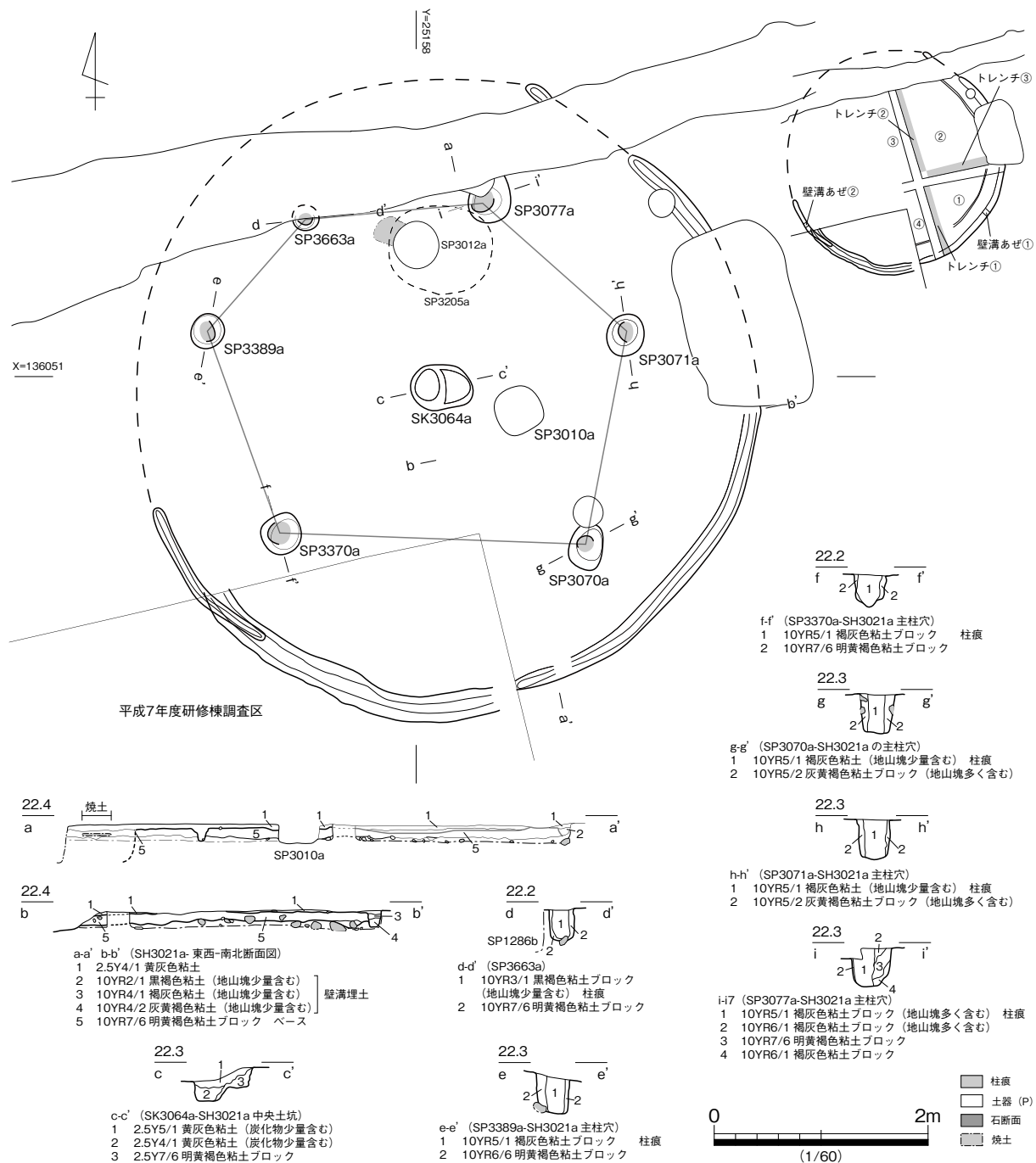


第110図 竪穴建物 SH2346a 平・断面図 出土遺物実測図

期前半新段階から出現する高杯である。出土遺物は僅少だが、本建物の構築時期は後期前半中段階で廃絶時期は後期前半新段階に位置付けられる。

(41) SH3021a

3 区北西隅で検出した円形竪穴建物である。直径 5.9 m で、検出面から床面までの深さは 5cm に満たない。主に外周の壁溝で平面形を確認した。推定床面積は 26.5㎡。重複する中期後半の掘立柱建物 SB1265b・SB1353a・SB1354a・SB1352a に後出し、後期前半の掘立柱建物に切られる。南西の一部は研修棟調査区で SH01 として調査されている。



第 111 図 竪穴建物 SH3021a 平・断面図

主柱穴は本調査区内で6基（SP3663a・SP3389a・SP3370a・SP3070a・SP3071a・SP3077a）を確認しているが、南の柱間は他と比べて長い。平成7年度の研修棟調査区において柱穴を想定すると7基が柱間約2mで巡る形となり都合がよいが、柱穴は検出していないので不明である。

床面中央には小土坑SK3064aがあり炭化物がごく少量含まれていた。また、床面で焼土の広がり記録されている。同様の焼土はaライン断面写真のトレンチ下部でも確認できる。その位置はSB1353aの構成柱穴であるSP3205aと重複する。すなわち、これらの焼土は下位の掘立柱建物に伴うものと考えられる。つまりSP3205aの平面形が西方向にもう少し広がる可能性を考えておく。

<出土遺物>

881・882はSP3370a出土の壺である。中期前半新段階に属す。SP3370aは掘立柱建物SB1353aの構成柱穴であるSP3388aと重複しており、その柱穴のものが混在したものとする。883は中期後半新段階の高杯である。床面出土とされる。884は中期後半の高杯脚である。SP3077a出土。885は安定した平底の底部で後期前半古段階を下限とする。886は後期前半新段階を下限とする底部である。

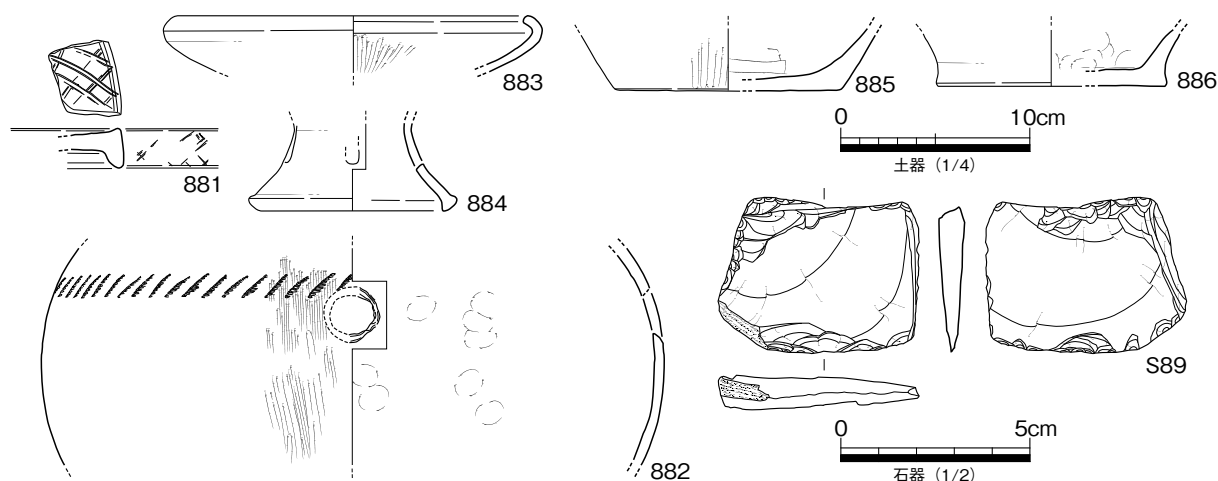
S89はサヌカイト製スクレイパーである。下縁に不規則ながら調整加工を施す。

出土遺物は中期から後期前半までの時期幅がある。多くは古い時期の混在と考えられ、重複する掘立柱建物SB1352aの構成柱穴であるSP3497aで出土した1708が後期前半新段階の吉備系の高杯脚であり、その土器と上記886の底部が本建物に属す遺物と考えておきたい。したがって本建物の廃絶時期は後期前半新段階と判断した。

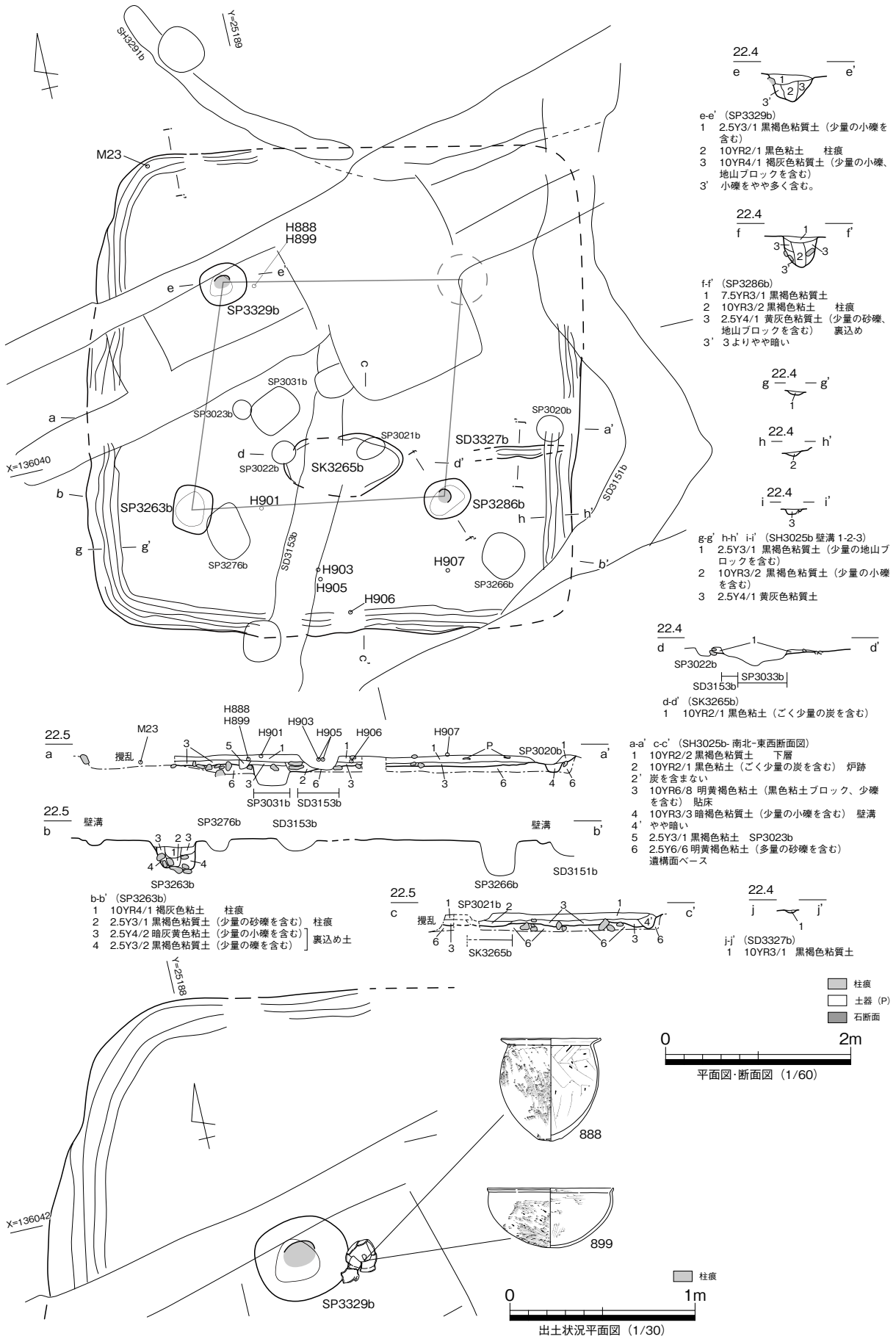
(42) SH3025b

3区南東で検出した方形の竪穴建物である。一辺5.2mで検出面からの深さは0.15mを測る。推定床面積は26.9㎡。古墳時代前期の溝SD3151b及びSD3153bに切られる。主柱穴は未検出1基を含めて4基（SP3329・SP3263b・SP3286b）で柱間は2.5～2.7mで若干平行四辺形の配置となる。中心から南に寄って浅い炉跡SK3265aを検出した。黒色粘土が堆積するが炭化物は多くない。断面図では床面全面に貼床（a・cライン3層）が存在するように記録されている。また炉跡SK3265bに向かって東壁から細い溝が派生する。間仕切溝の可能性もある。床面から鉢を中心とした土器が出土した。また北西隅の床面からやや浮いた位置で、樹皮を巻いた矢柄の一部が付属する鉄鏃が出土した。

<出土遺物>



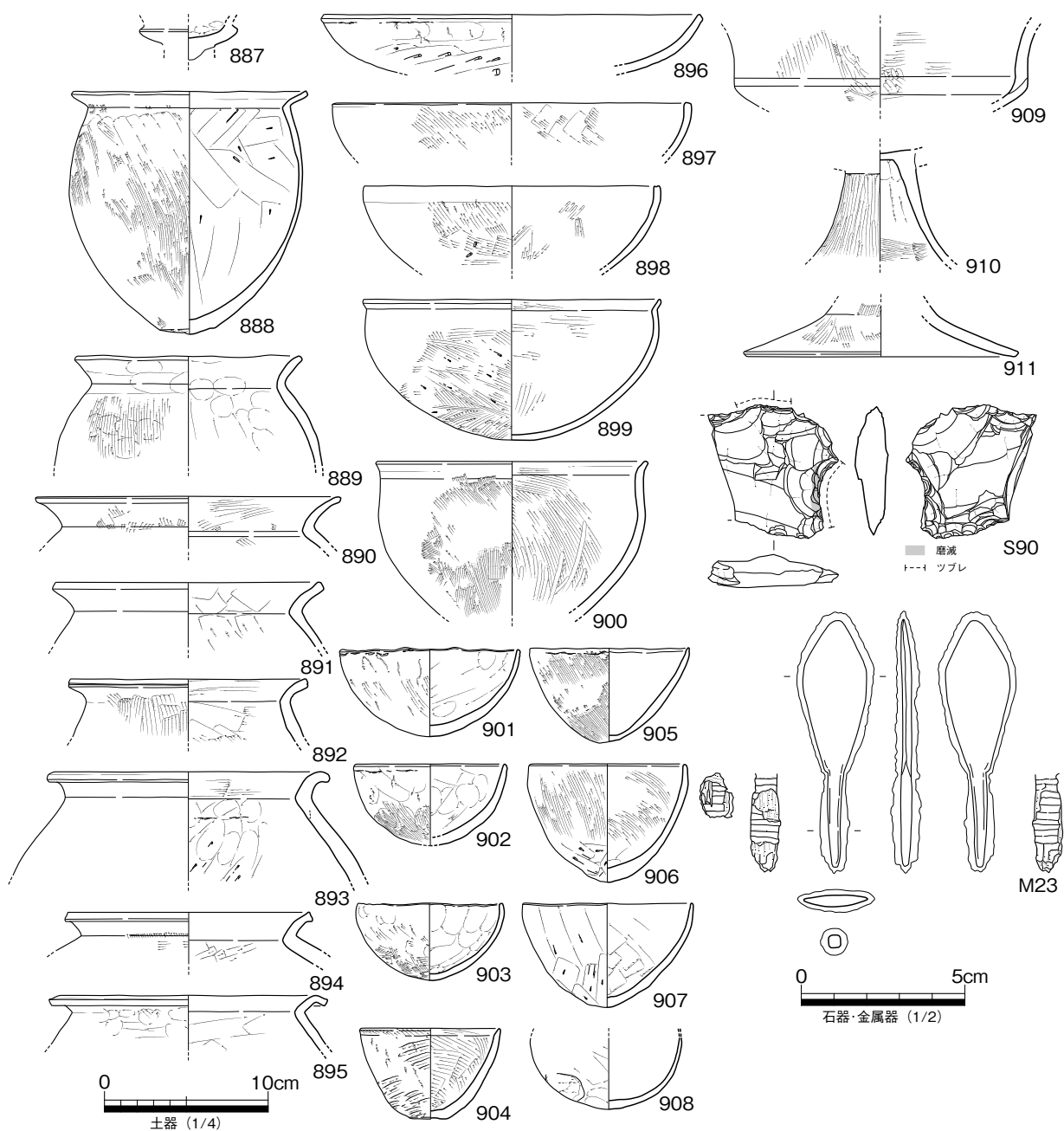
第112図 竪穴建物SH3021a出土遺物実測図



第 113 図 竪穴建物 SH3025b 平・断面図 出土状況図

887は脚台付小形丸底壺である。壺体部が矮小化した形態で終末期古段階に属す。888～895の甕は口縁部が強く屈曲して外反する893・894・895が終末期古段階、それ以外は後期後半新段階に属す。896～898は丸底の直口中形鉢で口縁端部は面取りを行っており終末期古段階に属す。899の鉢は終末期、900は後期後半新段階に属す。901～908はどれも尖り底の形態を呈しており終末期新段階には下らない。なお、887・888・899・901・905が胎土H、889・907が胎土Hbである。

S90はサヌカイト製打製石庖丁で混在品。M23は圭頭形鉄鎌で茎部に樹皮を巻いた矢柄の一部が残る。出土土器から本建物は終末期古段階に廃絶したものと判断した。鉄鎌は同型式が1A区SH1059aで出土しており、どちらも厚みが5mm以下に整えられた完成品である。外の遺構で出土している鉄器製作の素材である棒状や板状鉄片とは厚さが異なる。当初、本建物出土として取り上げられていたM41は出土位置を点検した結果、SH3245bの掘方内と判明したので修正した。



第114図 竪穴建物 SH3025b 出土遺物実測図

(43) SH3026a

3 区西側で検出した方形竪穴建物である。一辺約 4.4 m で床面ほぼ全面に基盤層に酷似する貼床層の存在が記録される。推定床面積は 20.0m²。主柱穴は 4 基 (SP3154a・SP3153a・SP3157a・SP3260a) で柱間は 2.3～2.4 m、南寄りに炭化物を含む不定形土坑や焼土の広がり認められる。

主柱穴に囲まれた範囲には投棄された土器片が多数検出されたが、互いに接合して良好な状態に復元できるものは少ない。

<出土遺物>

912 は後期後半の長頸壺である。頸部が短く、口縁部が長いことから後期後半新段階に下るものと考ええる。913 は中期後半の細頸壺の混在品。914～916 は 912 と同様の頸部がやや短くなった長頸壺の口縁部と推察する。後期後半である。917 は複合口縁壺である。形態から後期後半新段階に位置づけられる。918・919 の甕は口頸部内面稜線が緩いことから後期後半に位置づけられる。920～923 の直口鉢は口縁端部の面取りが残ることから後期後半に位置づけられる。914・916・925 は胎土 H の土器である。

S91 はサヌカイト製剥片である。打面を調整した後に通常の打撃を施して剥離しており、稜線を敲打分割して生じた剥片ではない。石材産地の坂出市金山から搬出された板状の大形剥片を素材に剥離したものと推察する。ただし、本建物以前に属すものである。

M24 は鉄製の刀子片である。柄に木質が遺存する。M25 はガラス化した溶融粘土塊である。大形攪乱の至近で出土しており、近現代の混入の可能性を否定できない。

出土土器からみて 912 の壺が示す後期後半新段階を本建物の廃絶時期と考える。

(44) SH3040a

3 区のほぼ中央付近で検出した 4 基の柱穴である。1 間×1 間の掘立柱建物の可能性もあるが、他の掘立柱建物と比べて柱穴の直径が最大でも 0.6 m と小振り掘立柱建物とするには貧弱である。柱間は 2.5～3.5 m とやや大きいが、竪穴若しくは平地式の建物柱穴と判断した。

柱穴は SP3359a・SP0022a・SP3992a・SP0001a で柱痕は 0.15 m を測る。

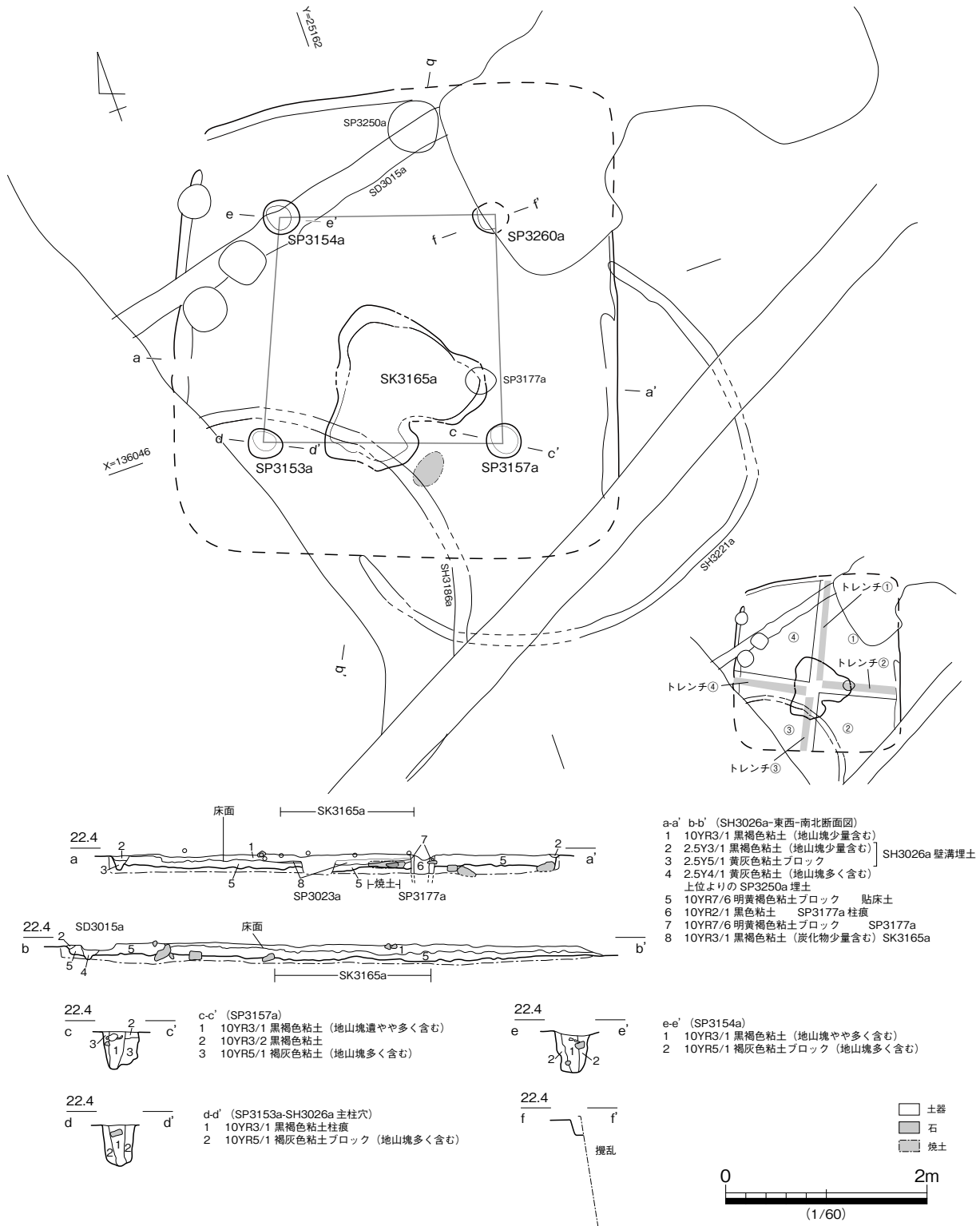
<出土遺物>

927 は内面斜格子文を施す中期前半新段階の壺である。928 は長頸壺肩部に羽状圧痕文を巡らせる備後地域の搬入品。929～931 は後期前半の甕形態である。932・933 は後期前半新段階の高杯である。本建物の廃絶時期は後期前半新段階と判断した。

(45) SH3041a

3 区の西側で検出した 2 基の柱穴である。近接して竪穴建物中央土坑になりうる黒褐色埋土の土坑が存在することから、北側に 2 基の柱穴を想定し、竪穴若しくは平地式の建物柱穴と判断した。

出土土器は小片のみで、時期を判別する材料が乏しいが隣接する SH3221a の壁溝との切り合いは本柱穴が壁溝の掘削に切られるように写真 (写真図版 36・40) から判断した。したがって、SH3221a の所属時期である後期前半中段階より古い時期に廃絶した竪穴建物である。



a-a' b-b' (SH3026a-東西-南北断面図)

- 1 10YR3/1 黒褐色粘土 (地山塊少量含む)
- 2 2.5Y3/1 黒褐色粘土 (地山塊少量含む)
- 3 2.5Y5/1 黄灰色粘土ブロック
- 4 2.5Y4/1 黄灰色粘土 (地山塊多く含む)

SH3026a 壁溝埋土

- 5 上位よりの SP3250a 埋土
- 6 10YR7/6 明黄褐色粘土ブロック 貼床土
- 7 10YR2/1 黒色粘土 SP3177a 柱痕
- 8 10YR7/6 明黄褐色粘土ブロック SP3177a
- 9 10YR3/1 黒褐色粘土 (炭化物少量含む) SK3165a

22.4
c-c' (SP3157a)

- 1 10YR3/1 黒褐色粘土 (地山塊遺や多く含む)
- 2 10YR3/2 黒褐色粘土
- 3 10YR5/1 褐灰色粘土 (地山塊多く含む)

22.4
e-e' (SP3154a)

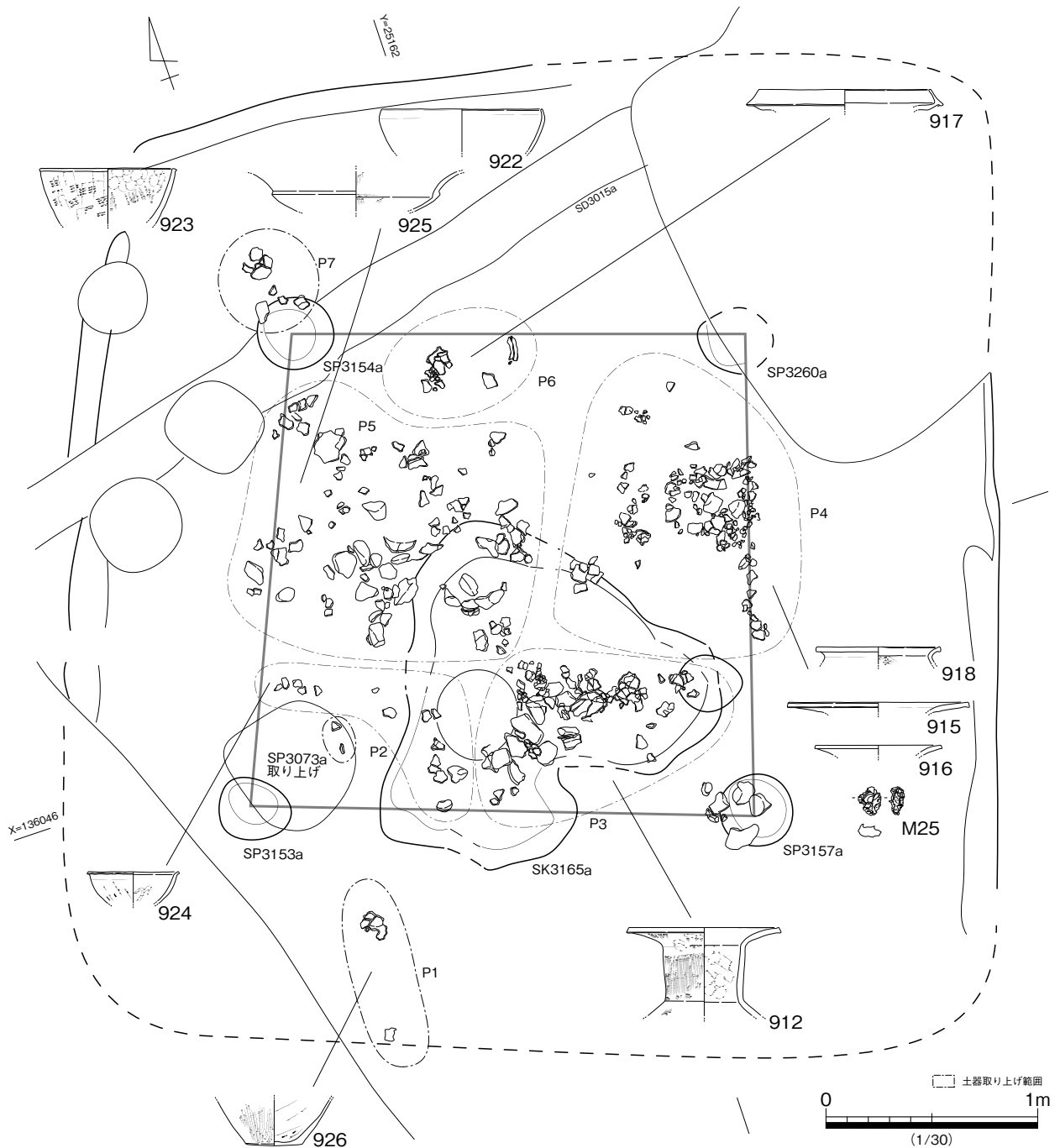
- 1 10YR3/1 黒褐色粘土 (地山塊や多く含む)
- 2 10YR5/1 褐灰色粘土ブロック (地山塊多く含む)

22.4
d-d' (SP3153a-SH3026a 主柱穴)

- 1 10YR3/1 黒褐色粘土柱痕
- 2 10YR5/1 褐灰色粘土ブロック (地山塊多く含む)

攪乱

第 115 図 竪穴建物 SH3026a 平・断面図



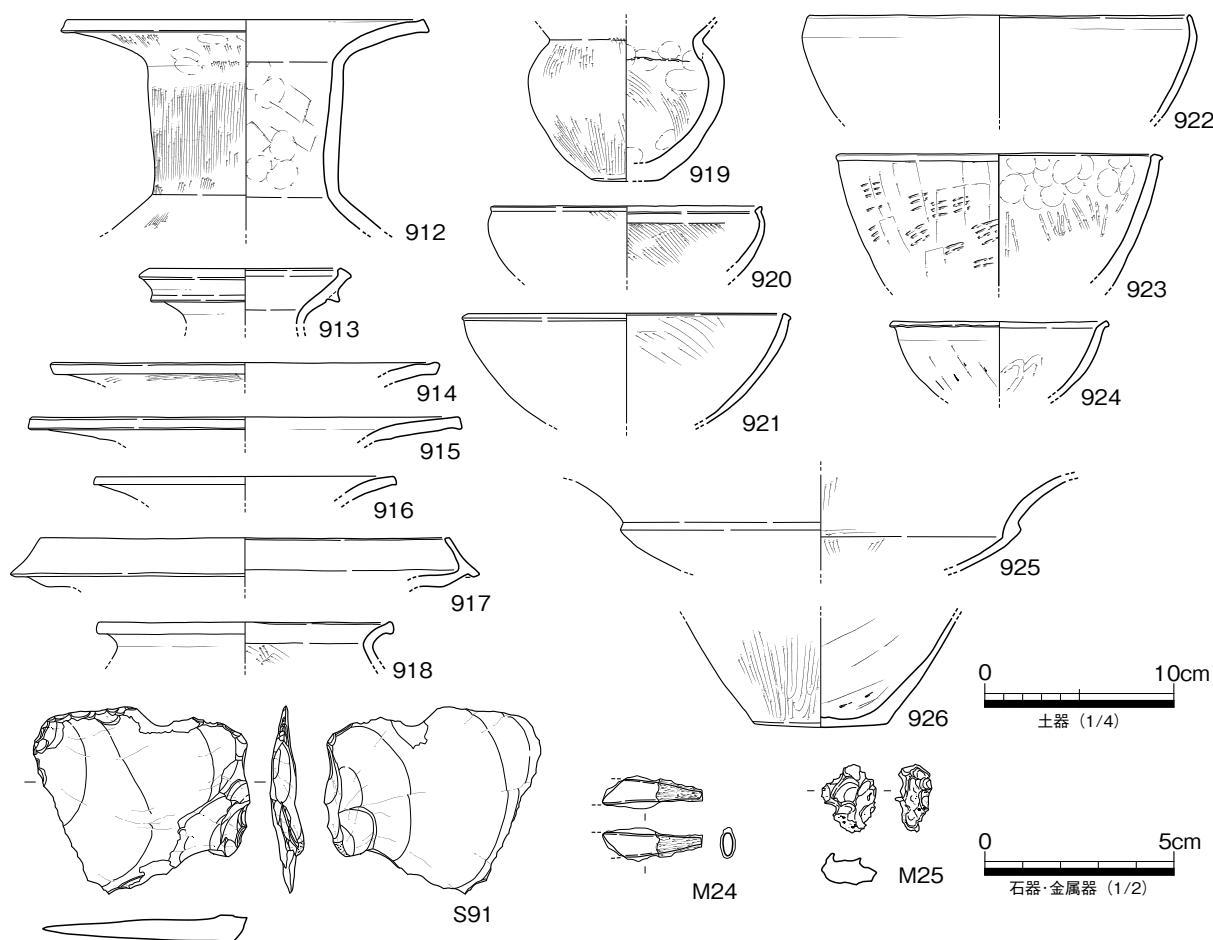
第116図 竪穴建物 SH3026a 出土状況図

(46) SH3042a

3区西南で検出した4本主柱構造の竪穴建物である。周辺柱穴との埋土の比較から、同一の建物を構成する柱穴と判断した。主柱穴はSP3704a・SP3676a・SP3793a・SP3673aの4基である。後期後半古段階の竪穴建物SH3681aと重複し、SP3793aはSH3681aの中央土坑であるSK3706aを切る。また、中期後半の掘立柱建物SB3915aの構成柱穴SP3509aをSP3704aが切る。

柱穴SP3673aから土器が出土した。

SP3673a出土の934は胴部下半が丸味を帯びる器形で緩い内面稜線を介して口縁部に接続する鉢である。935の甕は横位叩きを施し在地甕とは一線を画す。終末期に属することから、建物の廃絶時期を示す。



第 117 図 竪穴建物 SH3026a 出土遺物実測図

(47) SH3058a

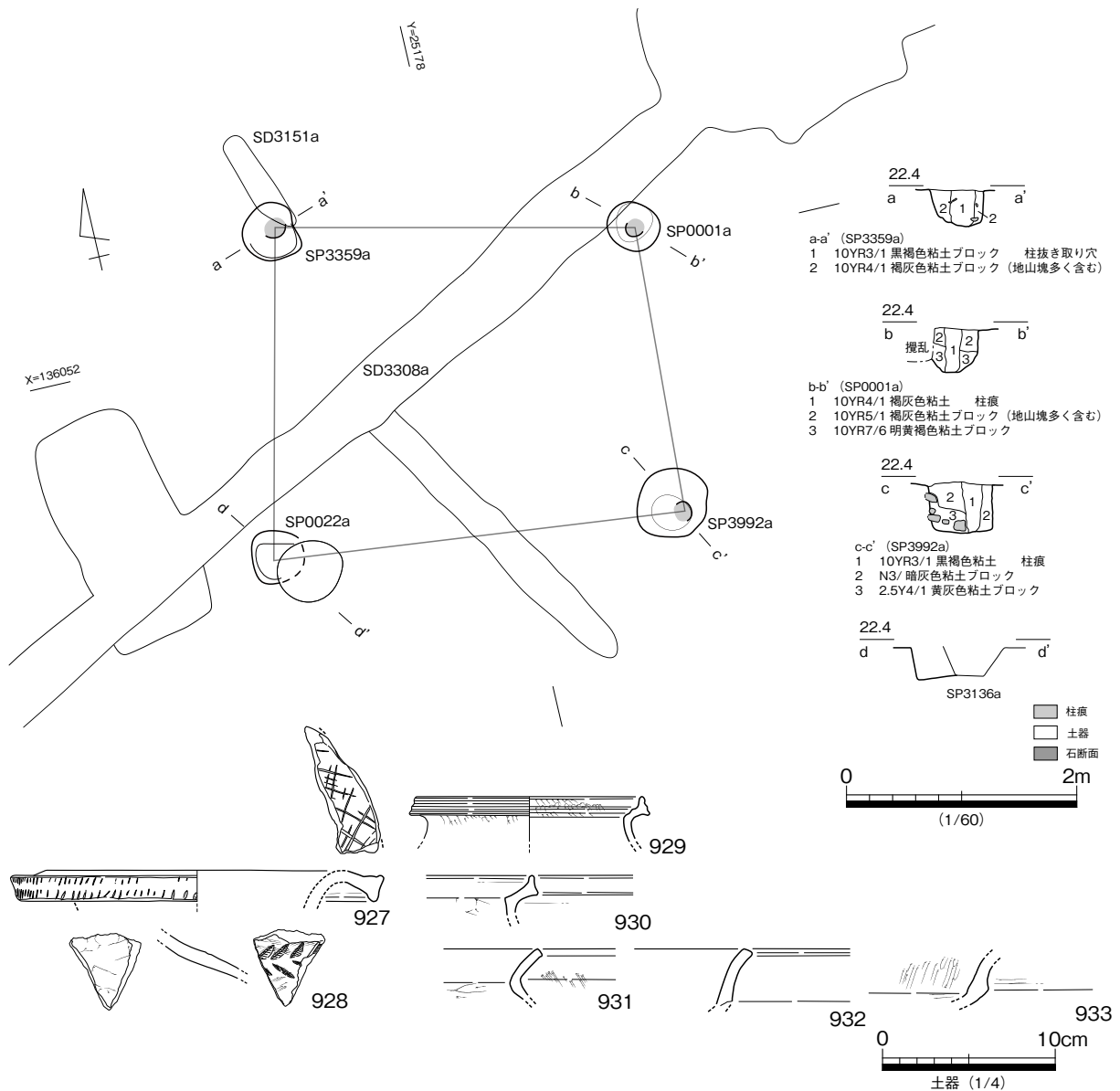
3区中央北端で1区との境に位置する隅丸方形の竪穴建物である。西側を後期後半新段階のSH2052bに切れ、東側を後期前半新段階のSH1091bを切る。推定床面積は21.0㎡。

主柱穴4基（SP3215a・SP3094a・SP3210a・SP3216a）と中央土坑SK3223aがあり、壁溝は一部のみ残存する。壁溝形状から四隅は大きく緩やかなカーブを呈する。壁溝掘方の上面を覆う形ではほぼ完形の甕（936）が出土した。壁板を抜き取らずに建物を廃絶したことを示す。壁との間隔は約5cmを測る（fライン断面）。壁板材の厚みの上限を示す数値である。

＜出土遺物＞

936は安定した平底が胴部下半からやや突出し、胴部は最大径が中心よりやや上にある。口縁部への器形境は緩やかで口縁部の外反は弱い。内面下半はヘラ削りを施すが、上半はナデ調整で、器壁はやや厚い。937は口縁部に沈線を施し僅かに拡張が残る甕口縁である。いずれも後期後半の古段階に属す。938は直口鉢で後期後半から終末期に続く形態。939は口縁上端拡張に凹線文を施す高杯で後期前半古段階に属す。940は裾端部を僅かに上方に拡張する高杯である。後期後半に属す。

以上の出土遺物から本建物は後期後半古段階に廃絶した建物と判断した。

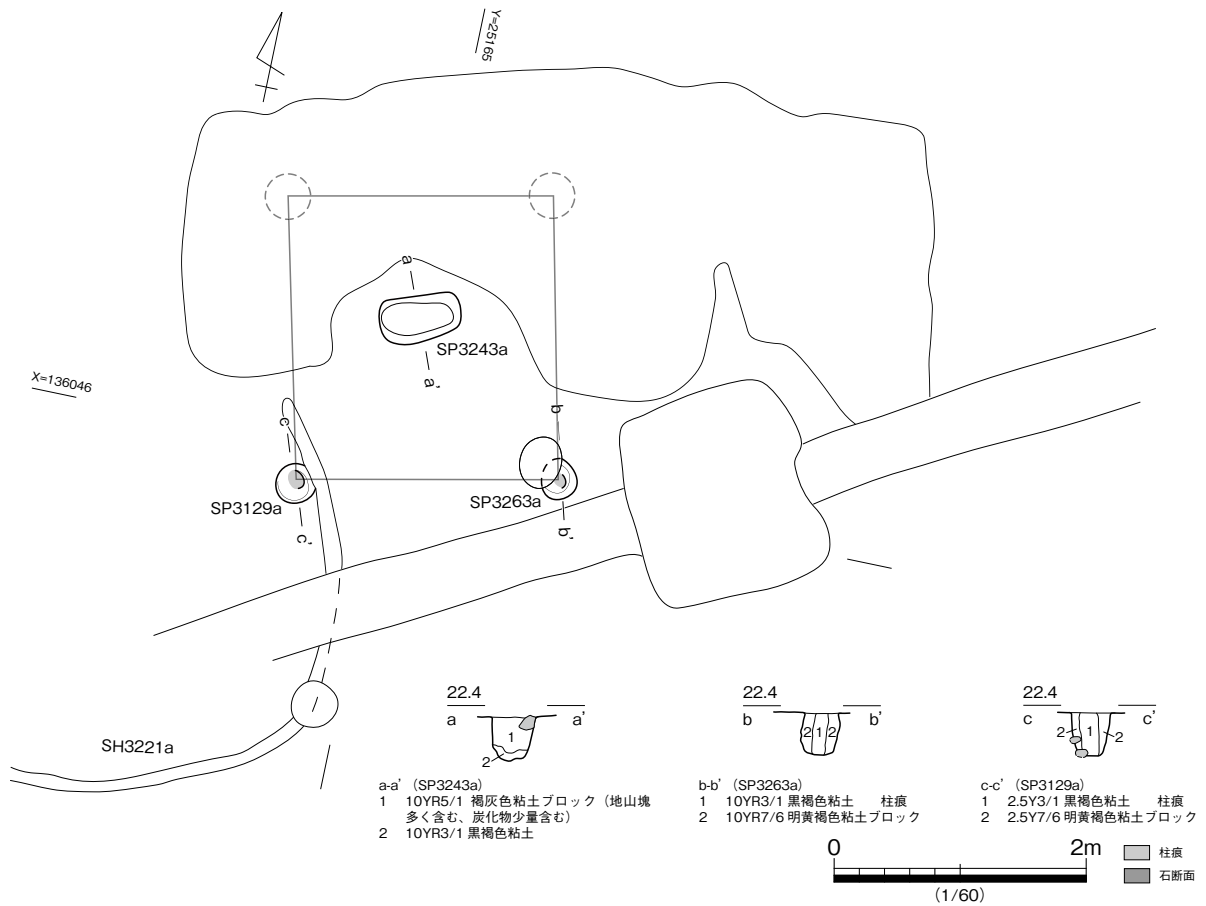


第 118 図 竪穴建物 SH3040a 平・断面図 出土遺物実測図

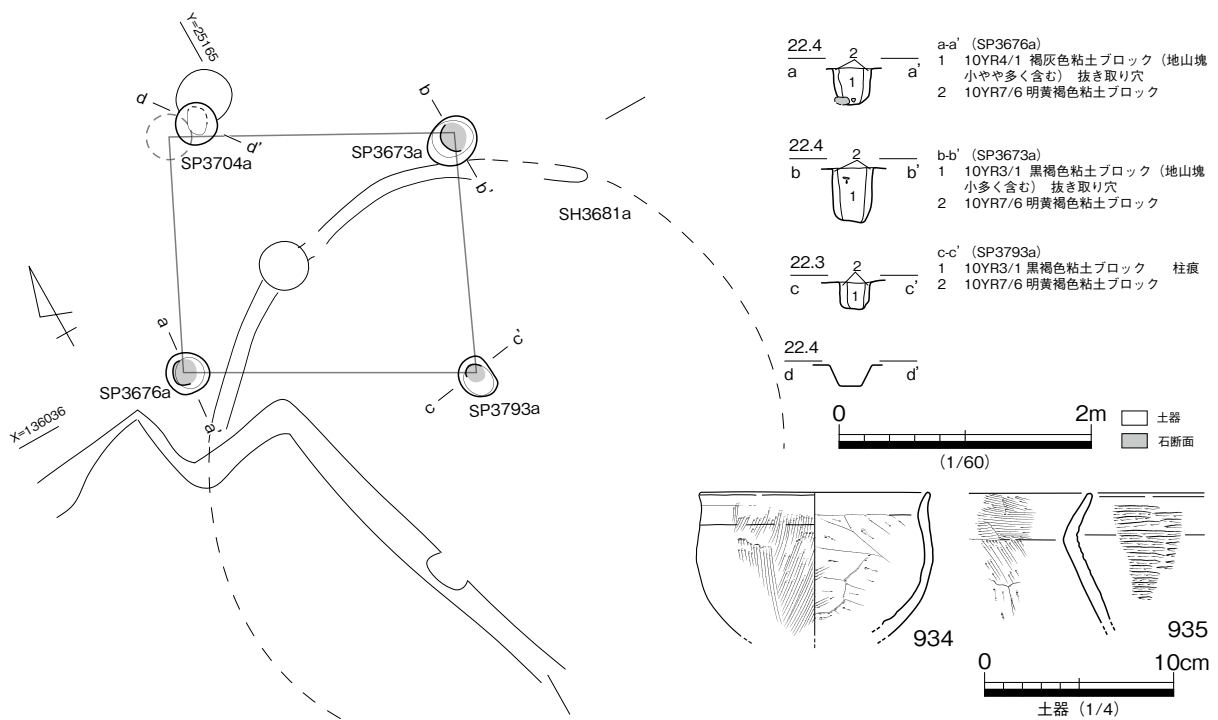
(48) SH3100b

3 区中央やや東寄りで検出した方形竪穴建物である。2 組の主柱穴列が確認できることから、同じ場所で建て替えを行う。b 断面で壁溝と屋内間仕切溝の切り合い（7 層の窪みが古期溝と理解）が確認でき、建て替えにより柱間が拡大したことが判明する。最大推定床面積は 32.8m²。

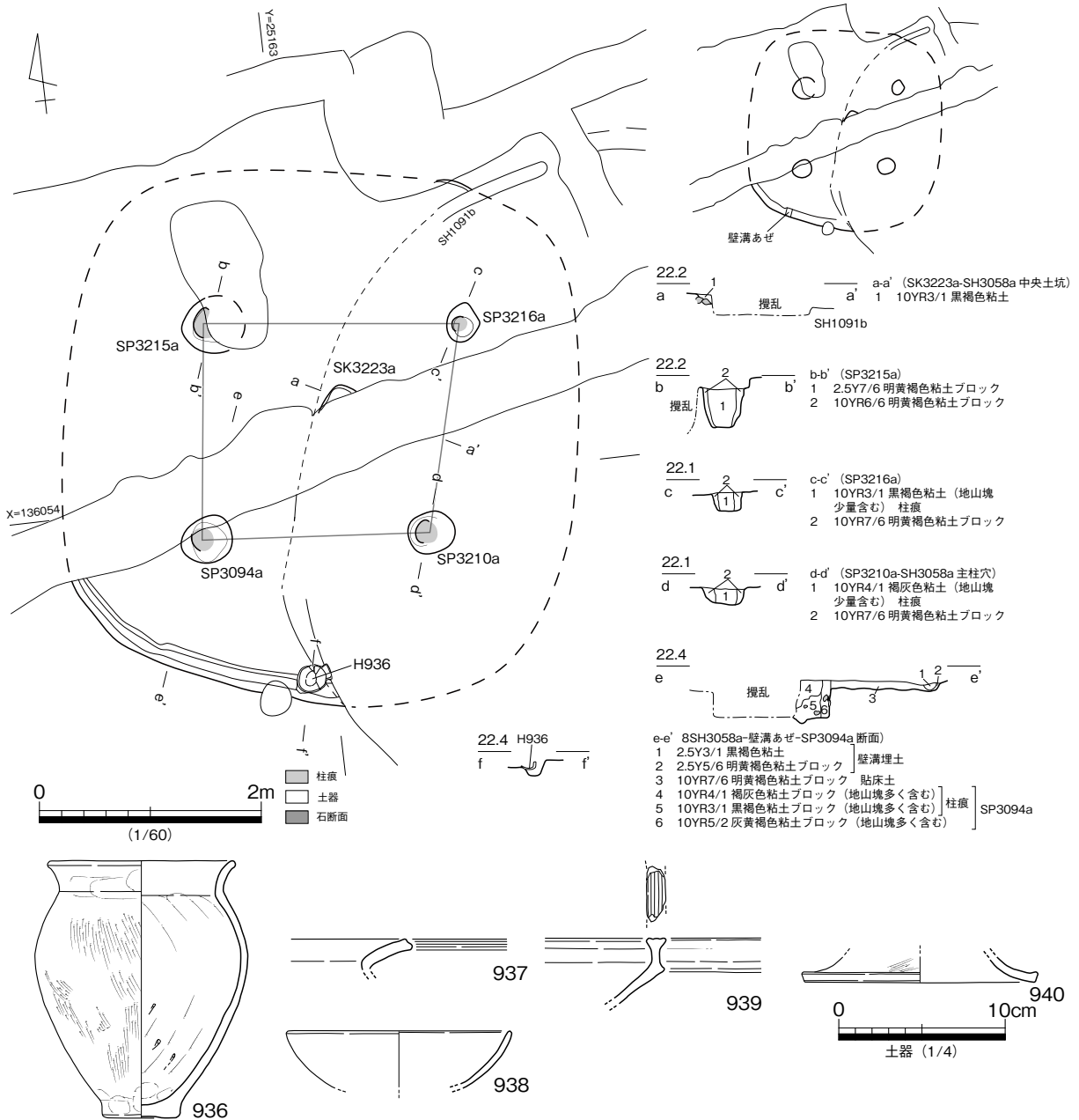
掘方南側が攪乱により滅失するが、柱穴から推定して、南北 6.1 m、東西 5.7 m のやや大形の建物となる。古期主柱穴は SP3273b・SP3283b・SP3277b・SP3269b の 4 基、新期の主柱穴は SP3335b・SP3346b・未検出柱穴・SP3234b の 4 基である。新期床面構築に当たっては b・d ライン 7 層を置土し、柱の更新に伴い屋内間仕切板を移動するが、同ライン 12・13 層のベッド状遺構を構築する貼床層は、それが古期壁溝埋土の 10・11・17 層により切られていることが明らかであることから、ベッド状遺構を一部削ることで床面の間仕切変更を行ったものと判断した。中央土坑 SK3289b は不定形で南西側に深い窪みがあり、この部分が古期床面に伴う土坑の痕跡で、北東にも若干の窪みがありこちらは新期床面に伴う



第 119 図 竪穴建物 SH3041a 平・断面図



第 120 図 竪穴建物 SH3042a 平・断面図 出土遺物実測図



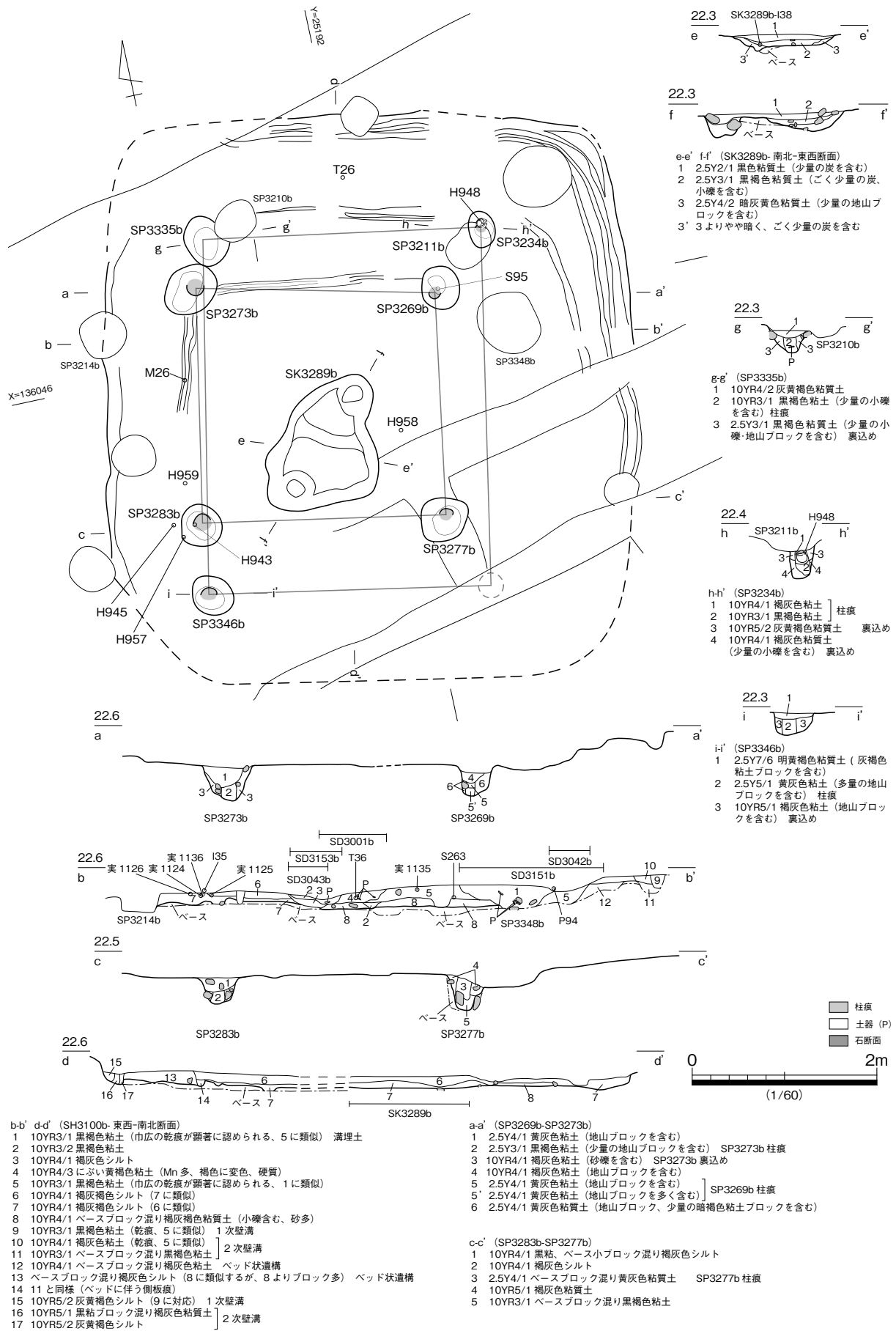
第 121 図 竪穴建物 SH3058a 平・断面図 出土遺物実測図

窪みである。すなわち中央の皿状部分に柱穴状の窪みを伴う炉跡形態が古新に継承されたと判断した。

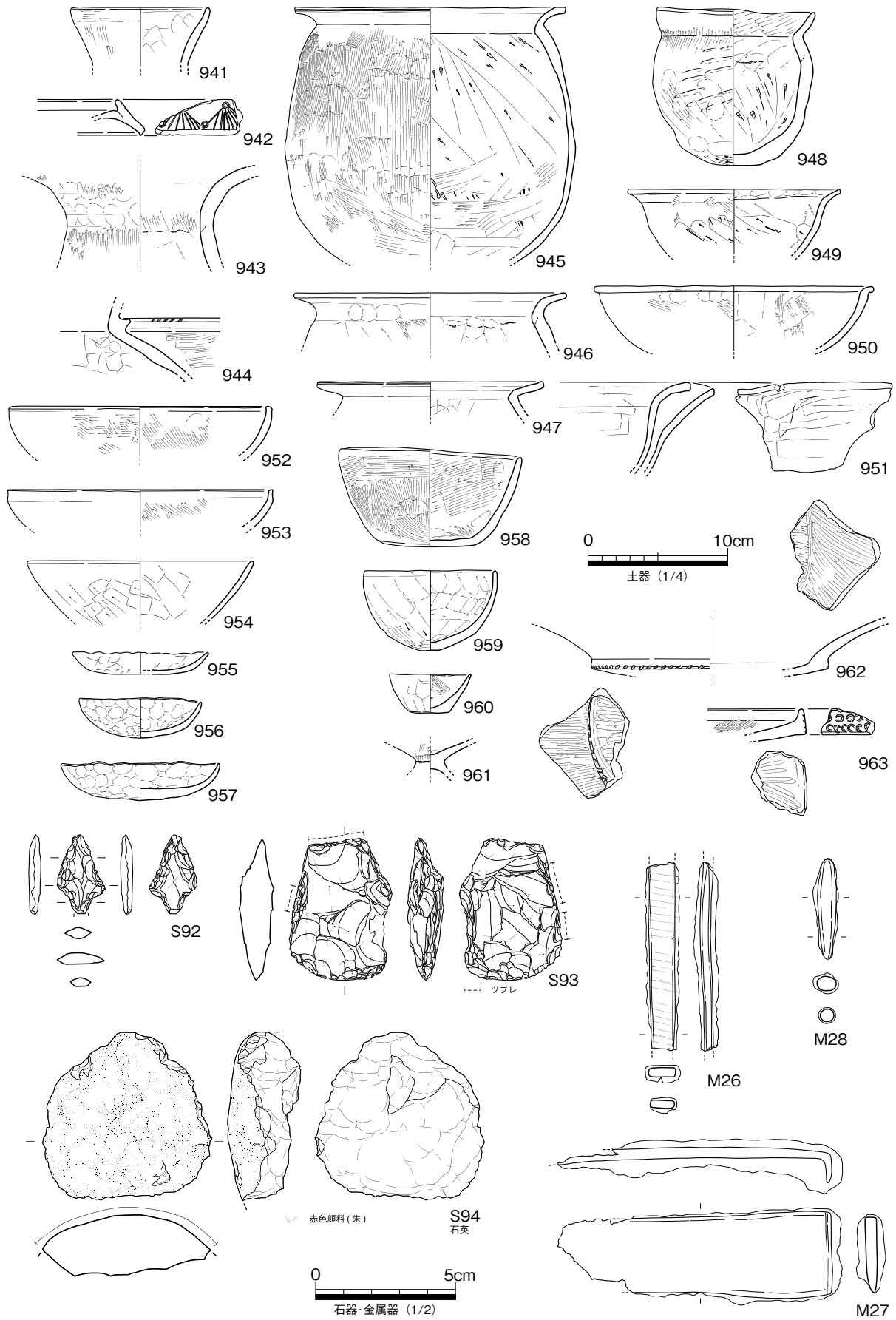
建物廃絶の際に柱を抜き取り、SP3234bの抜き取り穴に948の完形小形甕を投入する特別な行為の痕跡が残る。

<出土遺物>

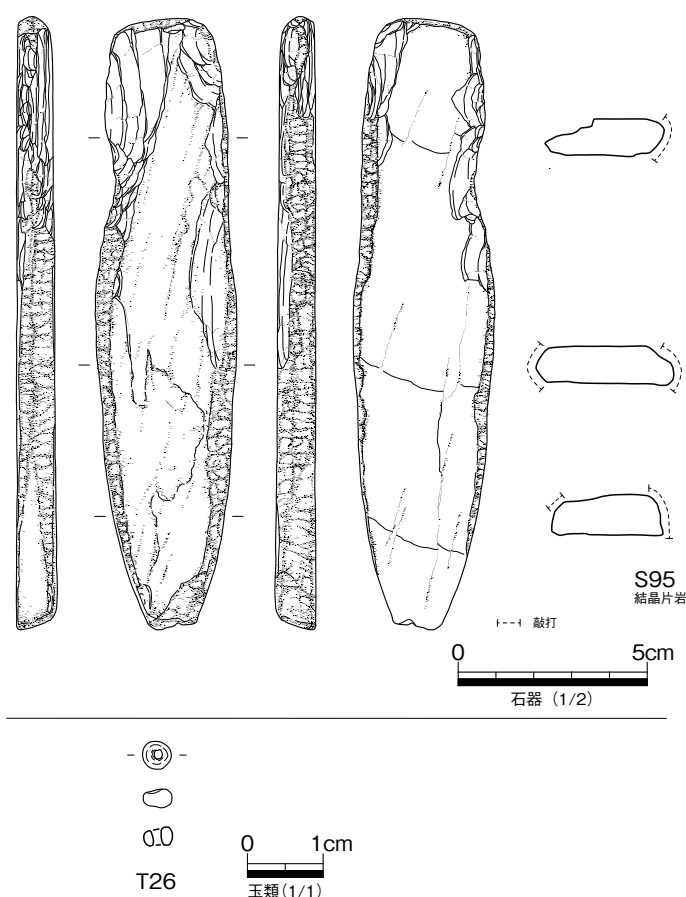
941～944は壺である。941は後期前半の細頸壺。942～944は広口壺で、942は鋸歯文+竹管刺突を施す複合口縁で口縁下端部の突出が顕著である。鋸歯文はC2類で竹管文に向けて収束するラインを描く。944は頸部下端に刻目を施す突帯を貼付する。これらは終末期に属す。945は口縁部が強く屈曲して外反する甕で、底部が膨らんでボール状の丸底となる。終末期新段階に属す。947は金雲母が目立つ胎土Hである。948は器壁が厚い粗雑なつくりの小形甕である。951は丹塗仕上げの大形片口鉢である。



第122図 竪穴建物 SH3100b 平・断面図



第 123 図 竪穴建物 SH3100b 出土遺物実測図 1



第124図 竪穴建物 SH3100b 出土遺物実測図2

に顕著な敲打痕を残す。

M26はヤリガンナ基部片とした。上端の刃部は滅失するが持ち手に樹皮の巻き付けが認められる。図の上下ともに折損しており、本来の長さは13cmほどと推定する。M27は鉄鎌である。着柄角はほぼ直角で着柄部幅は3cm、長さは先端部が滅失しており詳細は不明だが長さ13cm前後と推察する。直刃直角鎌として弥生時代に一般的な形式と法量を備える。M28は長さ3.5cmの鉄錐である。上下端とも折損はなく完形品である。最大径は中央やや上にあつて断面0.7cm×0.5cmの楕円形を呈す。下端の作用部へは関を介さず直線的に窄まる。下端は摩耗し現状では鋭さはないが、尖った状態は維持している。

T26は透明な濃紺色のガラス小玉である。色調からコバルト着色のカリガラスと推定できる。器体内部には大小の気泡がみられ、縦位の細筋が目立つことから、ガラス管を引き伸ばして切断し加熱整形で製作したものと推察する。上下小口には平坦面は認められない。

建物の廃絶に伴い遺棄された土器は終末期新段階の土器で廃絶時期を示す。本建物は、ほぼ同じ位置で円形竪穴建物SH3291bも重複する。後述のようにその建物も本建物の直前に廃絶しており、時期的に連続する。つまり本遺跡内における他例とは異なり、同じ位置で建て替えて、長期にわたってその場を占有した建物である。

廃絶に伴い意図的に土器を埋める等特別な行為を行っていることから、廃絶後に一度に埋め戻したものと推察する。直後の古墳時代前期、詳細な時期は不明だが本建物と重複するSD3153bはその時期に

952～954は直口鉢で954は口縁端部を面取りしない。955～957は皿状の鉢で指押捺痕が顕著。終末期に特徴的である。960はSK3289bで出土した小形の鉢である。962は装飾高杯、963は器台の口縁部片である。952・953・962は胎土Hである。

S92は有茎式のサヌカイト製打製石鎌である。S93は周縁に敲打による潰れがほぼ全周するサヌカイト製石器で、石核整形直後の状態と考える。S94は石英の円礫片で元の法量は直径7～8cmに復元できる。外表面の一部に研磨を施し、赤色顔料が付着する。顔料は蛍光X線分析の結果朱であることが確認された(第4章第6節6)ことから、顔料の精製に伴い使われた磨石と判断した。S95は結晶片岩製の叩き石である。柱状片刃石斧が未製品の状態で搬入されたものを素材として叩き石に転用したものと推察する。周縁

掘削され、今回の調査区の南側半分を円弧状に圍繞する区画溝である。この溝の設置が建物廃絶の契機となった可能性も十分に考えられよう。鉄器・ガラス玉・朱付着磨石等出土品目が充実していることも上記の特定箇所占有と合わせて特筆すべきである。

(49) SH3102b

3 区中央東よりで検出した楕円形に近い直径 6 m の竪穴建物である。西側を終末期の竪穴建物 SH3200a に切れ、さらに古墳時代の溝 SD3151b に切られる。推定床面積は 28.6㎡。

主柱穴は現状で 3 基 (SP3260b・SP3341b・SP3231b) あり、攪乱部に 2 基を想定して 5 主柱の柱構造を復元した。主柱穴列の外側は貼床による幅 0.7 ~ 1.0 m のベッド状遺構が構築される。中央土坑は西北に寄った位置に一〇様式の中央土坑 (SK3350b・SK3351b) が配される。また東寄りに長さ 1.7 m、幅 1.2 m の隅丸長方形で浅く、炭化物を多く含んだ土坑 (SK3228b) がある。これらの土坑等から出土した炭化物を洗浄選別したところ、燃料材としてコナラ属コナラ節・同属クヌギ節が複数認められた。また半形のモモ核 1 点、破片のモモ核 16 も出土した (第 4 章第 2 節 4)。

<出土遺物>

964 は後期後半の長頸壺口縁部である。口縁上端で屈曲して水平に開く。965 は後期後半新段階のミニチュア壺である。小形丸底壺に続く系譜で後期後半新段階から終末期古段階の出現期のものである。以上の 2 点は胎土中に角閃石を多く含む下川津 B 類土器でいずれも上層から出土している。966 は細頸壺胴部片である。胴部中央の直立器形部を区切る突帯は断面が三角形を呈し、突帯上には細い凹線文が 2 条ある。内面は丁寧な横位のヘラ削りを施す。外面には残存範囲全体に赤色顔料 (ベンガラ) が塗布された丹塗土器である。胎土は茶褐色を呈し黒雲母が多く含まれる。形態と胎土から備中産と推察でき、鬼川市Ⅲ式併行期に位置づけられる。

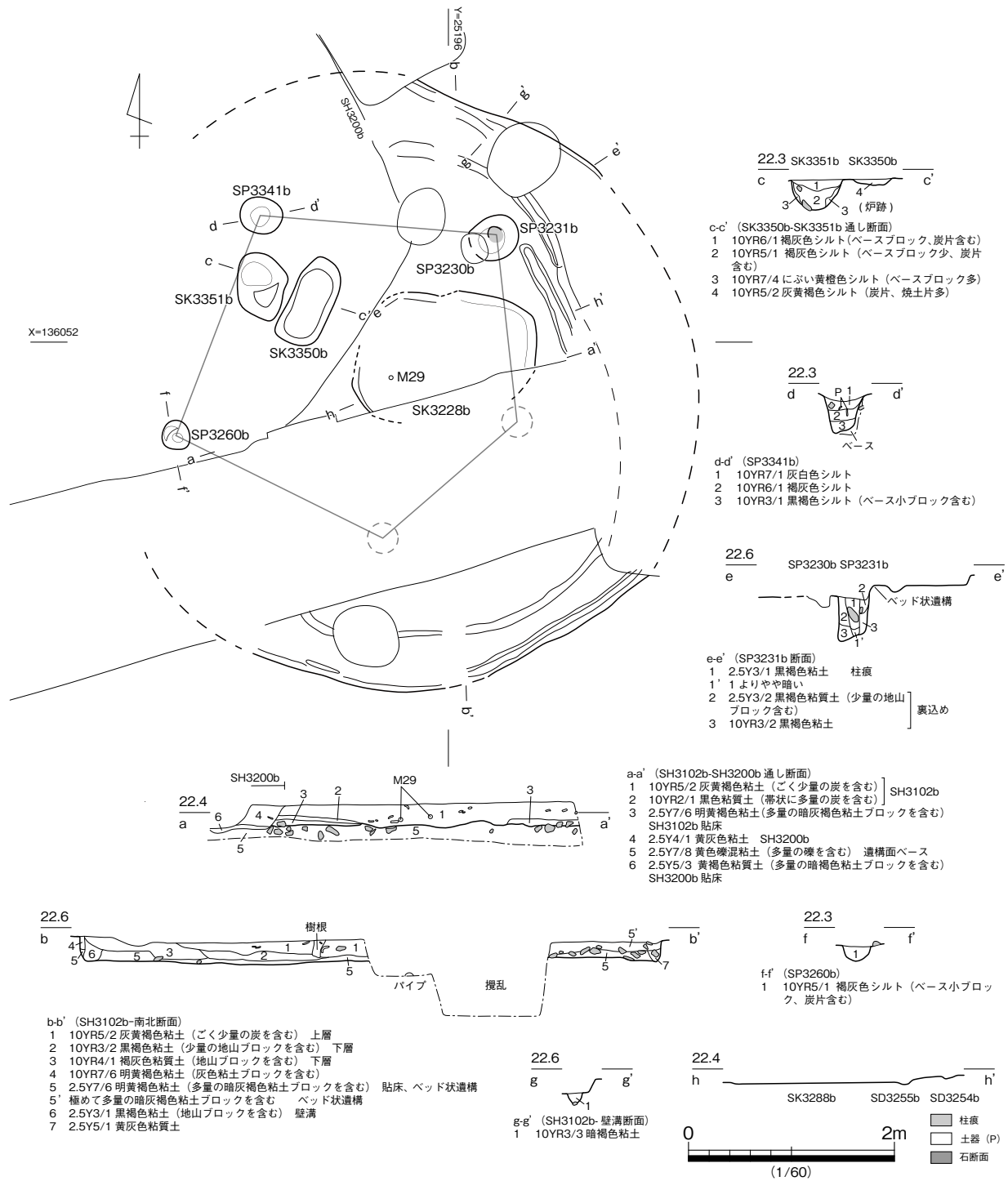
967・968 は口縁胴部境が緩やかに接続する甕である。969・970 も口縁部は強く外反するには至っていない。970 は胎土中に別の土器片が埋め込まれ、その土器には角閃石が多数含まれる。971・972 の鉢は上端を軽く面取りする形態で後期後半新段階の特徴を有す。973 は胎土 H である。

M29 は床面出土の鉄鏃である。残存部位から推定して柳葉形と推察する。M30 は鉄鏃の可能性もあるが、極端に厚みがあり特定器種として認定するには躊躇がある。M31 ~ M33 の板状鉄片や M34・M35 の棒状鉄片の存在を合わせると、粗加工段階の棒状の鉄素材と考えられる。M34・M35 の上端破断面は錆化し摩耗する。

T27 はメノウ製の管玉である。褐色半透明の鉛色で脂肪光沢のある硬質な石材で、小口部は複数の加工面が認められる。また側面も小口に接する一部に斜めの加工面があり棗玉様の形状も備えるが器体中央はほぼ直線的な筒状を呈しており管玉と認定した。概して仕上げは丁寧である。製作中ではないが、縦割れを生じて廃棄されたものである。断面観察が容易で、上下両側から鉄針で穿孔した痕跡が明瞭に観察できる。蛍光 X 線分析ではケイ素 (SiO₂) が約 95% と極めて多く検出され、比重は、2.6 の値を示した (第 4 章第 4 節 2)。

出土遺物のうち終末期に下る可能性のある下川津 B 類土器はいずれも上層から出土しており廃絶後の混在とみると、後期後半の土器が多く、鉢の形態からその新段階に位置づけられる。よって本建物の廃絶時期は後期後半新段階である。

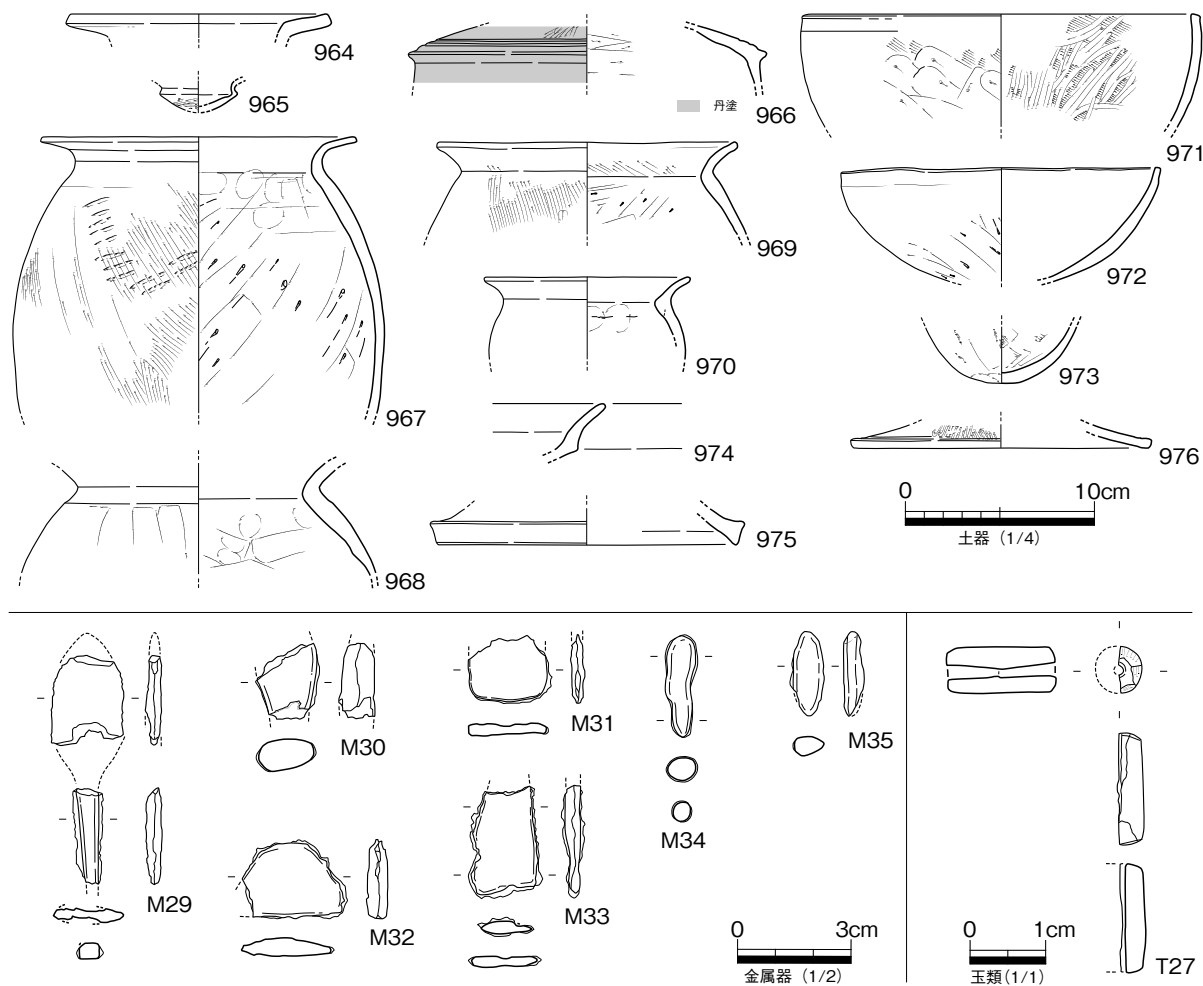
出土遺物に鉄器素材が 6 点まとまって出土しており、本建物に後出する SH3200a においても同様に



第 125 図 竪穴建物 SH3102b 平・断面図

鉄器素材が多く出土していることから、付近が鉄器生産に関わる場であったことが推察される。

T27 のメノウ製管玉の出土は重要である。弥生時代のメノウ製管玉は国内では極めて稀少で、福岡県平原 1 号墓 (前原市教委 2000) で 12 点、同県徳永川ノ上遺跡 I -13 号墓 (福岡県教委 1996) で 1 点、佐賀県中原遺跡 11 区甕棺 SJ11281 (佐賀県教委 2012) で 1 点等北部九州地域の出土に限られる。近隣では岡山県榑築墳丘墓で藁玉が 1 点出土しているが、管玉としては今回が北部九州以外での初例である。大陸から舶載された可能性が高い。



第 126 図 豎穴建物 SH3102b 出土遺物実測図

(50) SH3115b

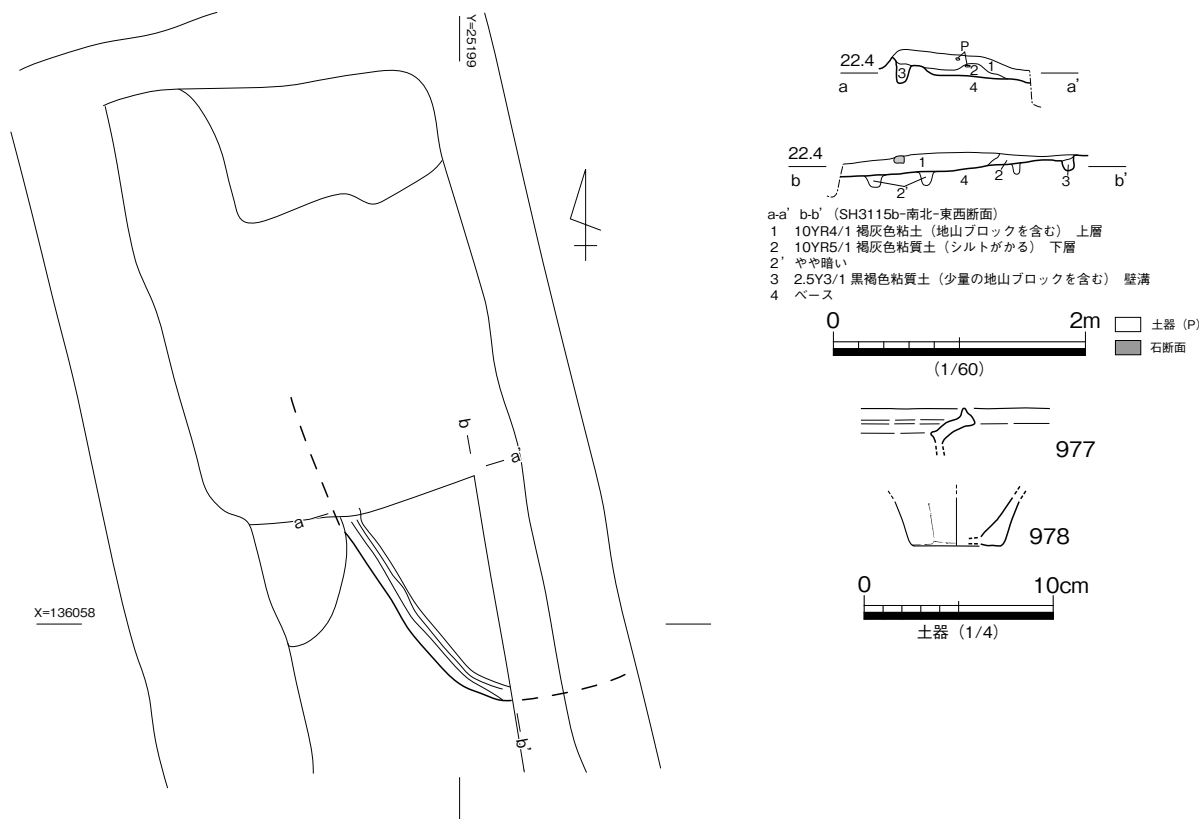
壁溝のみを検出した豎穴建物である。壁溝の形状から隅丸方形の平面形が想定できる。出土遺物は中期前半新段階の甕小片のみで、これらの土器が建物の所属時期を決定するものかは不明である。

(51) SH3186b

3 区西端で検出した円形豎穴建物である。西側半分は平成 7 年度の研修棟調査区で SH02 として報告している建物である。直径 4.5 m を測り、検出面で壁溝を確認することにより平面プランを確認した。推定床面積は 16.2㎡。支柱穴は 4 基 (H7_SH02_P09・H7_SH02_P02・SP3204a・SP3203a) で中央やや西よりに深めの中央土坑 SK3166 がある。なお平成 7 年度の調査では中央土坑 K1 として調査していたが、東側に掘り残しが判明し、その部分で今回の a ライン断面を作成したものであり、同一の遺構である。土坑 SK3166a の土壌を水洗選別して得られた燃料材としての炭化材はサカキ・サクラ属・ヒサカキ属に同定されている (第 4 章第 2 節 4)。

<出土遺物>

979・980 は床面直上出土の甕である。979 は丹塗の備中産の甕で後期後半古段階に属す。980 は内面稜線が緩やかな「く」字状口縁の甕で同じく後期後半古段階に属す。981・982 は中期後半の鉢である。



S96 はサヌカイト製スクレイパーで背面に自然面が残る剥片を素材とする、S97・S98 は打製石庖丁及び加工痕ある剥片である。いずれも表裏に磨滅が残る。

以上の出土遺物により、本建物は後期後半古段階に廃絶した建物と判断した。

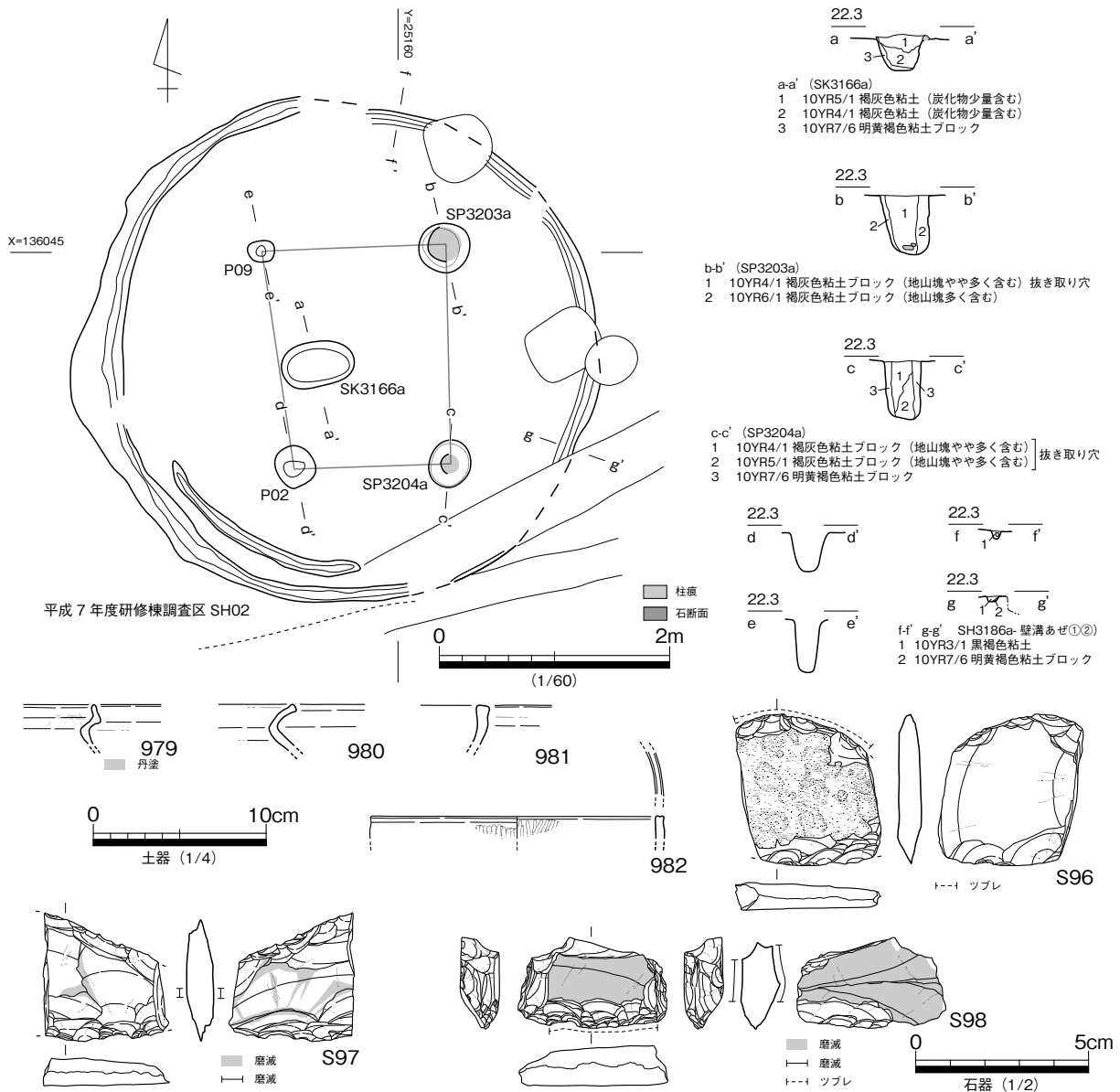
(52) SH3200b

3区東北に位置する多角形の竪穴建物である。南北約7m、東西7.8mを測る。推定床面積は42.2㎡。東側には後期後半新段階のSH3102bと重複しこれを切る。

主柱穴は6基（SP3253b・SP3281b・SP3261b・SP3256b・SP3248b・SP3251b）で平面形とは異なり南北方向に長い配列を持つ。主柱穴ラインより外側に、貼床によるベッド状遺構を備える。aライン断面には貼床の7層に覆われる当初の壁板掘方としての壁溝埋土の15・16層と、同じ位置で貼床の7層を切って廃絶時に壁板を抜き取った際に流入した抜き取り痕（11層）が丁寧に記録されている。屋内下段部の中央南寄りに一〇土坑様式の炉跡（SK3250b）がある。埋土中には多数の炭塊が含まれ、分析の結果コナラ属アカガシ亜属と同定され、モモ核4点も含まれていた。また、炭は土坑SK3250bの縁辺から建物埋土全体にも及び、埋土側で出土した炭化物粒はマツ属複維管束亜属と同定された（第4章第2節4）。そのほかSK3250bの北側には焼土ブロックの出土が記録されており、後述する鉄器素材との関連性が注目できる。

<出土遺物>

983～994は広口壺である。989のように胴部から急に屈曲して頸部が斜め上方に開き、その後984のようにやや鋭く屈曲して口縁部が大きく開く形状を呈すものが多い。口縁端部は拡張して鋸歯文や複

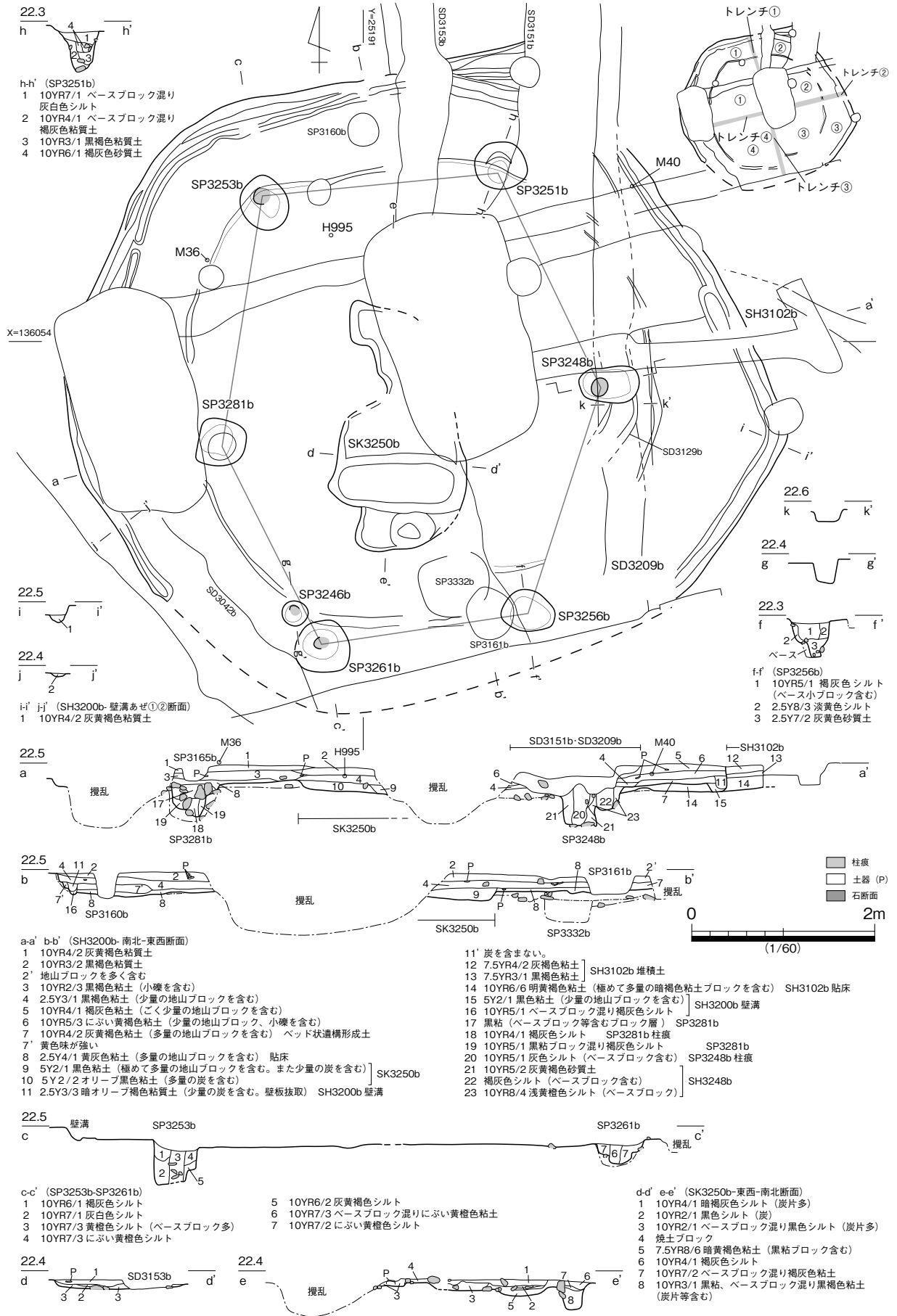


第 128 図 竪穴建物 SH3186a 平・断面図 出土遺物実測図

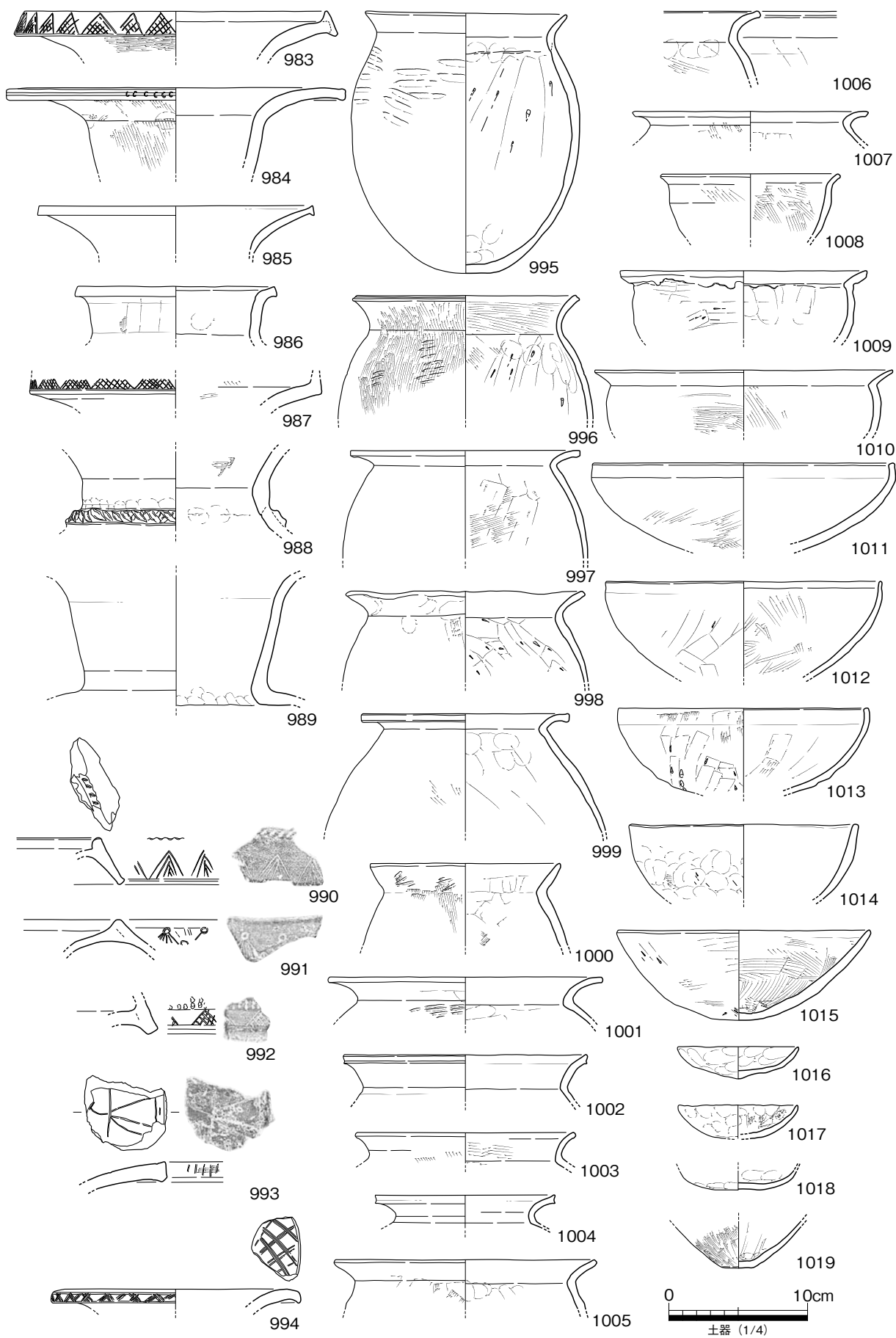
線山形文を施文するものが多い。終末期古段階に属す。987・988 は複合口縁で頸胴部間の接続が緩やかで外面に押捺突帯を貼付する西部瀬戸内系の土器である。ただし 988 は胎土 H である。994 は中期前半中段階の混在品。なお 983 の鋸歯文は B1 類、987・992 の鋸歯文は B2 類、990・991・993 の鋸歯文は C2 類である。

995 は床面出土の甕。内面口胴部境のくびれは弱く、内面稜線も明瞭でない。底部は丸底に近いがかろうじて平底を残す。996・998・1000 も同形の甕である。一方で 997・999 等内面口胴部境が強くくびれ、口縁部が屈曲して大きく外反して開く形状の甕があり、比率は 5 分である。998 は胎土 Hb である。

1008 ~ 1010 は口縁部が屈曲外反する鉢で 1010 は屈曲角度が強く、終末期の特徴を備える。1001 は胎土 H である。1011 ~ 1015 は中形の直口鉢である。口縁部を面取り調整するものと丸く収めるものの 2 者が混在する。1016 ~ 1018 は皿状の浅鉢である。指押捺により成形するもので終末期に所属する土器群である。1029 は複合口縁壺の可能性もあるが、極細い鋸歯文を 2 条 (上位 A1 類、下位 A2 類) 口



第129図 竪穴建物 SH3200b 平・断面図



第 130 図 豎穴建物 SH3200b 出土遺物実測図 1

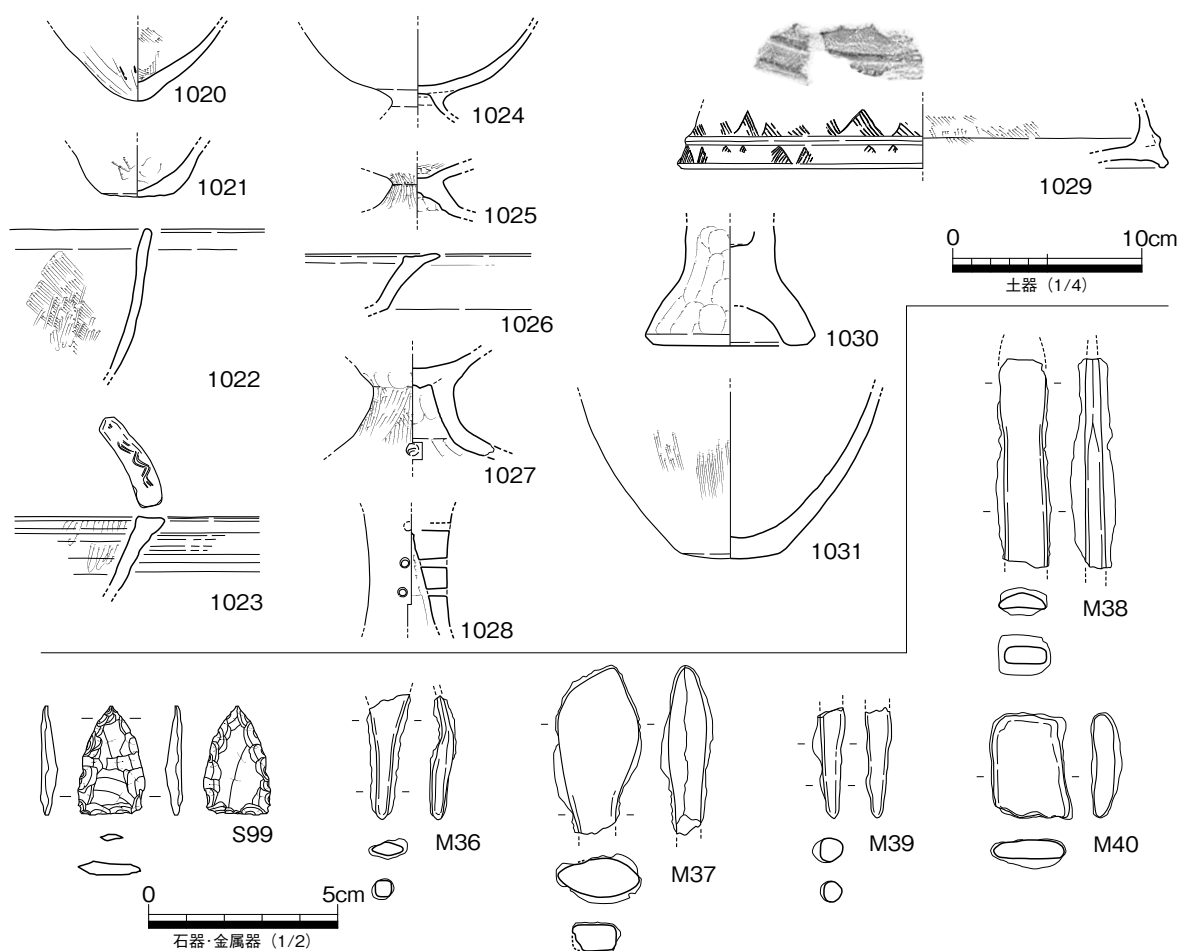
縁拡張面に施し、胎土Hで製作されたもので吉備系器台と共通する。1030は支脚である。なお、1022、1026、1027は胎土Hである。

S99は平基式のサヌカイト製打製石鏃である。M36は有茎式の鉄鏃で鏃身がやや折れ曲がる。M37～M40は鉄器素材となる棒状・板状鉄片である。M37・M38は錆化膨れにより詳細は不明だが5mm以上の厚みがある。上層から出土した。M38はヤリガンナで刃部に裏スキを認める。M39はベッド状遺構の貼床上面で出土したもので、上端は新しい折損面が残る。下端が鋭く尖る鉄鏃である。M40は器面に細かな亀裂がみられ鑄鉄の可能性はある。貼床面からやや浮いた位置で出土し、破断面は錆化し摩耗する。本建物は他例にもれず本遺跡特有の近代の攪乱により様々な混入があり、特に錆化した鉄製品は古の逸品と近代散逸品の区分が困難なものもあるが、隣接するSH3102においても同様に鉄器素材と推定される鉄片が出土していることから、鉄器製作を継続した本エリアの特性も勘案し、これらの鉄片を弥生時代の資料と見ておく。

以上の出土遺物は弥生時代終末期のものが多く、壺の特徴を勘案し終末期古段階に廃絶した建物とする。

(53) SH3221b

3区西北で検出した円形竪穴建物である。西側を後期前半新段階のSH3186aに切られる。直径4.2mで壁溝と支柱穴・炉跡のみ残存する。推定床面積は12.8㎡。支柱穴は4基（SP3231a・SP3187a・



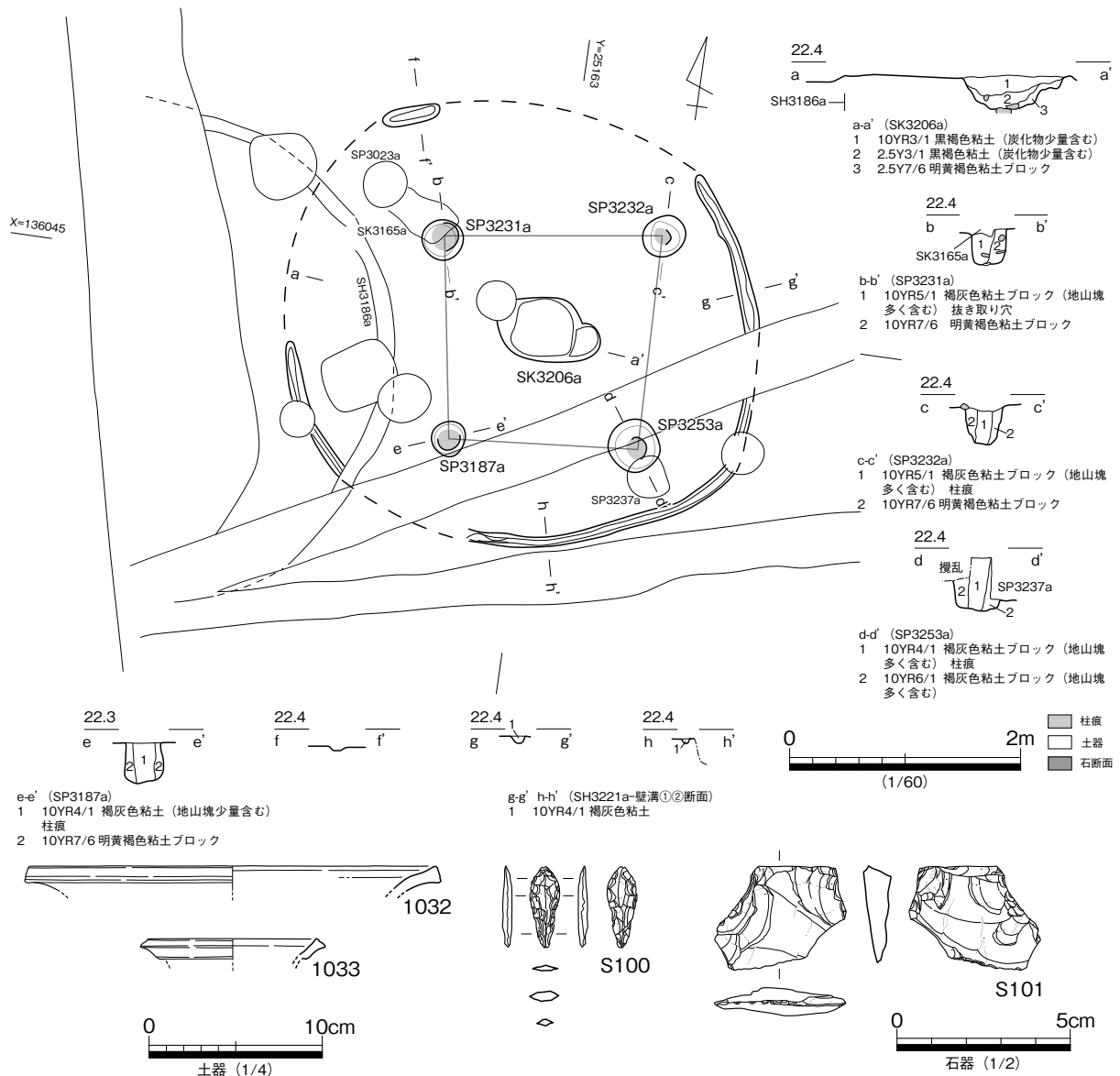
第 131 図 竪穴建物 SH3200b 出土遺物実測図 2

SP3253a・SP3232a) で柱間 1.6 ~ 1.9 m、床面中央に炉跡 SK3206a がある。炉跡は深さ 0.3 m で底面に砂岩の平石を配す。埋土中に炭化物は少ない。

<出土遺物>

土坑及び柱穴から出土した遺物を取り上げる。1032 は口径 20cm を超える口縁部で口縁端部の拡張が貧弱だが、器台と考えた。1033 は口縁部に粘土帯を貼付した土佐系の長頸壺である。前者は口縁部拡張が顕著でないことから後期前半中段階に下る。土佐系土器はその時期が流入の下限となる。S100 は小形のサヌカイト製打製石鏃、S101 はサヌカイト製の使用痕ある剥片である。剥片下端部に微細な剥離痕が連続する。

以上により、本建物は後期前半中段階に廃絶したものである。その後、隣接の SH3186a にはほぼ同規模のまま移築したものと推察する。



第 132 図 竪穴建物 SH3221a 平・断面図 出土遺物実測図

(54) SH3245b

3区中央やや東よりで検出した円形の竪穴建物である。直径は約8mと大形である。推定床面積は51.0㎡。東側を終末期の竪穴建物SH3100b・SH3291bに切られる。

支柱穴は未検出含めて5基と判断した。残存する4基はSP3294b・SP3309b・SP3319b・SP3356bである。床面中央やや東よりに一〇土坑様式の炉跡がある。SK3300bは深さ0.6mと深く、炭片を含む黒褐色粘土で埋没するが、炭片はさほど多くない。SK3295bも同様の埋土だが炭片はやや多く、15gの炭化物を抽出し燃料材のコナラ属クヌギ節を確認した。なおSK3300bではモモ核が19点出土し、SK3295bではモモ核4点が出土した(第4章第2節4)。後者では底面からやや浮いて蛇紋岩製勾玉が出土した。

＜出土遺物＞

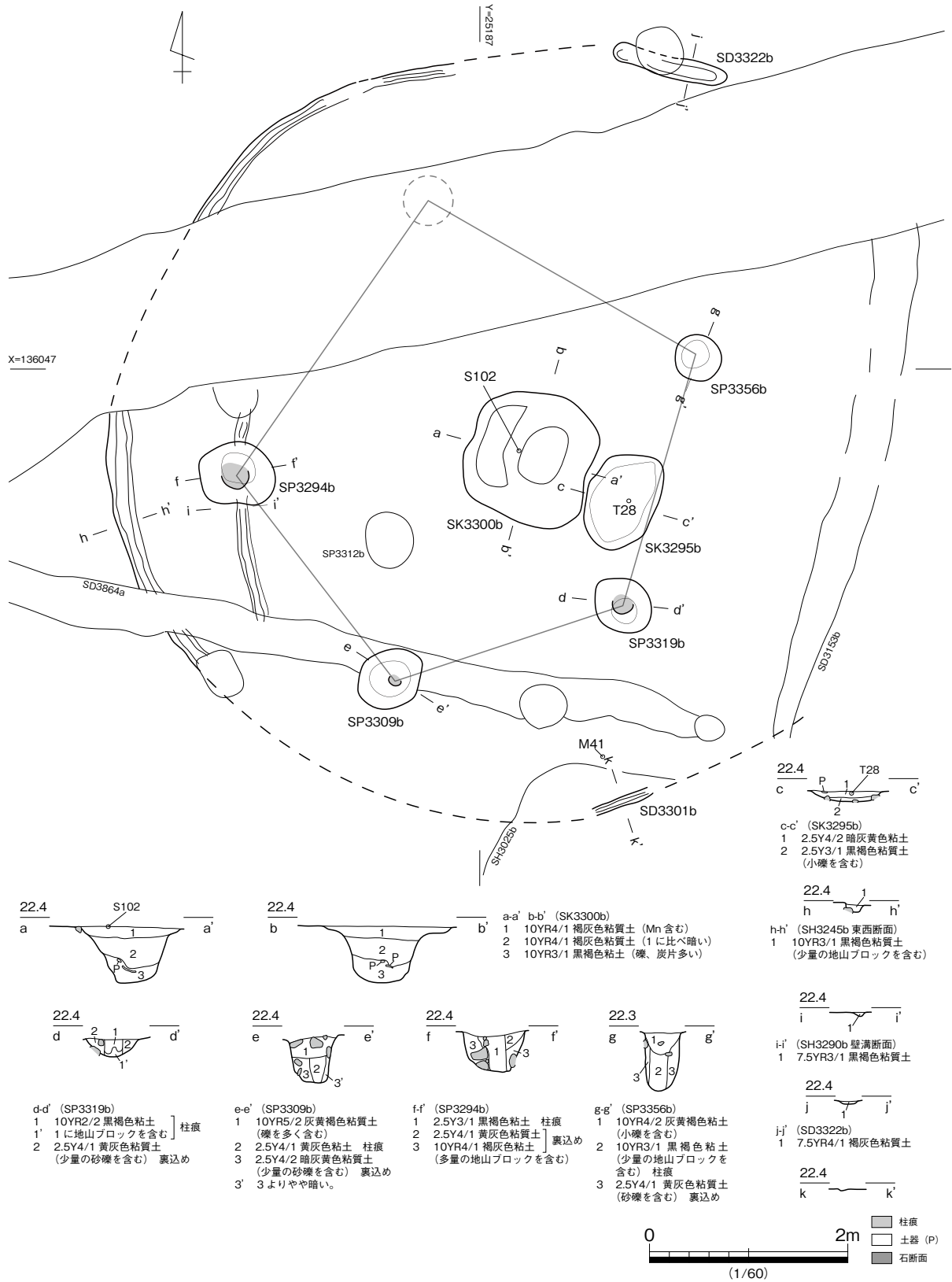
柱穴・土坑で出土した遺物に加え、出土位置の記録から本建物に帰属させたものもある。

1034～1036は口縁部に凹線文を施文する後期前半の広口壺である。1036は胎土Hbで口縁部に丹塗を認める。1037は口縁部が緩やかにカーブして外反する後期後半古段階を下限とする甕、1038は口縁が短く僅かに外反する下川津B類の高杯で後期後半に属す。1039は裾部に細かな刺突文を施し薄く精製の台付鉢で後期後半新段階に位置付けられる。1040～1042の高杯は口縁部の開きが大きいが端部が面取りされており、後期後半古相に位置づけられる。1044の器台は断面三角形粘土を貼り付けて裾を拡張する。後期前半の特徴である。

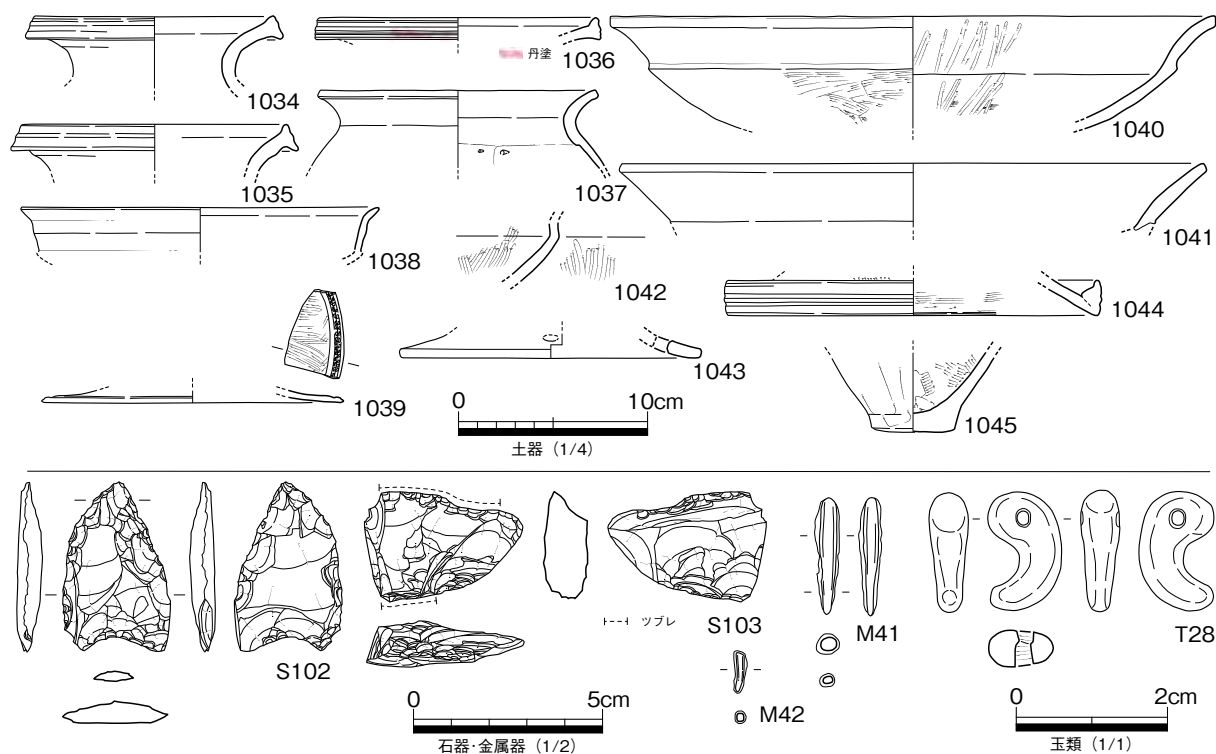
S102はサヌカイト製石鏃の未製品、S103は楔状石核である。M41は完存の鉄錐である。下端部は細く鋭く尖る。M42は小形鉄針の先端部片である。

T28は緑色斑で樹脂光沢をもち、酸化マグネシウム(MgO)が多く含まれ、比重2.6を測る蛇紋岩製の勾玉である。長さ1.6cm、幅0.9cmで厚さは0.5g。頭部が太く尾部に向かって細くなるタイプで、穿孔は表裏両面から行われ、双方の穿孔軸は中央ややずれた位置で大きくずれる。回転痕跡が明瞭に残ることから石針を使用したものと判断した。

出土遺物は後期前半から後半にかけての時期幅があり、土坑SK3300bより出土した1039の後期後半新段階台付鉢が本建物の廃絶時期を示す。なお、出土遺物全体から見ると後期後半新段階としたSH3102aの土器より古いものが多く、建物の前後関係は本建物の方が古い。



第 133 図 竪穴建物 SH3245b 平・断面図



第134図 竪穴建物 SH3245b 出土遺物実測図

(55) SH3291b

3区中央やや東よりで検出した円形竪穴建物である。大部分が終末期の方形竪穴建物 SH3100b と重複し、その西側にややずれる部分で壁溝を、さらに SH3100b の床面下位で支柱穴を検出した。推定床面積は 32.6㎡。支柱穴は 5 基 (SP3282b・SP3278b・SP3371b・SP3233b・SP3339b) で柱穴間に小溝が 2 か所で部分的に遺存することから、支柱穴列の外側にベッド状遺構があり、屋内間仕切溝で段下と区分けされていたものと考えられる。

出土遺物は少なく、支柱穴の柱抜き取り痕より鉢 2 点が出土した。1047 は丸底の小形鉢だが、下半がやや尖り底気味に窄まる点でやや古い属性をもつ。1048 は中形鉢口縁部で端部は面取りを残す。これらの土器は終末期でも古段階に属することから、本建物の廃絶時期は終末期古段階とする。

(56) SH3312a

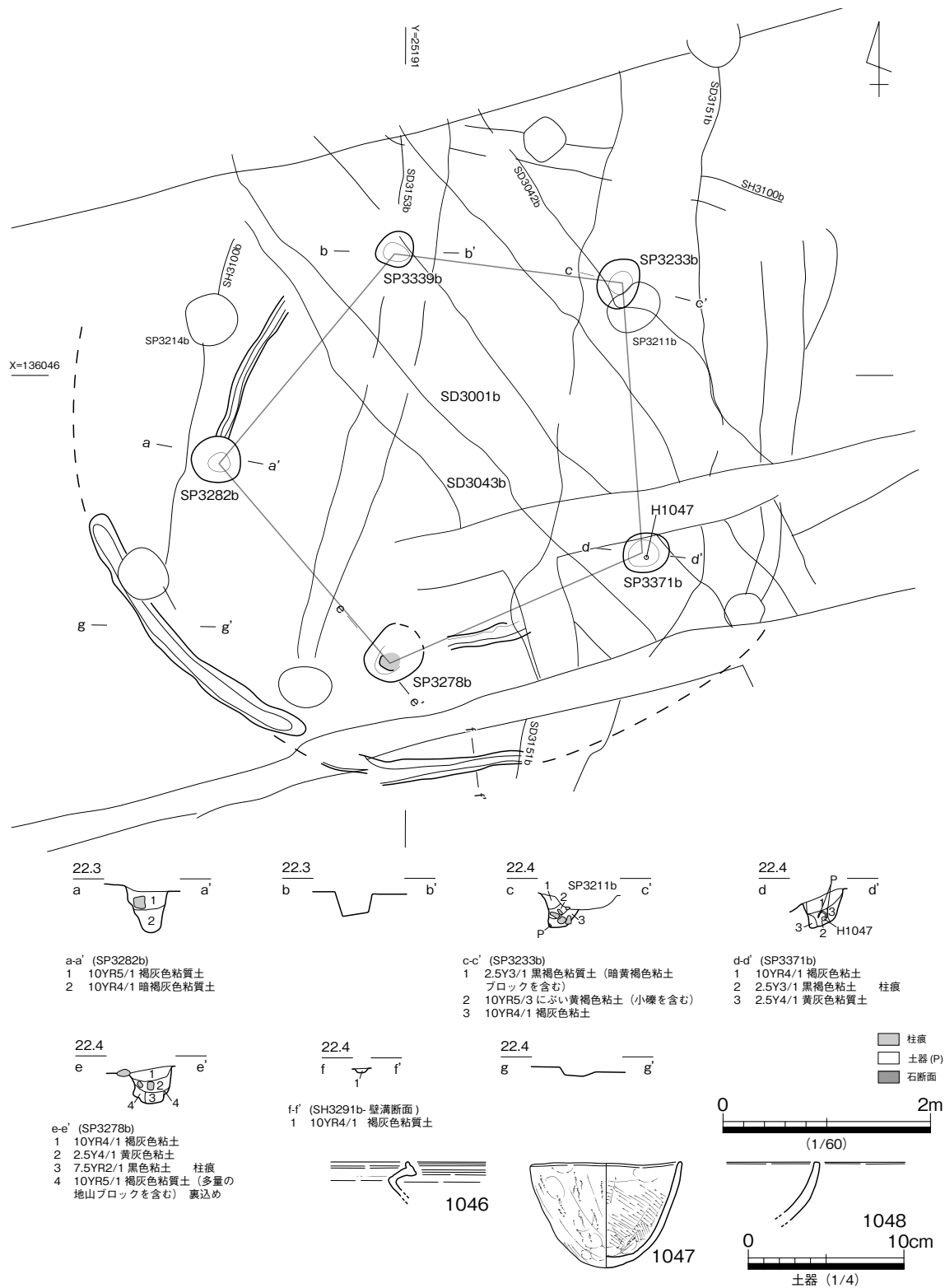
3区中央やや西よりで検出した 4 基の柱穴と短い壁溝の組み合わせから復元した竪穴建物である。支柱穴は SP3348a・SP3194a・SP3343a・SP3422a で壁溝は南端に僅かに残る。

出土遺物も土器小片のみで所属時期は不明である。

(57) SH3363a

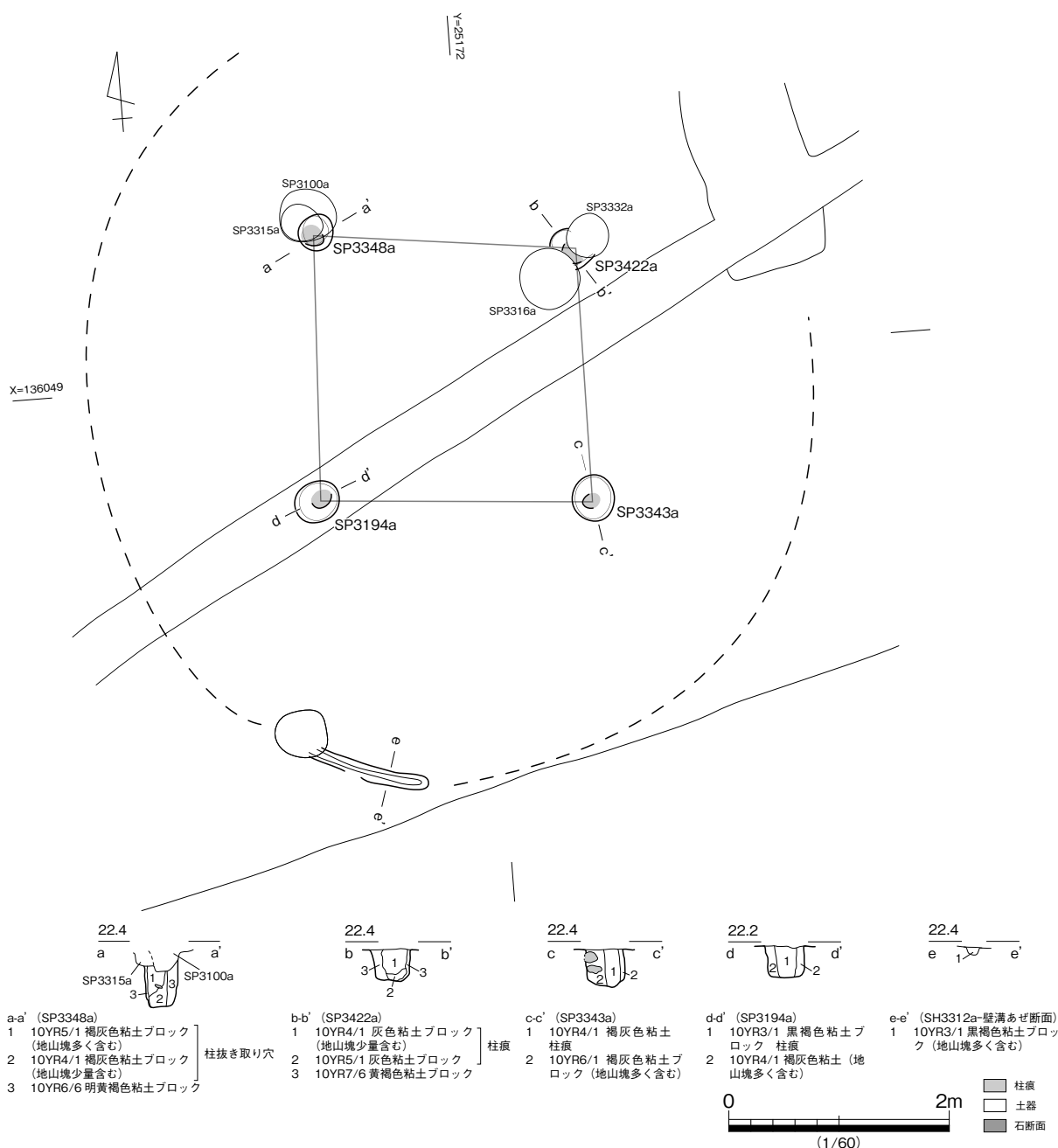
3区中央やや西よりで検出した楕円形の竪穴建物である。東に SH3842a が近接し微妙に切り合わない。北は攪乱で遺構面が残存しないが、復元プランを描くと、SH3312a と僅かに切り合う可能性がある。西は支柱穴のみから復元している SH3474a・SH3476a と重複する位置関係にある。推定床面積は 20.7㎡。

支柱穴は床面が遺存する南半分の柱配置から想定せざるをえない。現時点では 4 本支柱と 5 本支柱



第 135 図 竪穴建物 SH3291b 平・断面図 出土遺物実測図

の 2 つの主柱穴列が検出可能であることから、同じ位置で建て替えを行ったものと判断する。4 本主柱の組み合わせは SP3002a・SP3392a で構成する。両柱穴の中間位置の床面中央付近に中央土坑 SK3003a がある。これを炉跡と考え、それに切られる SK3455a は 5 本主柱の組み合わせに対応する炉跡と見て、

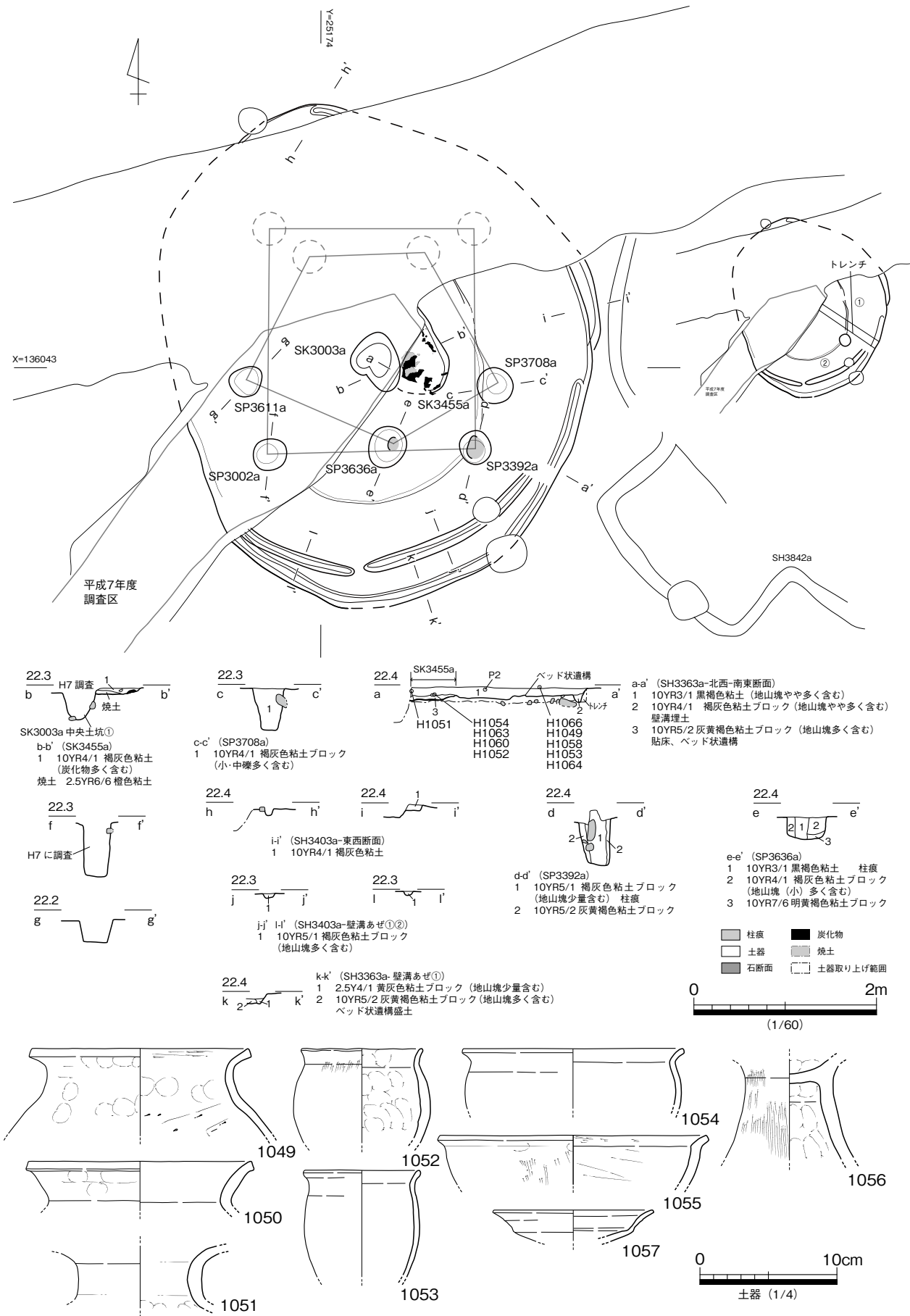


第 136 図 竪穴建物 SH3312a 平・断面図

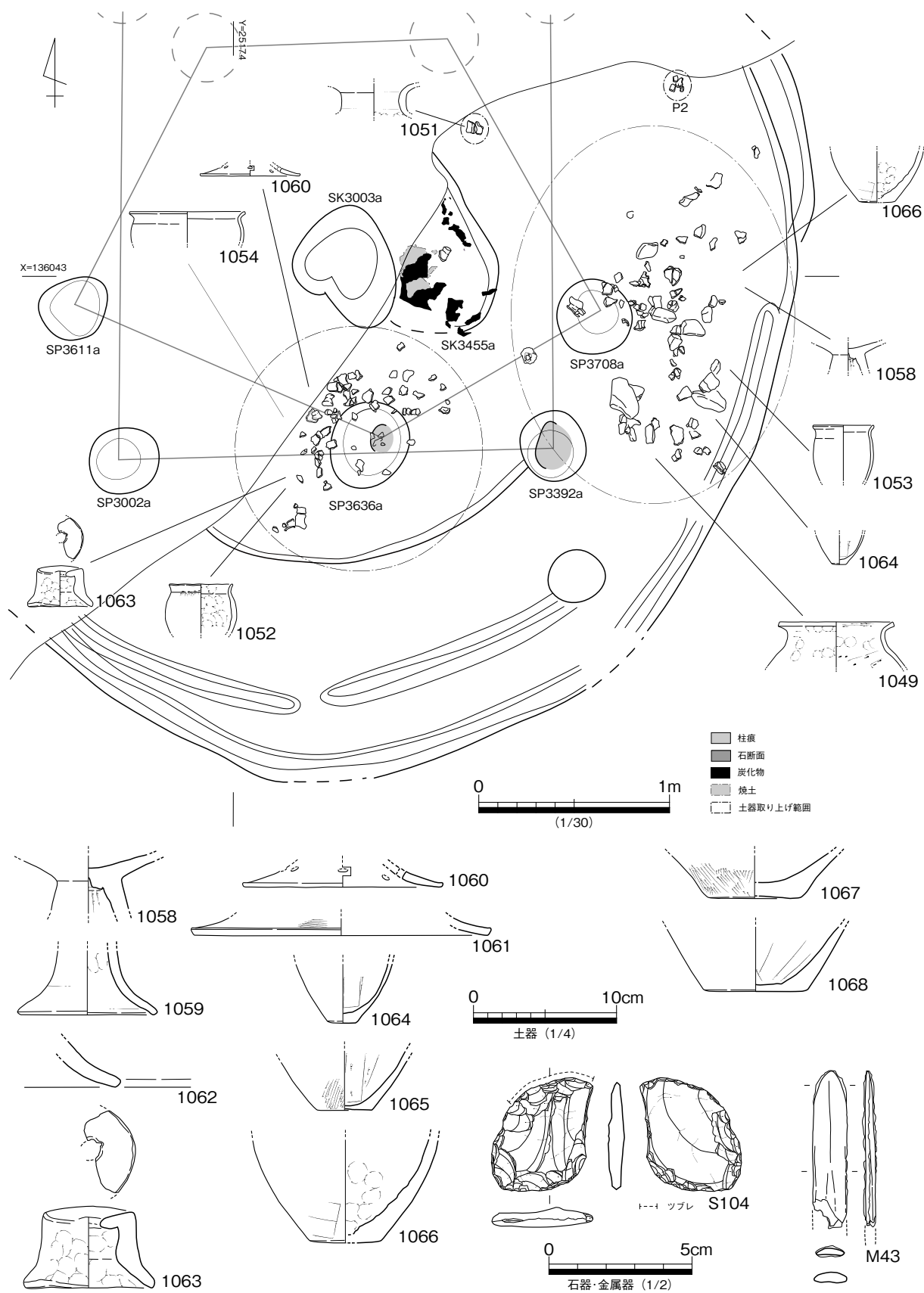
5本主柱から4本主柱への建て替えが行われたと判断した。5本主柱の柱穴構成はSP3611a・SP3636a・SP3708aである。SK3455aには炭化物・焼土がある。5本主柱の柱穴位置には図示したように土器が集中して出土した。これらはaライン1層の上面で出土しており、1層は建て替えに際しての貼床と推察する。

<出土遺物>

下層の5本主柱建物に伴う土器は1050・1055・1056・1065・1067である。これらは器壁が厚手で底部がやや上げ底気味といった後期前半の特徴を残す土器である。廃絶時に床面に遺棄された土器は、甕にあっては口縁部内面が緩くカーブを描いて反転する器形を呈し、高杯裾は端部を面取りし、底部は安定した平底を残す。これらの特徴は後期後半古段階に収まる。そのほか、本遺構出土の土器は花崗岩を



第 137 図 竪穴建物 SH3363a 平・断面図 出土遺物実測図 1



第138図 竪穴建物 SH3363a 遺物出土状況図 出土遺物実測図2

打割・破碎した大形の無色鉱物粒が多く含まれる特徴を共有する。

S104 はサヌカイト製の楔状石核である。周縁に敲打による潰れがある。

M43 は鉄製のヤリガンナ先端部片である。上端から 2.8cm まで刃部が研ぎ出され、そこから下は身幅を維持したまま側縁に面を作る。残存部下位には木質が残存した痕跡を留める。

以上の出土遺物から本建物は後期後半古段階に廃絶した建物と判断した。

(58) SH3376a

3 区中央部で検出した円形堅穴建物である。南東側で SH3245b が近接し重複する可能性があるが切り合い部分は残存しない。直径約 5 m で支柱穴は 2 基 (SP3953a・SP3954a) を検出した。推定床面積は 20.0㎡。柱穴間に長さ 1.7 m、幅 1.2 m の浅い皿状の土坑 SK3962a を検出した。土坑底面は西側が被熱して弱く焼土化し、その上部を土坑全面に炭化物層が覆う。炭化物は薄く層状をなす部分もあれば、塊状となる部分もある。鉄片等を伴うものでもなく一般的な屋内地床炉である。床面で多数の土器片が出土した。支柱穴の掘方上面も土器片が覆うが、柱痕部とは重複しない。

<出土遺物>

1069 は短頸広口壺で頸部がほぼ消失し後期後半新段階に下る。1070 は伊予系の複合口縁壺頸部下端に貼付される扁平なりボン状突帯である。頸部が緩やかなカーブで反転する器形を呈し、後期後半 (梅木 V -3 期) に属す (梅木 2000)。胎土は胎土 Hb である。1071 は沈線と竹管刺突文を組み合わせた長頸壺で後期前半古段階に、1072 は口縁部が受口状の甕で後期後半古段階、1073 は口縁部拡張の甕で後期前半、1074 ~ 1077 は後期後半の甕で 1075・1076 の口縁内面に強い稜線が出現するのは後期後半新段階である。1078 ~ 1081 は直口鉢で 1080 は丸底化が進み後半新段階に下る。胎土 Hb である。1082 は台付鉢で裾端部を面取りしており後半古段階、1084・1085 は焼成後の鉢の底部を穿孔した転用甑。底部が厚く平底形態をとどめ、専用甑出現直前の後期前半新段階に属す土器である。1086 ~ 1088 の底部はいずれも大形の平底で後期前半に属す。

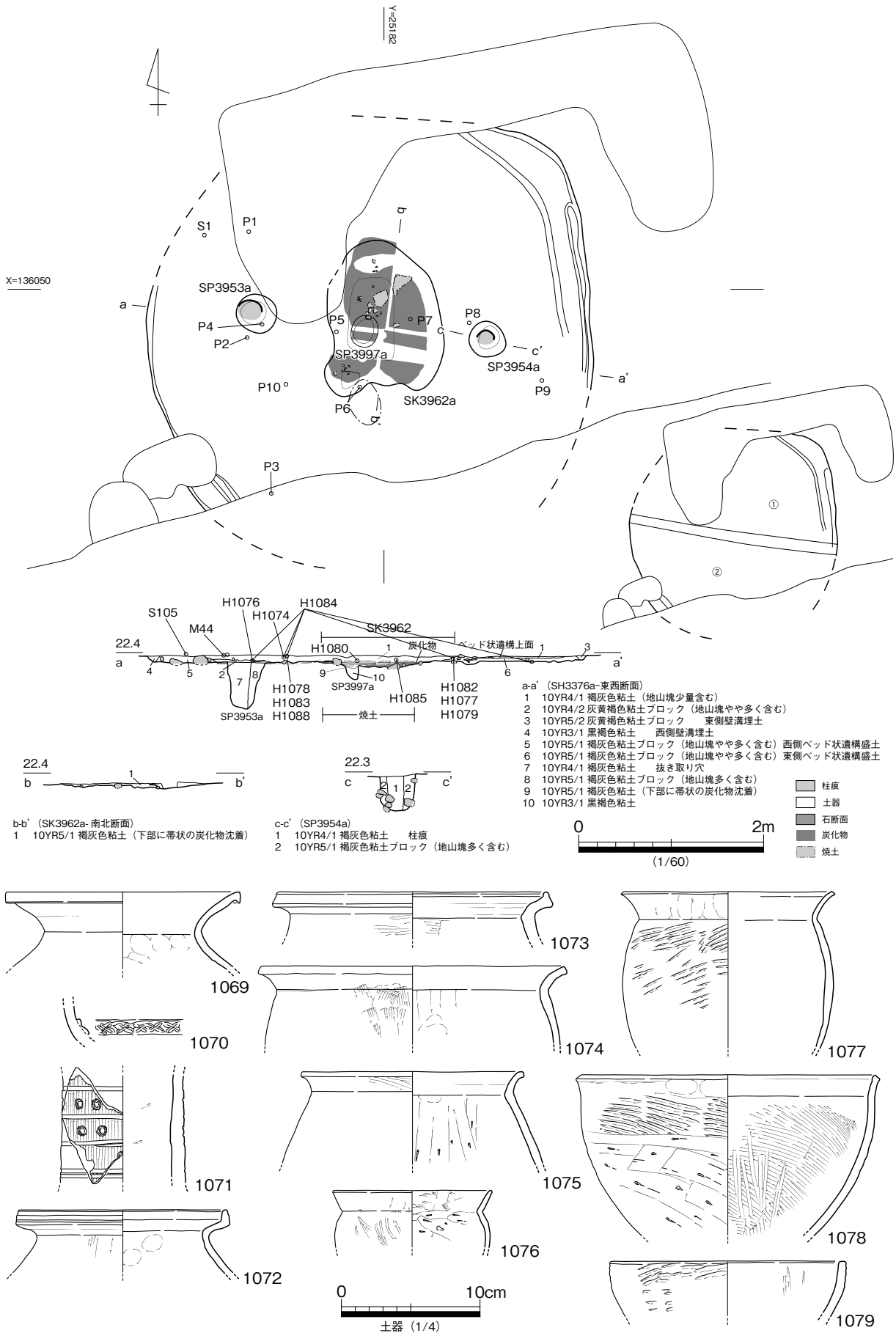
S105 は結晶片岩製の柱状片刃石斧の折損品である。稜線は鋭く破損後の転用は認められない。頻繁な使用と研ぎ直しで刃部が斜行する。

M44 は床面からやや浮いて出土した完形の圭頭斧箭式鉄鏃である。先端角が約 70 度とやや細い圭頭形の鋒で、鋒より下は直線的に窄まり、途中側部に面を作出しながら、先端 4cm 下から茎に移行する。大村分類の II 類 (大村 1983) に属す。

出土土器は後期後半古段階のものが多く、後期後半新段階の土器が少量ながら確実に含まれることから建物の廃絶時期は後半新段階と判断した。南東に隣接する後半古段階廃絶の SH3245b に後続する建物である。

(59) SH3376b

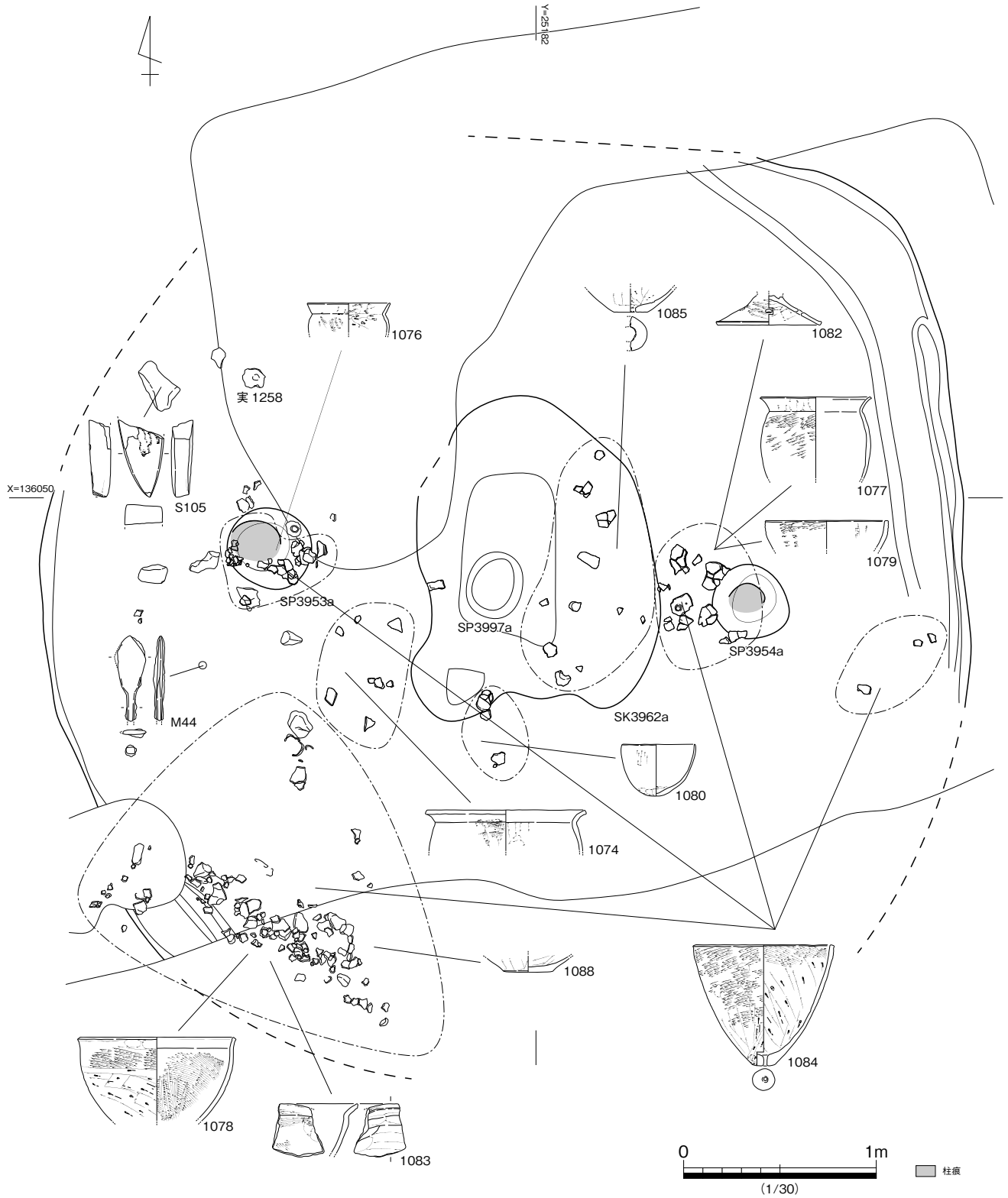
3 区北東隅で検出した円形の堅穴建物である。古墳時代前期の溝 SD3151b・SD3153b に切られ床面構造は不明瞭である。支柱穴と思われる 2 基の柱穴 (SP3189b・SP3383b) を確認した。平面プラン検出前に SD3153b に切られる土器溜まりを検出 (取り上げ時の名称は SX3149b) しており、それを本堅穴建物埋土と想定して掲載した。しかし土器溜まり分布範囲の記録は SD3153b の範囲に収まるものが多く、SD3153b の遺物も混在している可能性がある。



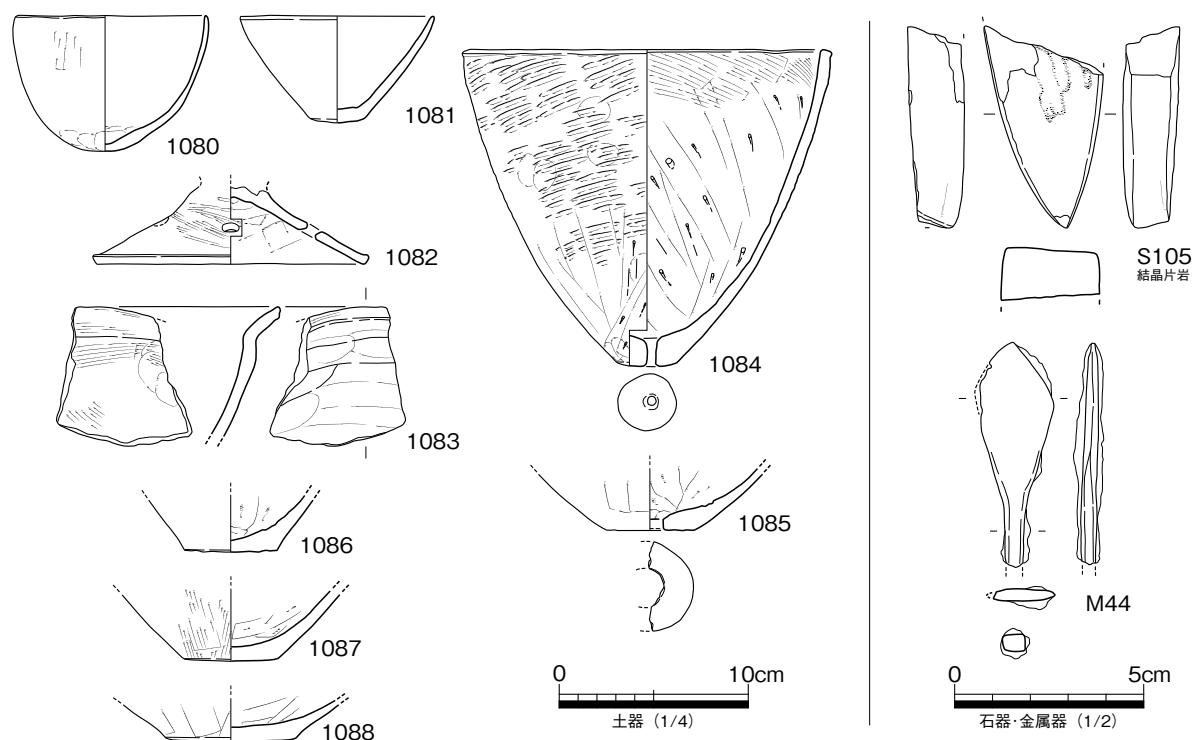
第139図 竪穴建物 SH3376a 平・断面図 出土遺物実測図1

<出土遺物>

1093 を除く土器はすべて土器溜まりで出土したものである。1089 ~ 1091 は短頸の広口壺で口縁部形状から後期後半古段階、1094 は下川津 B 類甕で内面稜線が緩く後期後半古段階、鉢の 1095・1096 は口縁部が外反し体部下半が比較的直線的な器形を呈す。台付の 1097・1098 は体部下半が直線的で内面見



第 140 図 竪穴建物 SH3376a 出土状況図



第 141 図 豎穴建物 SH3376a 出土遺物実測図 2

込に広い平坦面がないことから後期後半古段階に属す。1100の高杯は黒雲母を含む胎土Hである。口縁部に僅かに赤色顔料（ベンガラ）が付着しており、丹塗土器と推察する。1103は底部形態から終末期の鉢底部である。

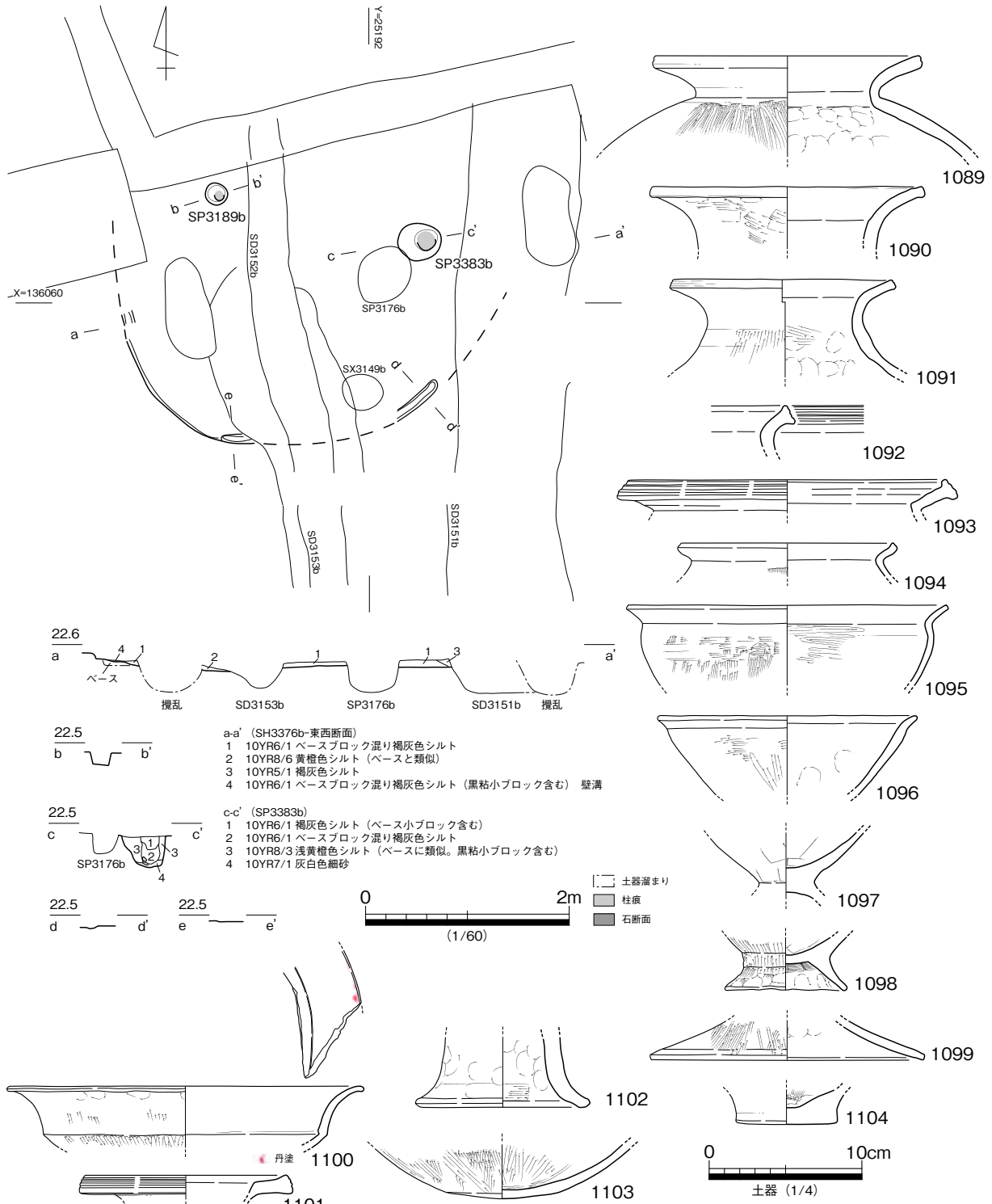
出土遺物は後期後半古段階のものが多く、終末期が混在する様相である。これは後期後半古段階の遺構を切り込んで古墳時代の溝が開削されその埋没過程で終末期の土器が混在したものと想定できる。本建物は後期後半古段階に廃絶したものと判断する。

(60) SH3377b

3区北東隅で検出した方形に復元できる豎穴建物である。支柱穴2基と軸を揃えて等距離で併走する溝を壁溝と理解し、その存在を推察した。支柱穴とした2基の柱穴SP3124bとSP3183bは3.1mの柱間を測る。図化できる出土遺物はなく所属時期は不明である。

(61) SH3439a

3区西側の中央付近で検出した円形の豎穴建物である。攪乱で大きく損壊し、西端は平成7年度研修棟調査区に及んでいたはずだが、掘方は未検出である。遺存部から推定すると南北に長い径5.4mの楕円形の平面形が復元できる。推定床面積は17.9㎡。支柱穴の配置は不明だが残存範囲において図示した2基を推定した。中央土坑はSK3454aで後期前半新段階の土器棺墓ST3513aと重複する。切り合い関係は微妙で、土器棺墓の断面記録では土器棺墓が後出する。土坑の北肩にはサヌカイトの大形スクレイパー（S108）と大形剥片（S109）が近接して遺棄されていた。土坑埋土には炭化物は少ないが、土坑の北側10cmの床面に炭化物溜があった。

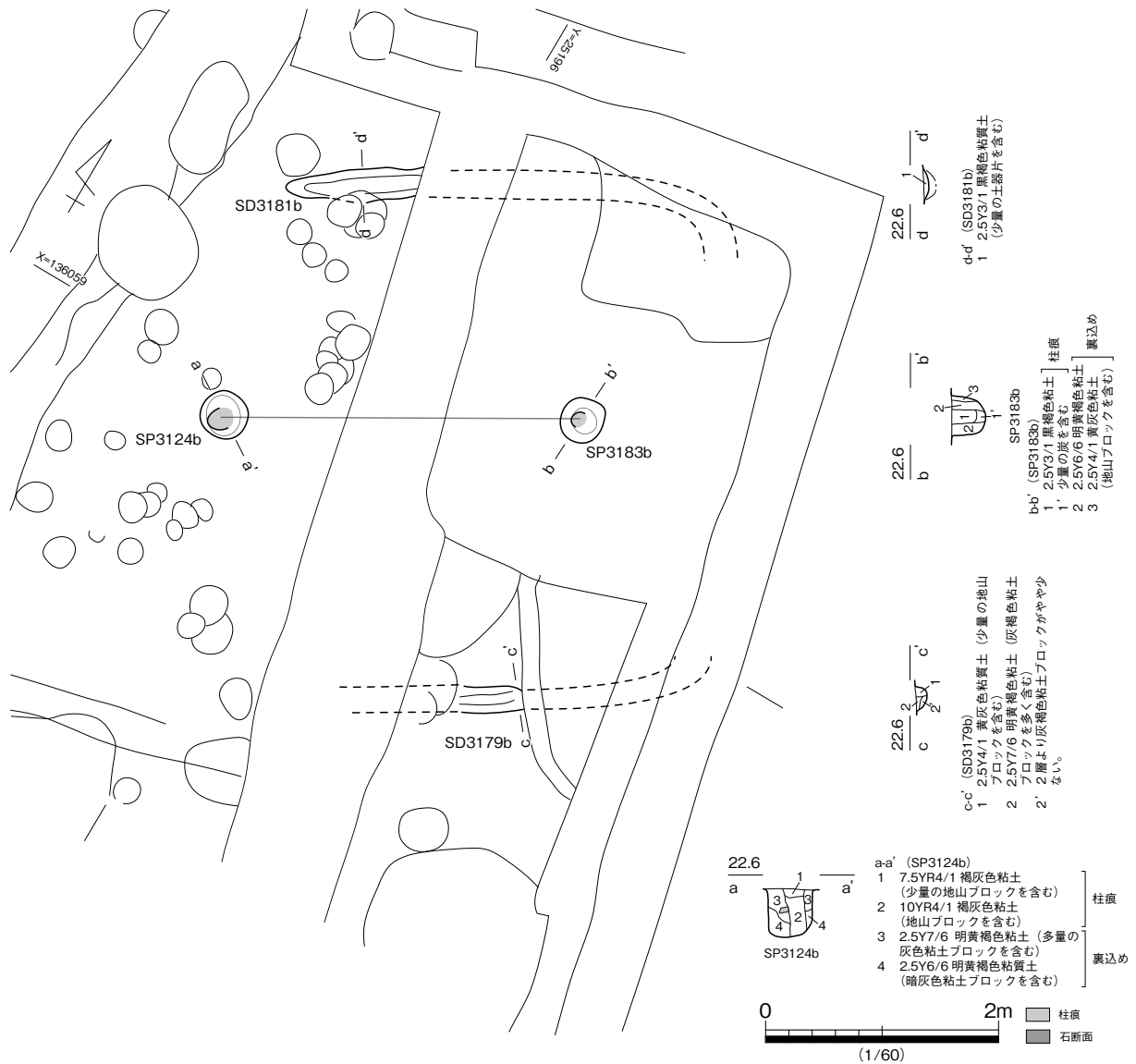


第 142 図 竪穴建物 SH3376b 平・断面図 出土遺物実測図

<出土遺物>

1105 は外面に櫛描文を施文する中期の壺胴部片である。1106 は口縁部を上方に拡張し凹線文を施文する甕で中期後半新段階に属す。1107 は底径の大きい壺底部で、後期に下らない。

S106・S107 はサヌカイト製打製石鎌で床面から出土した。S108 は大形のサヌカイト製スクレイパーである。板状素材から石理に沿って剥取した扇状の剥片の末端に表裏から調整加工し刃部を作出する。



第143図 竪穴建物 SH3377b 平・断面図

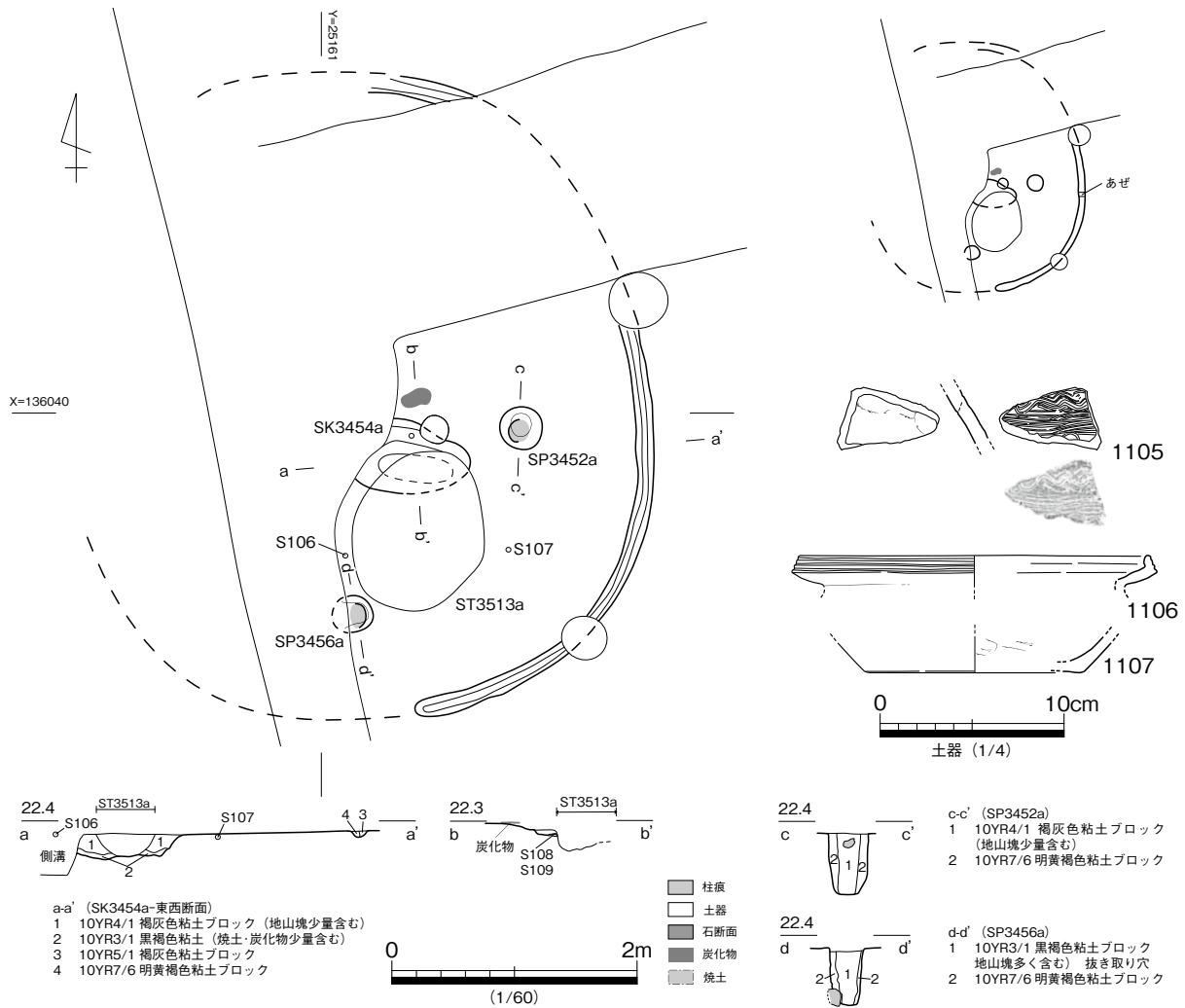
素材剥片の剥離時の稜線はほとんど摩滅が認められないことから、当集落で板状素材から剥離した剥片を使用した可能性が高い。S109も同様に稜線鋭い横長剥片である。板状素材の打面を取り込む剥片で、板状素材から最初に剥離された剥片、いわゆる「ファーストフレーク」である。

出土遺物は中期後半新段階を下限とする土器と遺存状態の良いサヌカイト製石器・石片であり、その時期を廃絶時期とした。

(62) SH3474a

3区西側の中央付近で検出した円形竪穴建物である。後述のSH3476aとは完全に重複する位置にあり、後期後半のSH3363aとは微妙に切り合わない。

主柱穴は5基 (SP3466a・SP3483a・SP3617a・SP3593a・SP3639a) がある。深い掘方の中央土坑SP3385aは平面形が隅丸長方形を呈することや、埋没土中に炭化物を含むことから、炉の可能性が高い。南東部で壁溝を検出した。推定床面積は19.4㎡。



<出土遺物と遺構の評価>

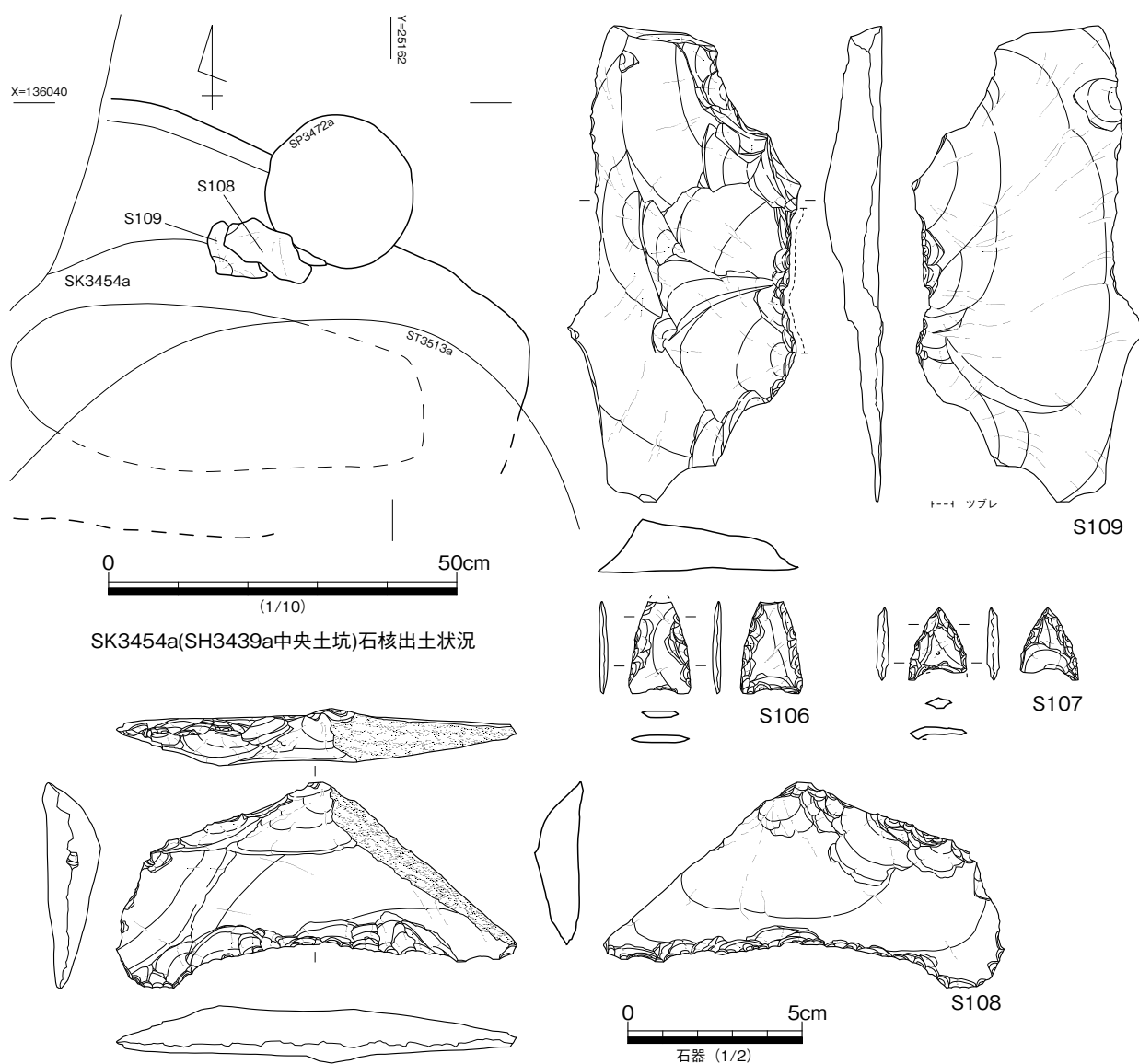
SP3466 で中期後半古段階の甕口縁部片が 1 点出土した。しかし、この場所には同時期の掘立柱建物も重複するため、そこからの混入を検討すべきであることと、隣接する後期後半の SH3363a との位置関係を考慮し、廃絶時期を後期前半新段階と推察する。

(63) SH3476a

3 区西側中央付近で検出した 4 基の主柱穴とその中央で検出した中央土坑から復元した建物である。主柱穴は SP3408・SP3469a・SP3008a・SP3502a で、中央土坑は SK3475a である。中央土坑は楕円形を呈し深さ 0.3 m と深めの灰穴炉である。

先述とおり SH3474a と大きく重複し、そのほか SH3363a とも重複する。また、不確定だが北側の SH3312a とは切り合いがあるかどうか微妙な位置関係にある。

図化できる出土遺物はなく時期は不明だが、床面が残存しないことから元々床面は浅く、後期後半以後の深い掘方の建物とは異なること、SH3312a と 4 本主柱の柱配置が共通しており切り合いの微妙な位置関係にあること、等から SH3312a とともに後期前半に属し互いに前後関係をもつ竪穴建物である



SK3454a(SH3439a中央土坑)石核出土状況

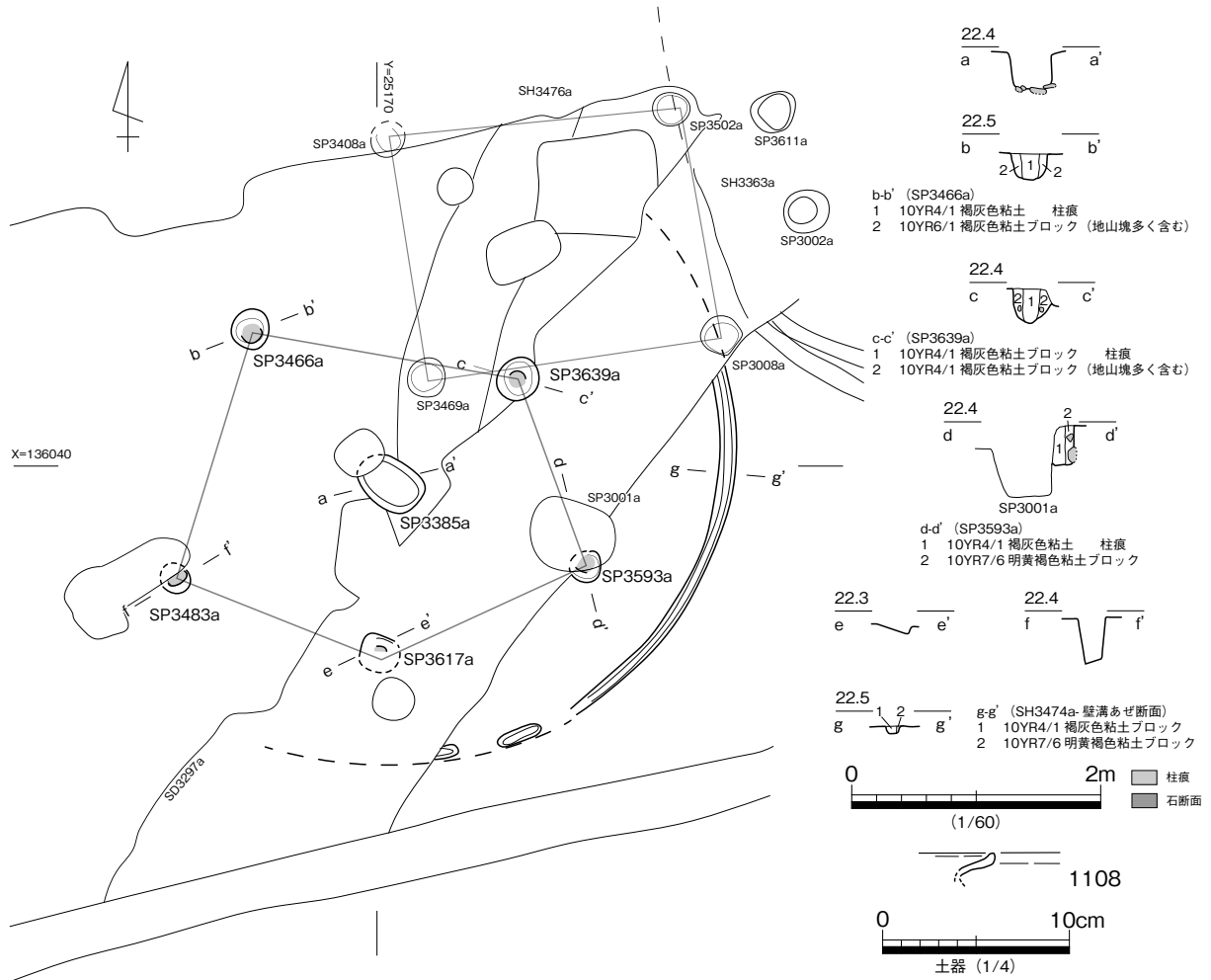
第145図 竪穴建物 SH3439a 出土状況図 出土遺物実測図

可能性が高い。前後関係のある建物が切り合わないとする、後期前半で SH3476 → 3312 → 3474、その後、後期後半で SH3363 → 3842 → 3245 → 3376 の推移が妥当と推察する。

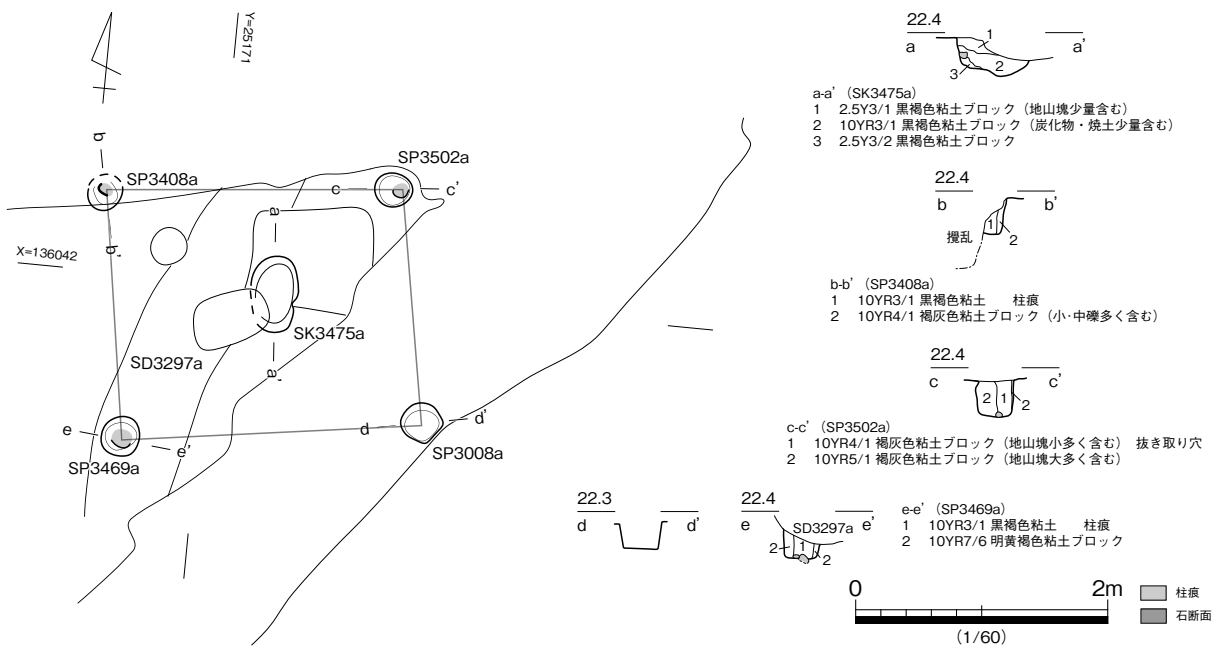
(64) SH3681a

3区西側やや南よりで検出した竪穴建物である。4本主柱で中央に深さ0.2mの炉跡SK3719aがある。北側に壁溝が遺存し、その円弧から復元直径は4.6mとなる。推定床面積は16.5㎡。壁溝は後期後半新段階の建物SH3042aの構成柱穴SP3673aに切れ、同じく中央土坑はSP3793aに切られる。また、壁溝は中期の掘立柱建物SB3915aの柱穴SP3797aの埋土を切る。

検出面から0.05mで建物床面に達し、床面遺物が出土した。床面遺物は1109・1110・1113・1117・1118である。床面下位に厚さ0.05mの貼床を置き、水平を採るとともに壁板を固定していたものと推察する。aライン3層は壁板抜き取りの溝(壁溝)である。それを覆う埋土1層は基盤土ブロックを含む埋め戻し土である。したがって床面遺物は建物廃絶時に遺棄されたものとみなし得る。



第 146 図 竪穴建物 SH3474a 平・断面図 出土遺物実測図



第 147 図 竪穴建物 SH3476a 平・断面図

<出土遺物>

1109は長頸系譜の広口壺で、胴部境は明瞭な屈曲はなく比較的緩やかにカーブして頸部が直立する。頸部下端外面に斜行文を蜜に施す。口縁部は頸部上端から緩くカーブして外反し端部は僅かに下方拡張して直立の面をもつ。後期前半の長頸壺の属性を留めつつ、広口壺への転換を終える後期後半古段階に位置づけられる土器である。1110～1115は中期後半の土器で下位遺構の混在品。1116・1117は甕底部で安定した平底を有す。1117は胴部下半から下位へ突出気味の器形を有するが、1116は胴部下半から器形変化せず直線的に底部に至る後期後半古段階の特徴を持つ。

1118は特異な形状の小形土製品である。直径18mmで中央がやや窪む円形頭部に直径8mmの中実の円柱が付き、根元で折損する。器面は摩滅が進み、得られる情報は少ないが、あえて可能性を探ると次のとおりである。まず土製品としての類例は縄文時代に系譜がある土製栓状耳飾の可能性を検討し、吉田分類のA I類2種(吉田2003)に当たる可能性を考えたが、穿孔がない点で決定的な相違がある。異材質資料を含めて検討し、中国大陸や旧楽浪郡域で出土するガラス製耳擋も可能性を考えたが、これも穿孔がない点で異なる。最も近似する例としては、北部九州の中期後葉の甕棺墓で出土する塞杆状ガラス器である。中国の新石器時代に出現するT形?を祖型とする髪飾り(簪)に付属したガラス製裝飾具とされ(藤田1994)、国内では福岡県春日市須玖岡本遺跡甕棺墓採集品、同県立岩遺跡28号甕棺墓出土品、同県安徳台2号甕棺墓出土品にあり、頭部円盤径が当品より2、3mm小さいが、柱の径はほぼ等しく、下方が若干細くなり全長は33～40mmで、いずれも鉛バリウムガラス製品である(小寺2016)。本品はこれらと比べ僅かに法量が大きい、形状はよく似ており、同製品を土製で模倣した「土製簪飾」の可能性をここでは提示しておく。同様の土製品は今のところ他に例はないが、この想定が正しければ本遺跡採集品である鉛ガラス製勾玉(本書第2分冊第423図1)やその他の舶載系遺物とあわせて、極めて重要な遺物となる。

出土土器は中期後半の土器が多いものの、上述のように後期後半古段階の土器が床面から出土することから、建物の廃絶時期は後期後半古段階と判断した。土製簪飾の所属時期にあつては中期後半の土器に伴う可能性も否定はできないが、当集落において北部九州系文物の流入は後期以後に盛行することから、現存資料から考えると後期後半古段階に所属すると判断するのが妥当である。

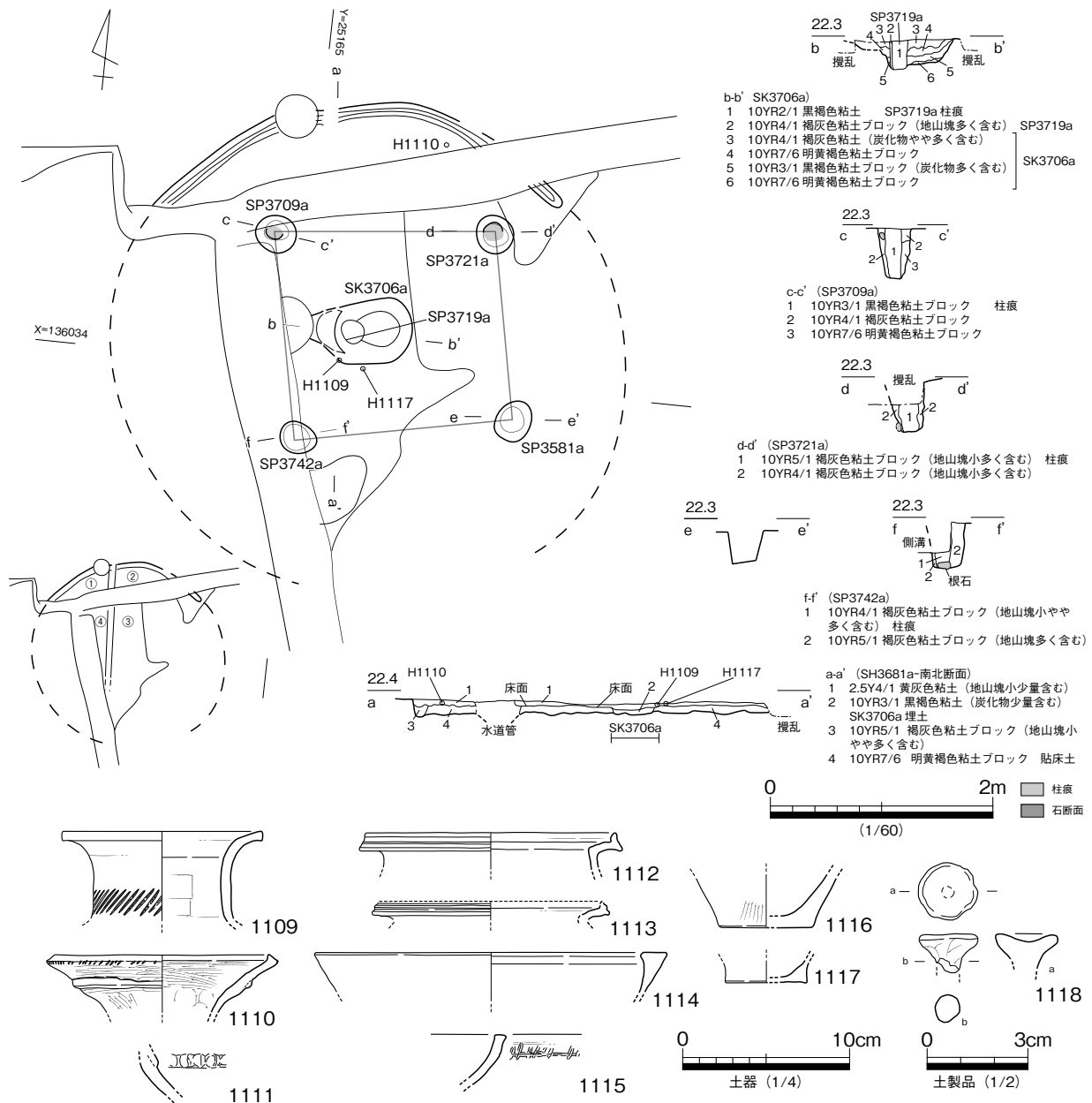
(65) SH3726a

3区中央部南側で検出した円形の竪穴建物である。建物範囲内で方形竪穴建物と重複する。当初この円形建物SH3726aは単独で存在すると捉えていたが、埋土の掘削途上に掘方内側で方形建物(SH3761a)を確認した。方形のSH3761aが円形SH3726aの埋土を切り込む。また掘立柱建物SB3913aと重複し、本建物が掘立柱建物の柱穴を切る関係にあるが、隣接する掘立柱建物SB3914a・SB3916aとは近接しつつも微妙に重複しない。

本円形建物SH3726aは直径5.6mで周縁に壁溝を有し主柱穴は4基検出したが攪乱部に1基を想定し、5本主柱の柱構造が復元できる。推定床面積は23.4㎡。中央部に長楕円形で深さ0.3mの中央土坑SK3843aが存在する。その南側を中心として炭化物・焼土が点在した。

<出土遺物>

1119・1120は拡張した口縁部に凹線文を施文する甕で中期後半新段階に位置づけられる。1122・1123の高杯も口縁部形態や裾部形態から同時期に位置づけられる。1121は低脚の台付鉢若しくは高杯



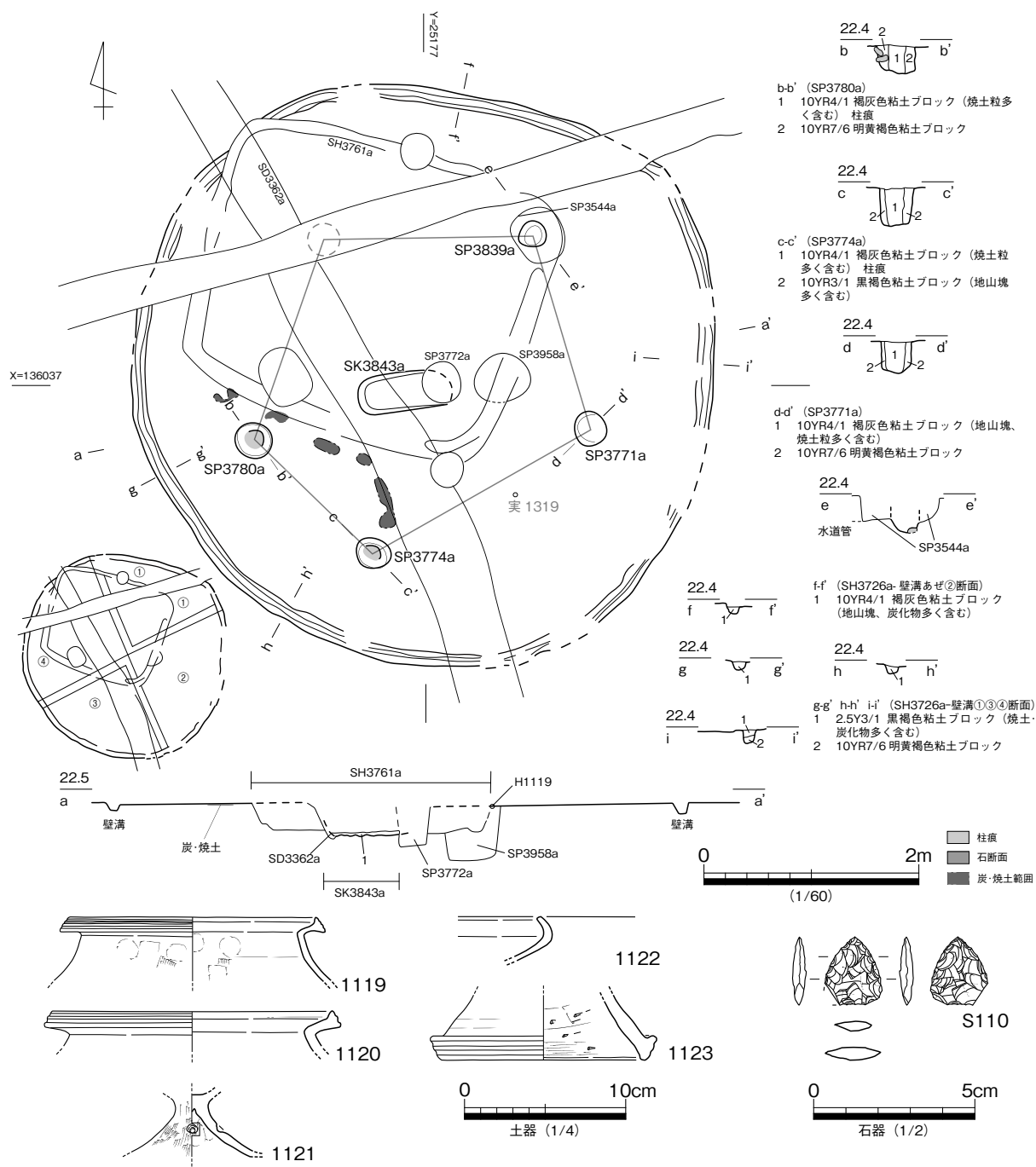
第 148 図 竪穴建物 SH3681a 平・断面図 出土遺物実測図

で脚と胴部の接続部は細く、脚に未貫通の透孔を有す。その形態から後期後半古段階に位置づけられる。

S110 は小形で平基式のサヌカイト製打製石鏃である。焼土・炭化物塊中から出土した。

上位の方形建物に切られているが床面の残存は良好で、出土遺物は中期後半新段階の限られた時期にまとまる。ただ、1121 は方形建物との切り合い判明の前日に出土した遺物で、方形建物又は掘立柱建物に伴う遺物とみてほぼ間違いない。

これらのことから、本建物は中期後半新段階に廃絶した建物と判断した。



第149図 竪穴建物 SH3726a 平・断面図 出土遺物実測図

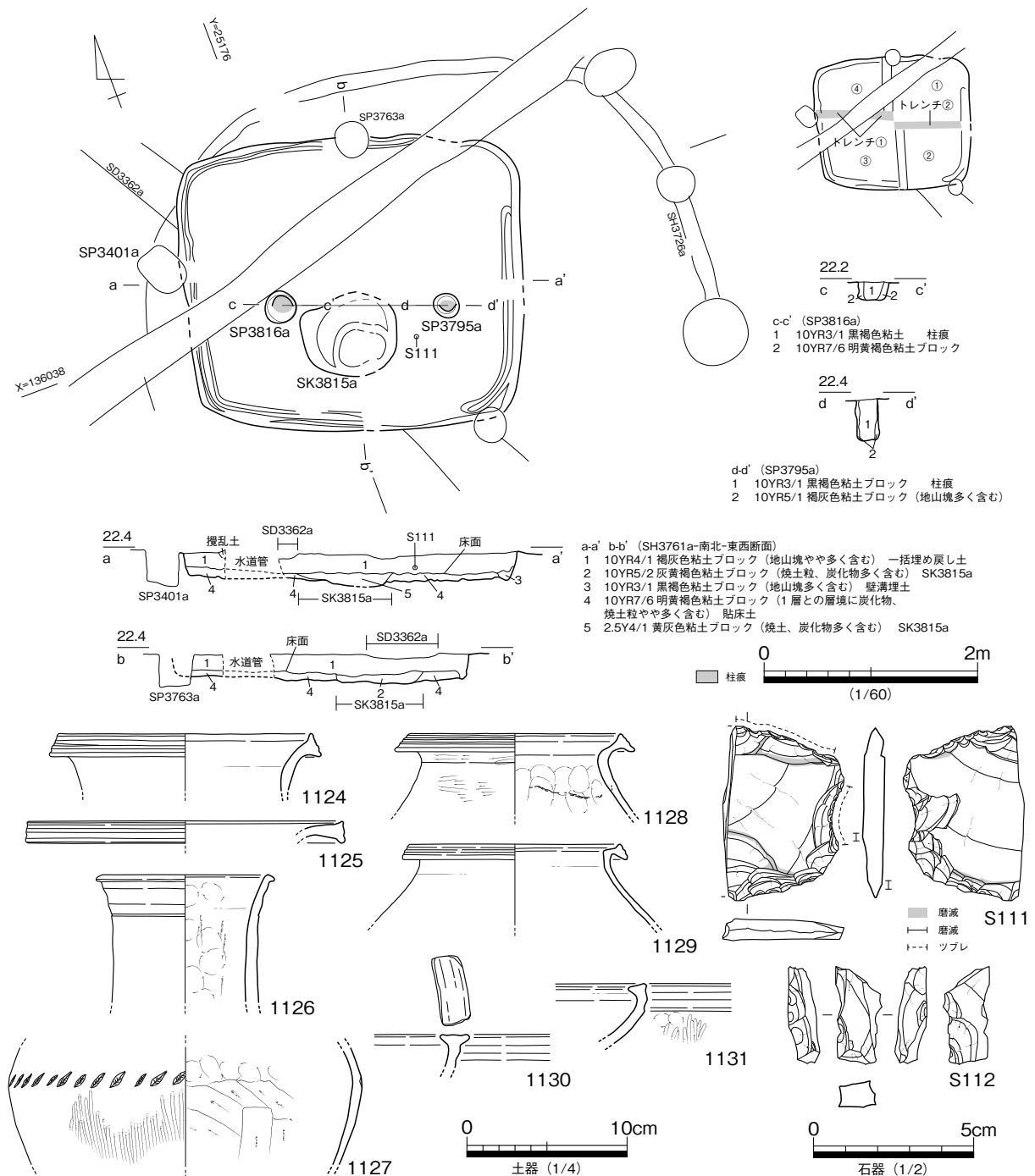
(66) SH3761a

3区中央部の南側で検出した方形の竪穴建物である。上述のようにSH3726aと重複関係にあり、それを切る。SH3726aの掘方内にはほぼ収まる大きさで、長辺3.23m、短辺2.75mとかなり小形である。推定床面積は8.2㎡。深さはSH3726aを凌ぎ、床面で検出面から0.2mある。床面には貼床層(aライン4層)を認める。支柱穴は2基(SP3816a・SP3795a)で間に中央土坑SK3815aを挟む。土坑は深さ0.1mで埋土中に焼土・炭化物を多く含む。土壌を洗浄選別して得られた3.01gの燃料材としての炭化材の樹種はサクラ属、マツ属複雑管束亜属であった(第4章第2節4)。なお、支柱穴と中央土坑は床

面の南に偏って配されるが、その理由は不明である。埋土上部は褐灰色粘土ブロックで、基盤土ブロックも多く含むことから、廃絶後一度に埋め戻したものと考えられる。

<出土遺物>

凹線文を施文する土器が主体である。1124 は口縁部の外反が緩やかで短頸の広口壺。頸部が直線的ではなくカーブしながら開く特徴は後期前半古段階の属性である。1125 は口縁部が大きく外反する広口壺。中期後半に一般的である。1126 は長頸壺で口縁付近のみ凹線文を施し、端部を面取りして外方に僅かに突出する。中期後半から出現する器形だが、口縁上端付近にのみ凹線文を施す特徴は後期前半古段階に続く属性である。1128 は内面口胴部境が強く締まり口縁内面に稜線がない器形で、口縁端部



第150図 竪穴建物 SH3761a 平・断面図 出土遺物実測図

は斜下方に拡張し凹線文を施す。胎土は茶褐色で黒雲母を多く含む備中地域の特徴を持つ。鬼川市I式の壺に例がある。1129は口縁部が短く屈曲して外反する甕である。中期後半新段階から後期前半古段階に一般的である。1127は胴部最大径に斜行原体刺突文を巡らす。1130・1131は口縁端部を内外面に拡張し体部外面に凹線文を施文する鉢で中期後半に属す。

S111は刃部に摩滅が残る打製石庖丁の半折品。S112はやや厚みのあるサヌカイト製剥片の周縁に表裏から加工を施すもので、特に風化が進んでいるものでもない。石鎌には細すぎることから、石錐等の細い器種の未製品かもしれない。

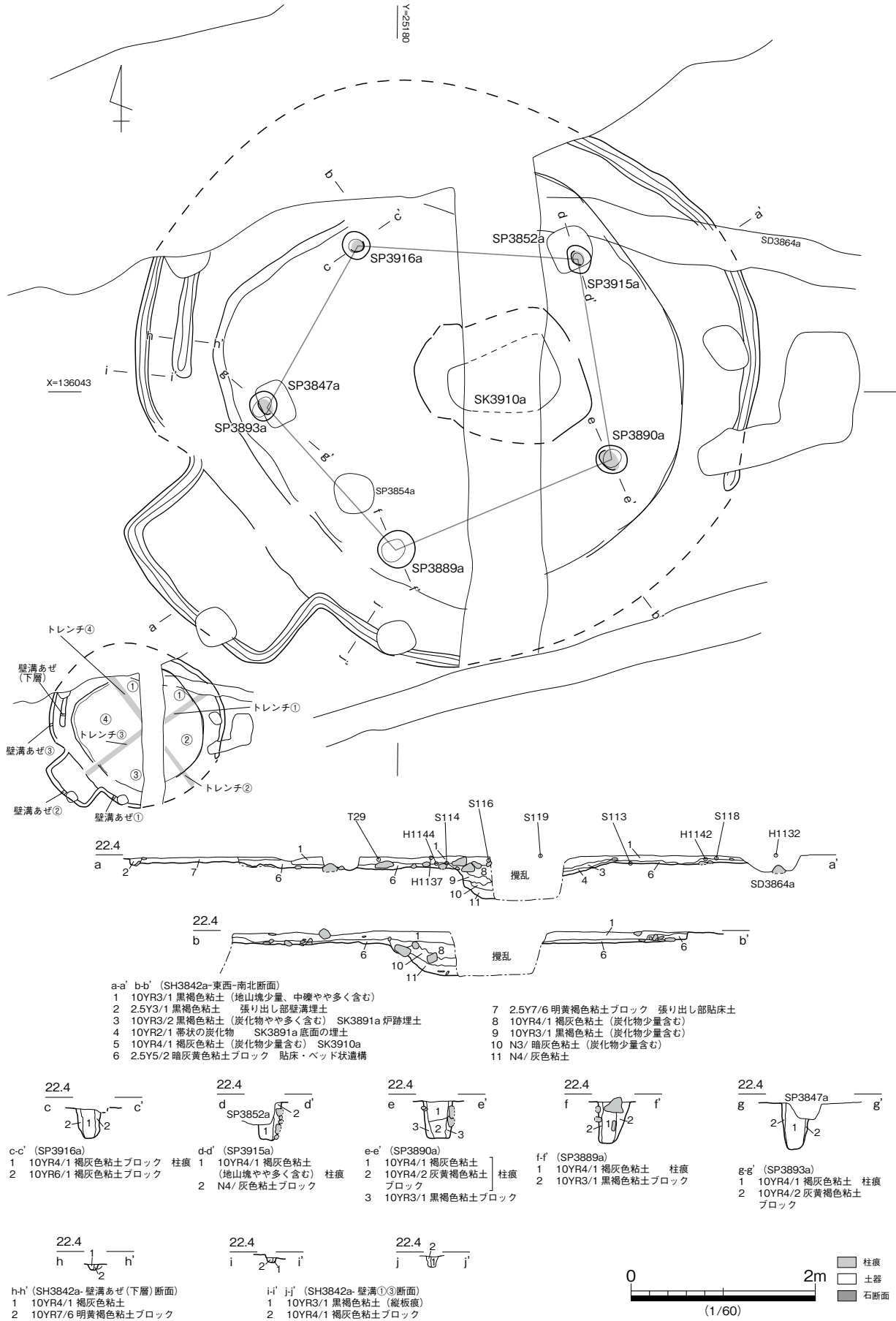
出土遺物は中期後半新段階から後期前半古段階の時期幅があった。これは下位の建物であるSH3726aとも共通する。一方で、下位の建物には後期後半古段階の台付鉢1121が含まれており、これは床面調査途上の混在と考えられた。これらの事実から、本方形建物は元来1121の台付鉢が示す後期後半古段階に廃絶したもので、本建物として取り上げられた遺物は全てが下位建物であるSH3726aからの混在であったと解釈できる。掘方の全てが重複することから、建物掘削時に周囲に構築した周堤帯に混在した下層建物の土器が、本建物の埋め戻しにあたって埋土中に埋め込まれたものと推察する。下層建物SH3726aの床面には炭化物・焼土等の廃絶時の遺棄物が認められたのに対して、本建物の廃絶時の床面は詳細に撮影された調査写真を観察しても、そのような遺棄物は認められず、床を片付けた後に埋め戻したことが想定できるので、そのことも上記推察を補強する。以上により本建物は後期後半古段階に廃絶した建物と判断した。

(67) SH3842a

3区中央南側で検出した突出部付円形竪穴建物である。周辺の竪穴建物とは近接しながら微妙に切り合わない。円形部は直径6.8mで突出部は幅2.2m、奥行1.2mを測る。推定床面積は34.1㎡。支柱穴は5基(SP3893a・SP36889a・SP38920a・SP3915a・SP3916a)で柱穴の外側にベッド状遺構が全周し約5cm貼床し構築した。突出部にも貼床がある。床面中央やや東寄りに長径1.9m、短径1.5m、深さ0.4mの中央土坑がある。埋土は主に3層で、下層に灰が押しつぶされ粘土化した土壤に投棄された土器片が包含される写真が残る。上部の2層は埋め戻した際の形成土で、特に上層には基盤土ブロックが多数含まれており、少なくとも2度にわたって建物を埋めたことが推察できる。床面には廃絶直前の遺物が残されていた。分布図に図示した遺物以外に、1136・1139・1140が中央土坑の下層で出土した土器である。

<出土遺物>

1132・1134・1135は床面で出土した甕である。内面口胴部境から口縁部にかけて緩やかにカーブして接続する器形を持つ。1135は口縁端部を上方に拡張するタイプの甕である。いずれも後期前半新段階に属す。このうち1132は白色の凝灰岩粒を含む白色系の胎土で特異である。1133は胎土中に角閃石を多く含む高松平野産の下川津B類甕である。口縁内面稜線が緩く口縁部も短いことから、初期の下川津B類甕で後期後半古相に属す。この土器は埋土出土である。1136は体部下半が直線的に開く鉢、1137は底部が下方に突出し平底の直口鉢である。1138は口縁部と体部境に突帯を持つ高杯である。1139は坏底部に小穿孔をもつ高杯である。支脚の可能性もある。1140は口縁部を拡張し凹線文・円形浮文を施文した器台である。筒部には沈線状の細い凹線文を施す。1141はその裾部の可能性がある破片である。上方拡張した端面に凹線文を施文し、筒部下端に竹管刺突文を付す。後期前半に属す。1142・1144は壺底部片で体部から短く下方に突出する底部で安定した平底を呈す。1143は角閃石を含



第 151 図 竪穴建物 SH3842a 平・断面図

む胎土の下川津B類の甕底部で埋土出土。

S113～S115はいずれもサヌカイト製打製石鏃である。S113は凸基式で柳葉形の鏃身形状を呈す。S114は凹基式の小型品である。S116は打製石剣と推定する。素材面が摩滅しており、打製石庖丁の転用で側縁に敲打による潰れがある。再加工途上の折損品の可能性が高い。S117は小形のサヌカイト製打製の擦切切断具である。両端に抉りを入れ刃部上下縁に器軸方向に強い摩滅が残る。S119は粘板岩製の磨製石庖丁である。直背直刃で側縁はやや内傾し平面形は台形となる。穿孔部の紐掛痕が斜めに入ることから、二孔と判断する。S118は表裏に摩滅痕があり、周辺に加工が残るサヌカイト製の大型片である。打製石庖丁を石核に転用したものか、あるいは刃器的に転用したものか不明だが、ここでは加工痕ある剥片とした。

M45は断面円形の棒状鉄片である。中央土坑下層より出土した。

T29は床面出土のガラス製小玉である。透明感のある青緑色の大型品で、色調や質感は分析したガラス小玉のうち多数派のものと同一である。酸化カリウム (K_2O) の多いカリガラスで銅や錫により着色したものと判断した。

出土土器は多くが後期前半新段階を示すが、埋土出土の1133・1143の高松平野産(下川津B類)の土器のみ後期後半古段階を示した。これは遺構断面の観察とも整合し、床面には廃絶時の土器が遺棄され、埋め戻しが2回以上行われたことから、廃絶後の埋め戻しが後期後半古段階にも行われたことを示している。

要するに、本建物は後期前半新段階に廃絶し、後期後半古段階にまたがって埋め戻しが行われたものと判断した。

(68) SH4001a

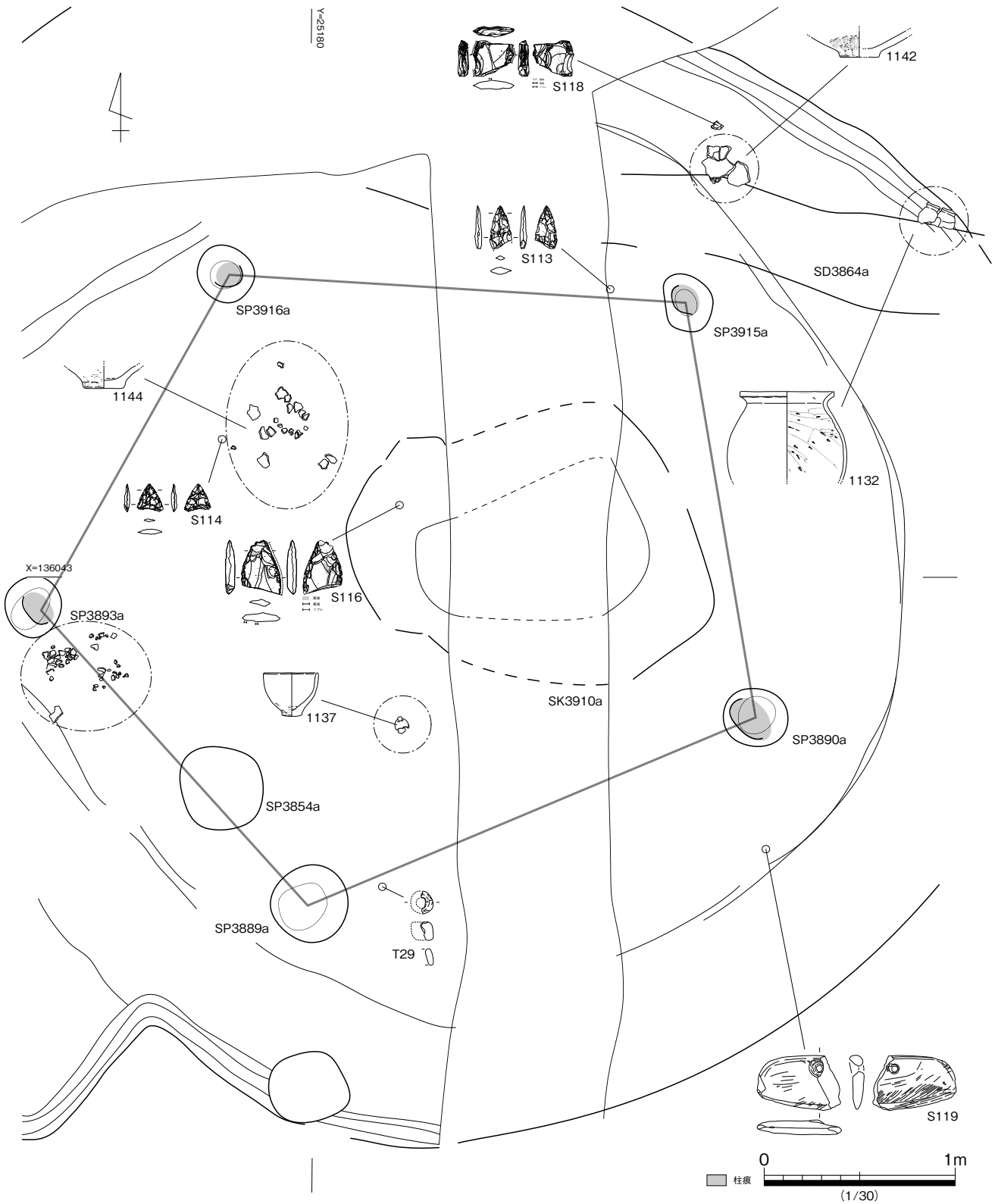
4区東南で検出した突出部付の多角形堅穴建物である。南側で後期前半の掘立柱建物SB4566aと重複し、それを切る。推定床面積は17.6㎡。主柱穴は4基(SP4200a・SP4208a・SP4232a・SP4202a)で中央に一〇土坑様式の2基の土坑(SK4164a・SK4260a)がある。SK4164aが深く、SK4260aは浅い。床面ほぼ全面に貼床(aライン5層)を認める。突出部との段差はなく、本体から壁溝が連続する。

中央土坑の堆積層にはいずれも帯状の炭化物層が介在する。そのうちSK4164aの炭化物はコナラ属コナラ節と同定されている(第4章第2節4)。また、床面でガラス小玉、銅鏃、鉄片等多彩な遺物が出土した。

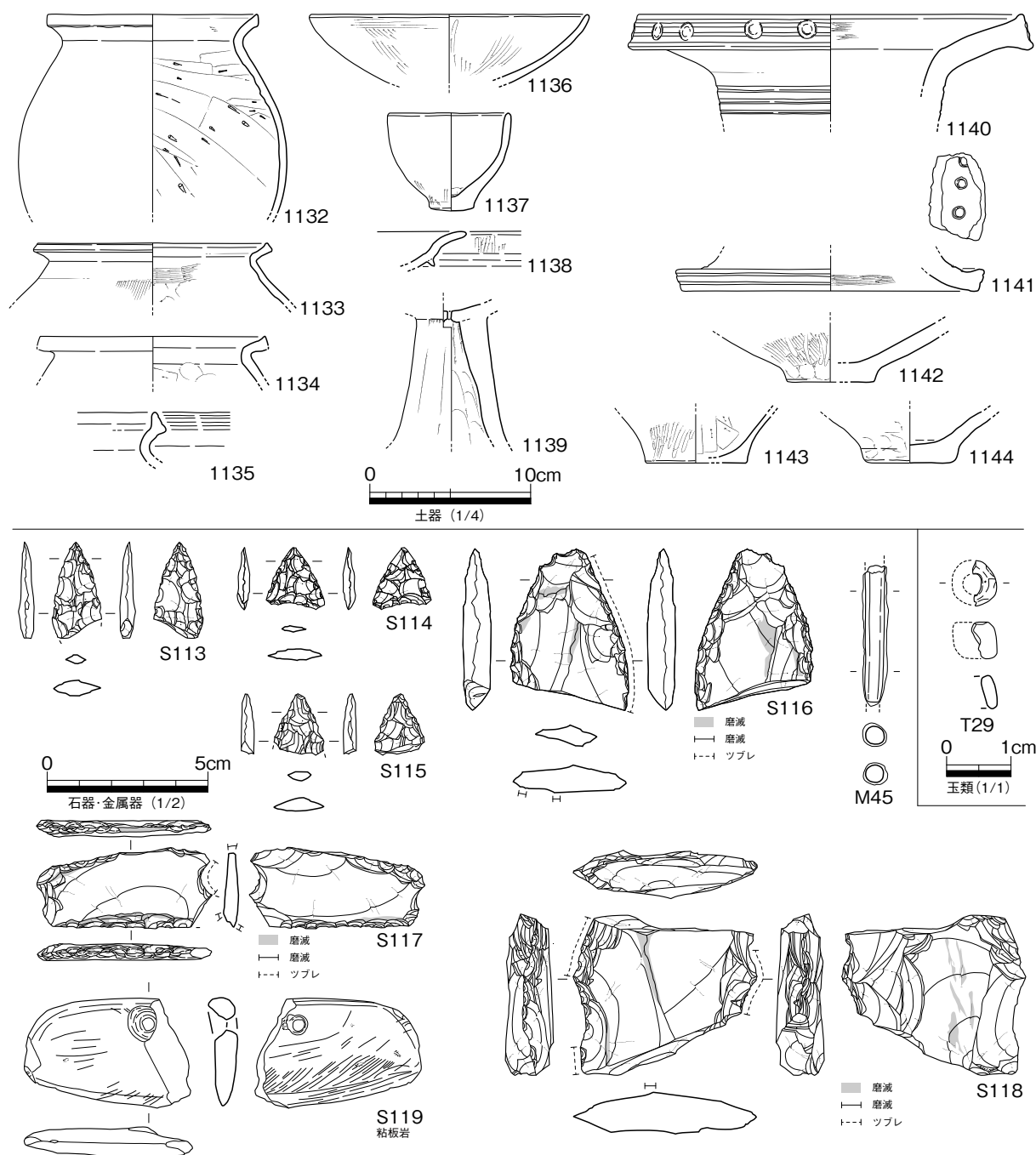
<出土遺物>

1145は口縁端部が外側に突出して強い内傾面を作出し、その面に凹線文を施し、さらに口縁内面に櫛描波状文を施す壺又は器台の複合口縁部である。内面の施文は複合部貼付前に行われたもので、西部瀬戸内地域の影響を受けた搬入系土器である。1146は胴部が玉葱状に張り、突帯2条を貼付しその間に3本の棒状浮文を貼付する吉備系の細頸壺である。これらの2点は後期前半に属す。

1147は拡張した口縁端部に退化した凹線文を1条施す甕。端部下方が突出気味となる形態から、これも吉備地域の搬入系土器の可能性が高い。1148・1149は鉢である。1149は片口鉢で口縁端部拡張が顕著である。1150は台付鉢で脚台が矮小化する。製塩土器の可能性も否定できない。1151～1153は高坏脚部で後期後半には下らない。1153は端面が内彎気味に斜め上方に突出した器形を呈し、吉備地域の特徴がみられる。1154は口縁部が面取りされた支脚(小型器台)である。1155～1157は安定した平



第 152 図 竪穴建物 SH3842a 出土状況図



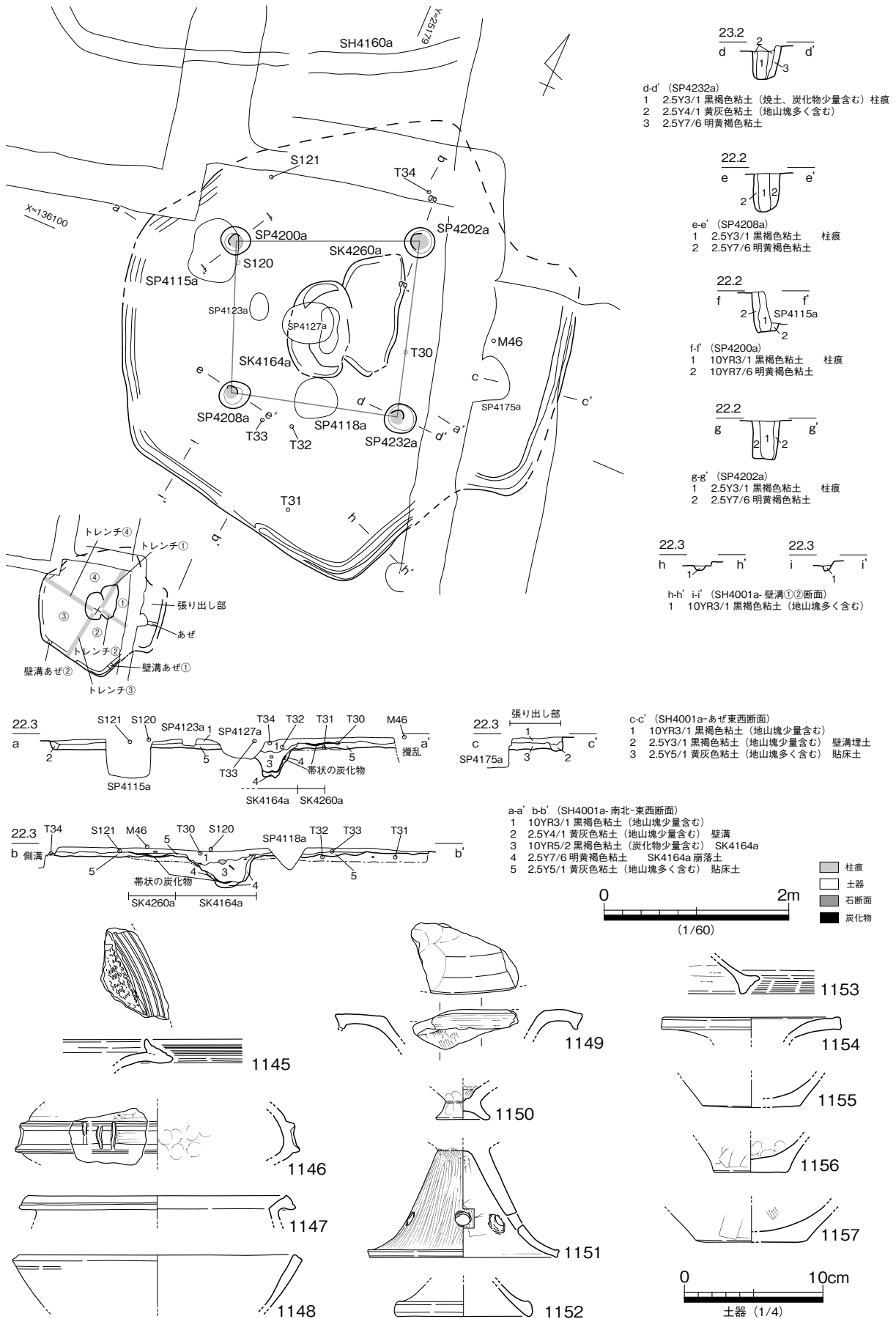
第 153 図 竪穴建物 SH3842a 出土遺物実測図

底の底部で、後期前半に属す。

S120 は長さ 4.3cm の平基式のサヌカイト製打製石鏃である。素材面は軽度だが磨滅がみられ、打製石庖丁を転用したものである。S121 は同じ長さで凹基 B 式の石鏃で素材面を大きく残す。

M46 は連鑄式銅鏃の小片である。劣化が著しいが、片面に僅かに鎬が観察できる。M47～M49 は板状鉄片である。M47 は鉄鏃等の製品と共通する厚さを持つが、M48・M49 は 0.5cm 以上の厚みがある。M48 は床面、M49 は埋土上層で出土している。いずれも折損品だが破断面は磨滅する。M50 は若干湾曲する棒状鉄片である。床面出土。

T30～T34 はガラス製小玉である。いずれも青緑色で酸化カリウムが多く銅・錫・鉛を含むカリガ



第 154 図 竪穴建物 SH4001a 平・断面図 出土遺物実測図 1

ラスである。T31・32は貼床層中に落ち込んで出土し、そのほかは床面で出土した。

出土した土器は後期後半に下るものではなく、1150の矮小化した脚台や1151の口縁拡張がない高杯裾等から後期前半新段階の土器が最も新しい。よって建物の廃絶時期は後期前半新段階と判断した。

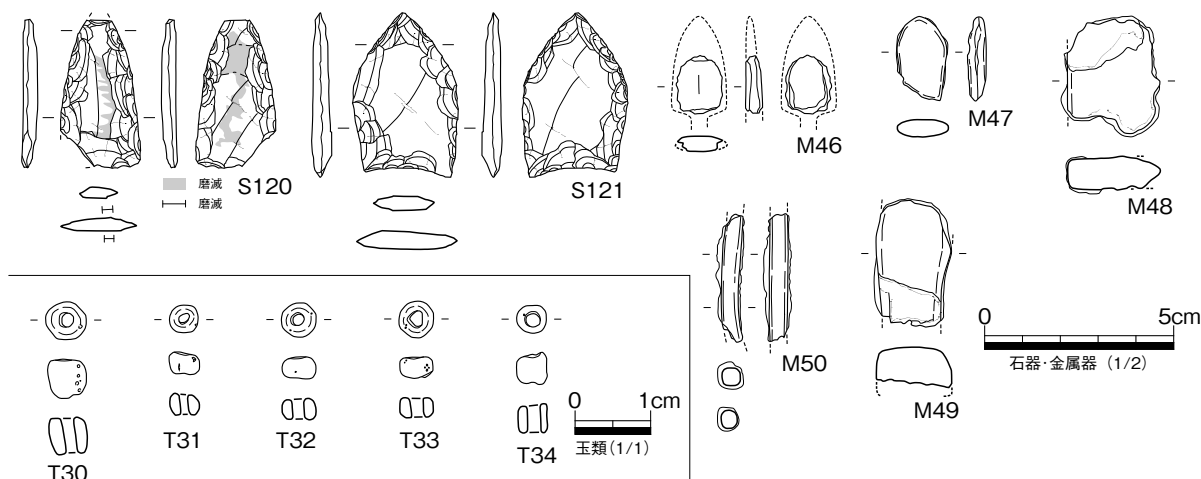
石鏃2点は石器減少時期にあつて床面から同サイズのものが出土していることから、本建物の廃絶に伴い遺棄されたものと判断でき、貴重な出土例である。玉類・鉄片類が多いのも後期前半の建物の特徴である。

(69) SH4016a

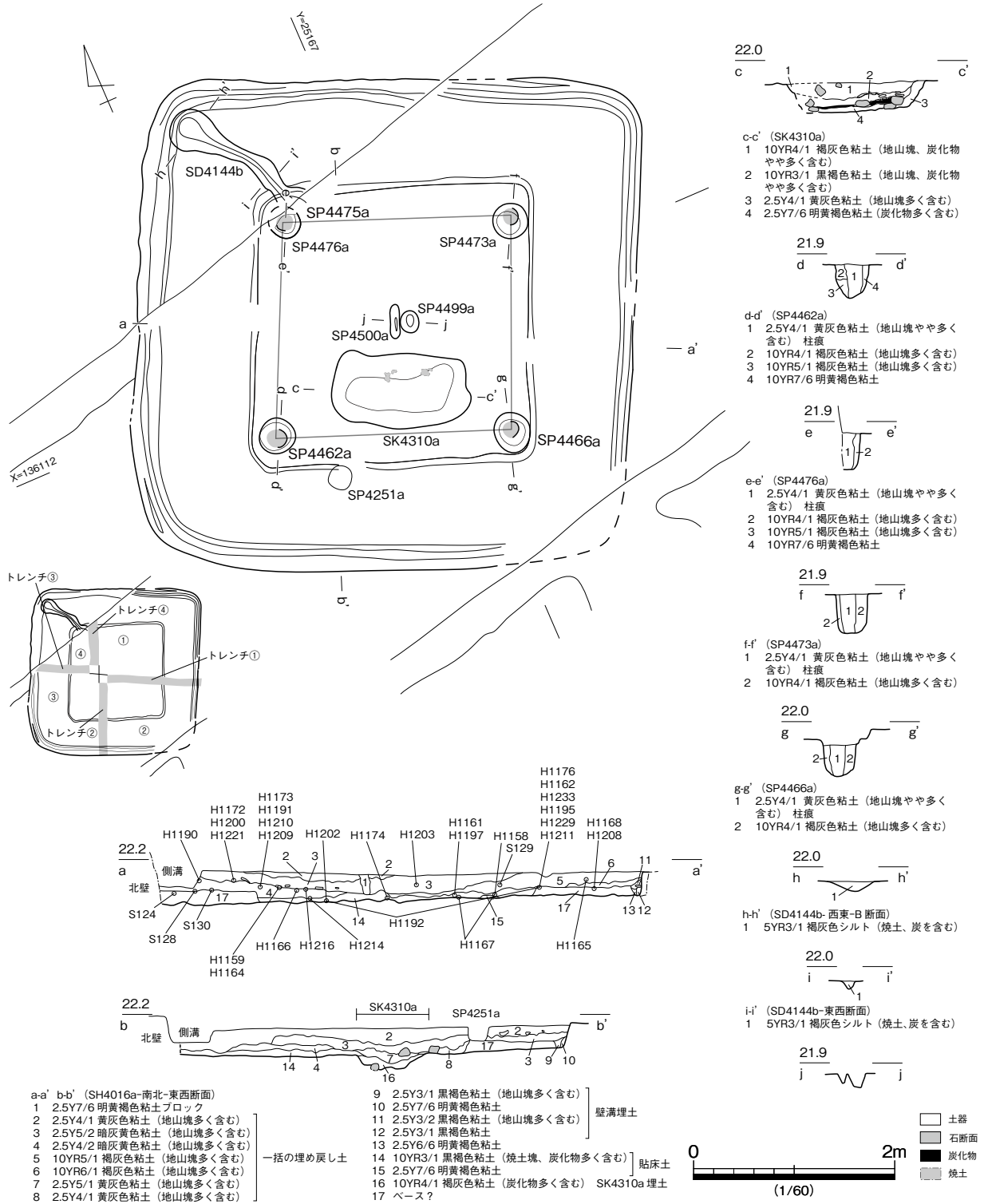
4区中央北側で検出した方形竪穴建物である。一辺4.9mで深さは0.25mを測る。推定床面積は23.3㎡。SH4254a・SH4121bを切る。

4本支柱（SP4476a・SP4462a・SP4466a・SP4473a）で、支柱の外側を貼床によって構築したベッド状遺構が全周し、壁際には壁溝を有す。段下床面の南に偏った位置に隅丸長方形の中央土坑SK4310aがある。埋土中には炭化物層が介在する。土坑の前面、建物の中心位置に深さ0.17mの円形小穴SP4499aと深さ0.1mの細長小溝SP4500aがある。中央土坑に付属する施設の据痕であろうか。またベッド状遺構の北隅に小溝SD4144bがある。屋内の間仕切り溝の可能性はある。なお、支柱穴は柱材の抜き取り痕跡は認められない。

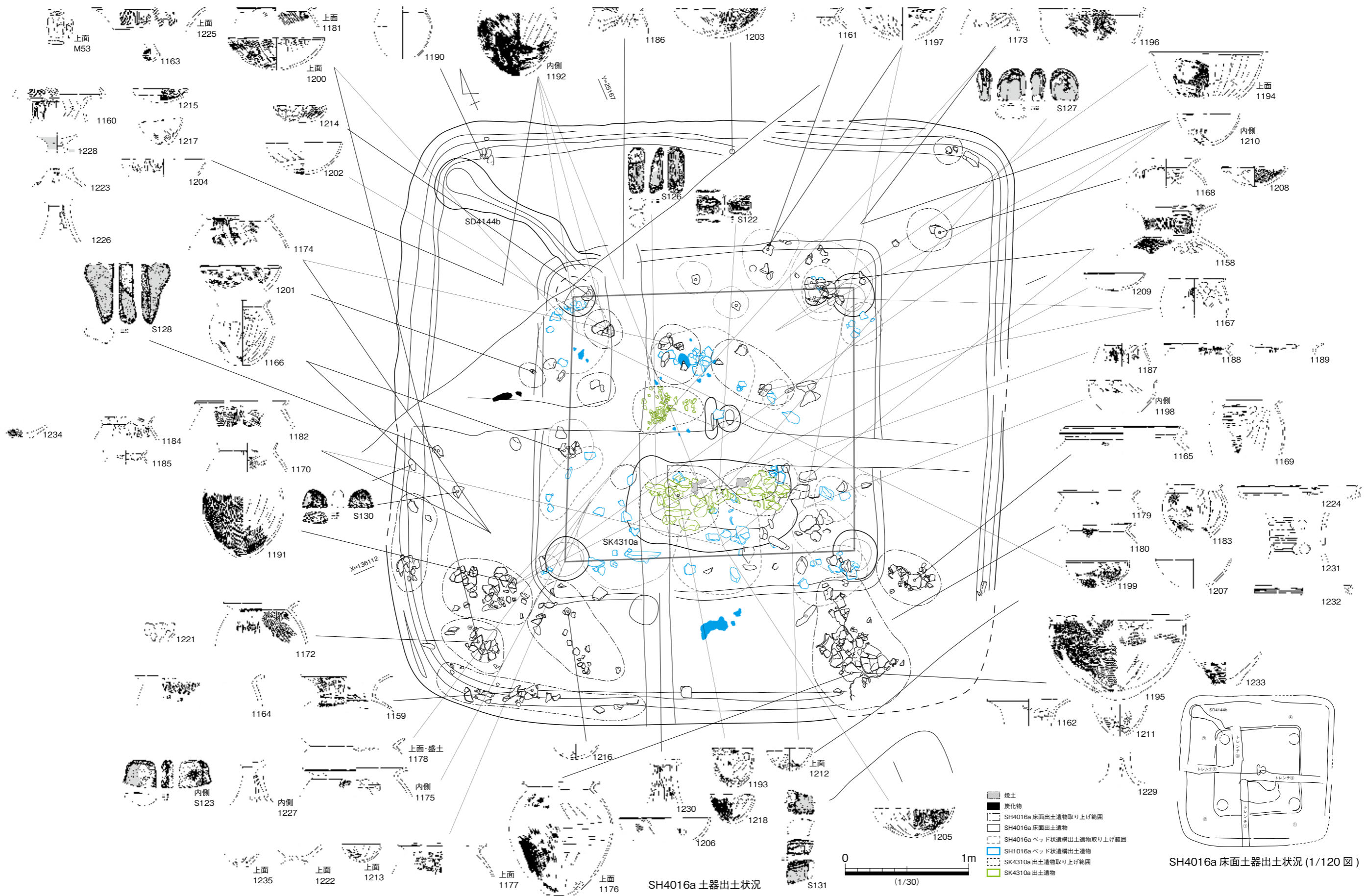
床面から多数の遺物が出土した。遺物はベッド状遺構上面から中央土坑にかけて、床面段差に沿って大形の土器破片や被熱した礫が含まれる。その上部を覆う埋土は基盤土ブロックを多く含む一括埋め戻し土である。そして一部に炭化材が含まれ、垂木状の配列もある。ただ全面に炭化材が残るのではなく、多くは土壌化している。この状況から、建物の廃絶に当たって、屋内に廃棄する道具類を残したまま上部構造の一部を焼き、その後一度に埋め戻し整地を行ったものと考えられる。失火による焼失家屋とは炭化材の残存が少ない点で異なる。なお、炭化した垂木材7点を分析した結果、すべてコナラ属クヌギ節と同定された（第4章第2節4）。



第155図 竪穴建物 SH4001a 出土遺物実測図2



第156図 竪穴建物SH4016a平・断面図



第 157 図 竪穴建物 SH4016a 遺物出土状況図

<出土遺物>

1158～1162は壺である。1158・1159は球形の胴部から頸部が強く屈曲して斜め上方に立ち上がり、さらに屈曲して口縁部が開く形態の広口壺である。口縁部は面取りするが、大きな拡張は見られない。1158は胎土Hである。1160は複合口縁壺である。端面に鋸歯文を上下交互に間断なく施文する。複合鋸歯文で右下がりの斜線を充填するA1類の鋸歯文である。1161は短頸の壺で後期後半からの系譜の最後期である。これらの壺は終末期に属し、その新段階に位置づけられる。1163はミニチュア壺で頸内径が狭小で小指も入らない。

1164～1193は甕である。体部の球胴化と体部の丸底化が進む土器群でそのために胴部から口縁部へは強い屈曲で接続するものが多い。さらに口縁端部を面取りせず、摘み出して尖らせるか、丸く収めるものが多い。終末期の特徴である。1165の甕は中期後半新段階で混在品。詳細は観察表に譲るが、胎土H及び胎土Hbをもつ土器が多い。

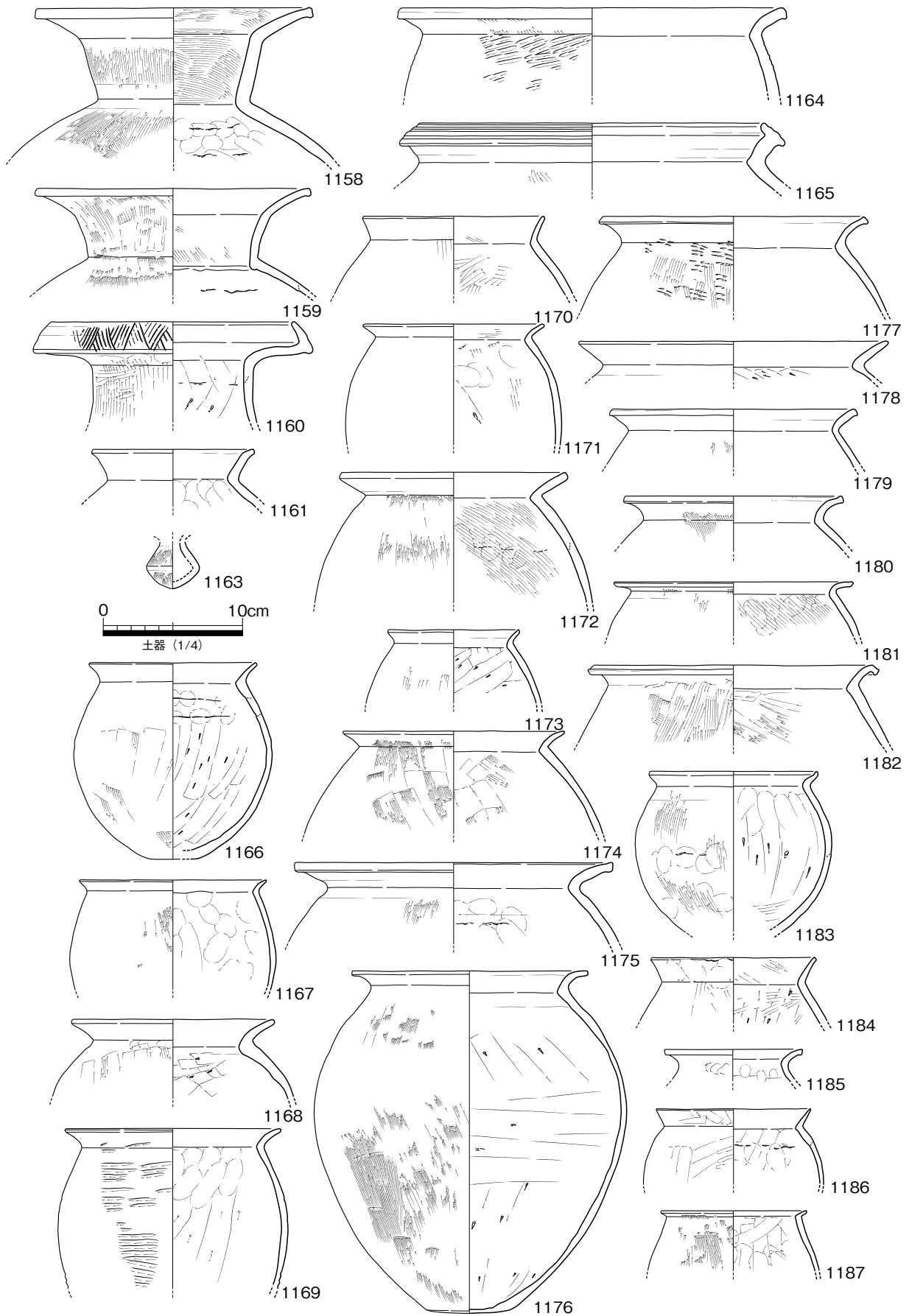
1194～1199は口縁部が外反する鉢である。1197は半球状の体部に口縁部が短く屈曲するもので終末期新段階に属す。1200～1209は浅い皿形を呈する中形の直口鉢である。端部を面取りせず、丸く収める終末期新段階の特徴をもつものが圧倒的に多い。1210～1221は小形の直口鉢である。体部下半の形状は尖り底傾向がある終末期古段階とは異なり、緩やかなカーブを介して丸底に至る。

1222・1223は台付鉢である。1222の底部見込み部は平坦で後期前半に属す。1224～1230の高杯は1224が後期前半、1225が後期後半古段階である。脚部はいずれも長脚で後期前半と考える。1228は外面丹塗。1231・1232の器台も後期前半の混在である。

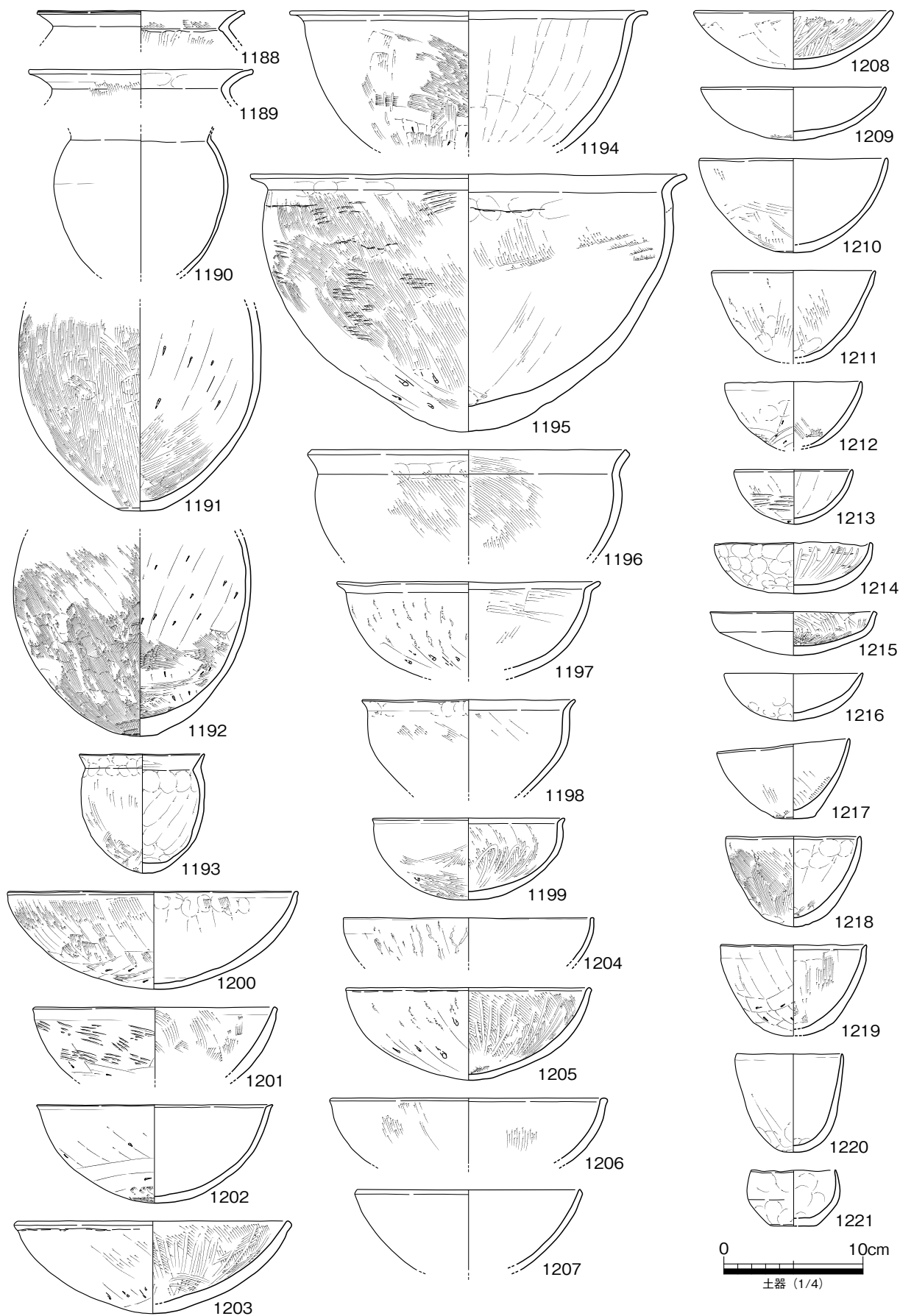
S122は灰色を呈す結晶片岩の擦切切断具である。刃部には細かな線状痕を有する磨滅痕が観察できる。S123は砂岩製砥石である。不整形の円礫の片面に#1500～2000の砥面が残る。裏面には敲打痕が僅かに残る。被熱し部分的に赤化する。S124は安山岩製の砥石である。短冊状に剥離した扁平な直方体の表裏面に#2000程度の研磨痕を残す。器面は灰白色に風化する。S125は灰色を呈する方柱状の安山岩製砥石である。三面に#4000程度の研磨面を残す。S126は流紋岩の棒状大形石片の三面に砥面を残す砥石である。#2000～4000の研磨面で、傷溝が顕著。S127は砂岩円礫の側縁に大小七面の砥面を残す砥石である。#1000～4000の研磨面を形成する。S128は砂岩製の不整形円礫の表裏及び側面に#4000ほどの研磨面を残す砥石である。被熱の影響で破裂して分割する。S129は流紋岩の方柱状の打割礫の側縁等をノミ工具で整形した痕跡が残る。表面に一部には整形のための#1500の研磨を僅かに施す。流紋岩砥石の未製品である。S130は砂岩製の叩き石である。小口付近に敲打痕を残し、側面一部に#1000の研磨痕が残る。S131は砂岩製の台石である。表裏面の磨滅は軽度で#1000である。被熱により破断した痕跡がある。

M51は小形の連鑄式銅鏃である。表裏に鏃が僅かに残り、関の削り込みも痕跡程度に残る。M52は棒状の鉄製品で片面が平坦で、対面が凸面となる。残存状態が悪く、土ごと取り上げられており、細部の観察は困難。M53は袋状鉄斧である。厚さ0.5cmの鉄板を折り曲げて作出したものである。下端の破断面は錆に覆われる。

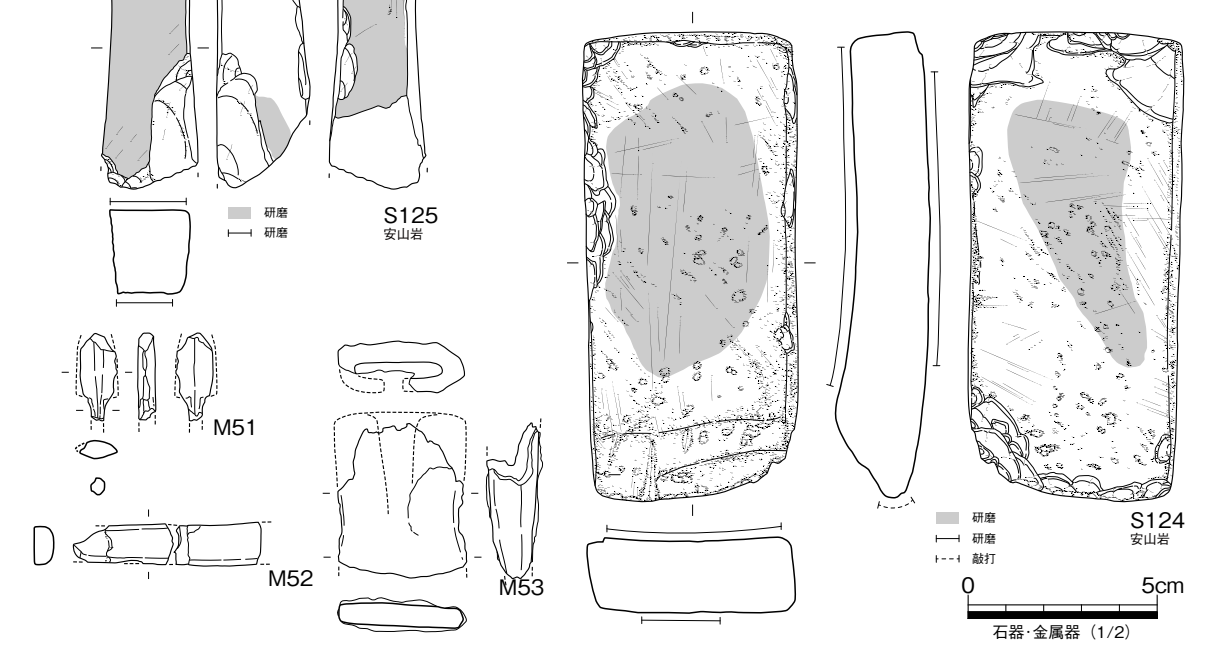
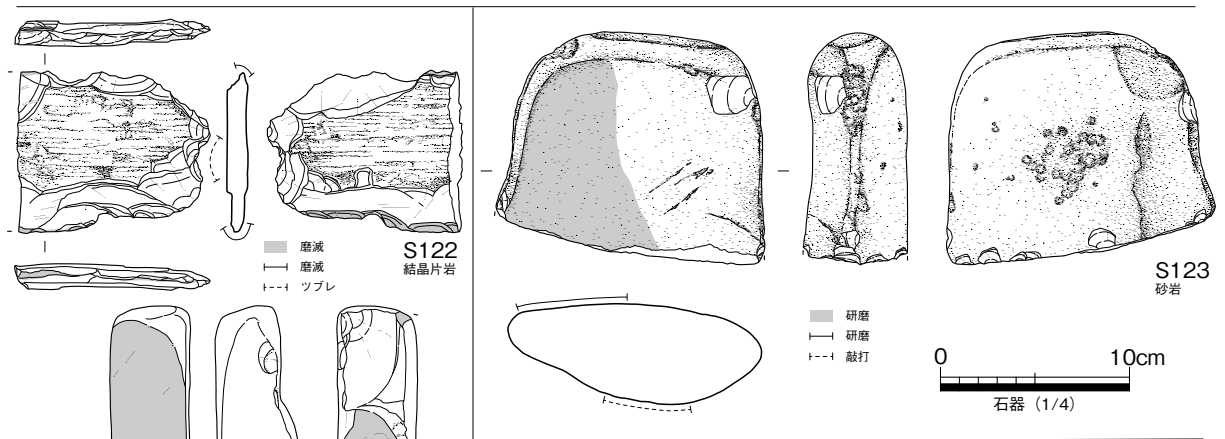
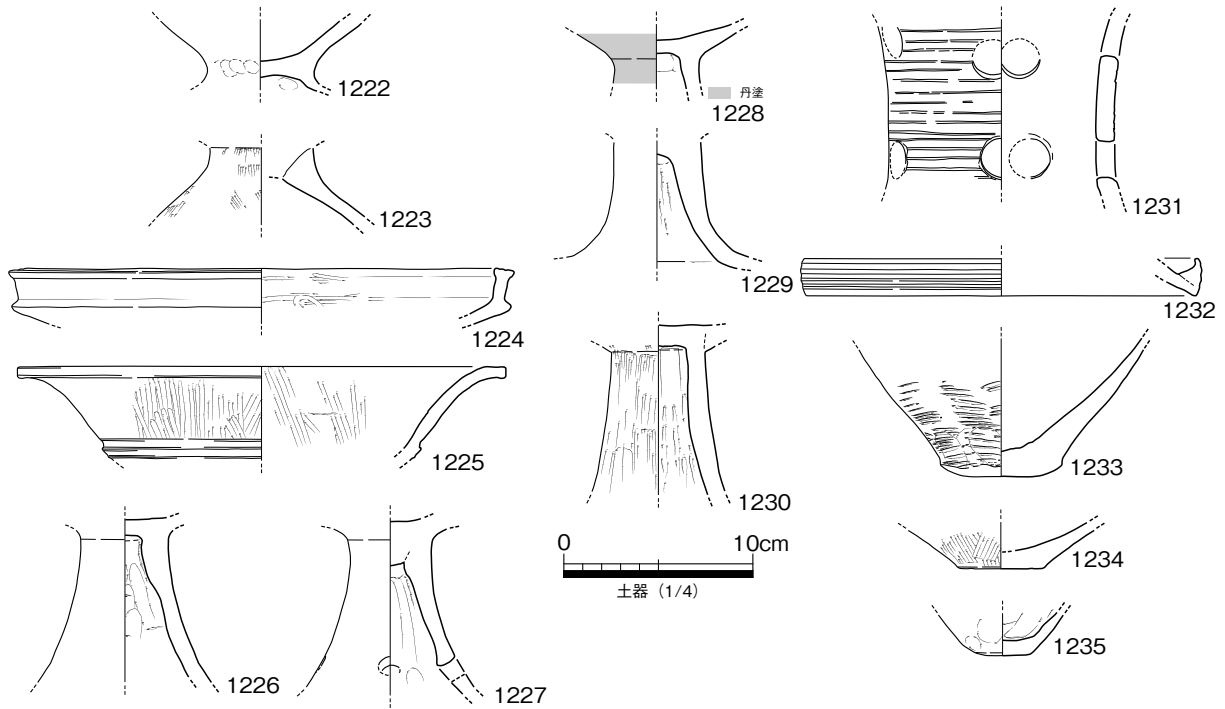
出土土器は終末期新段階に位置づけられるものが多く、その時期に建物の廃絶が行われたものと判断した。



第 158 図 豎穴建物 SH4016a 出土遺物実測図 1



第159図 竪穴建物 SH4016a 出土遺物実測図2



第 160 図 豎穴建物 SH4016a 出土遺物実測図 3